

叛旗

特別号

OCT. 1975

同盟内論争の結果と展望

- 序 同盟内論争の公開に際して＝共産同中央委/
I 9・24同盟大会への諸文書/
——三上総括、神津提案、各個意見表明選——
- II <きめられたこと>と<きめられないこと> /
——中央委通達8～9月、資料 全国AIF通信——
- III 回帰への道か？それとも飛躍への道か？ /
——今春以降の主要論争文書選——
-

共産主義者同盟
理論機関誌

目録

一 序

二 第一章

三 第二章

四 第三章

五 第四章

六 第五章

七 第六章

八 第七章

九 第八章

十 第九章

十一 第十章

十二 第十一章

十三 第十二章

十四 第十三章

十五 第十四章

十六 第十五章

十七 第十六章

十八 第十七章

十九 第十八章

二十 第十九章

二十一 第二十章

二十二 第二十一章

二十三 第二十二章

二十四 第二十三章

二十五 第二十四章

二十六 第二十五章

二十七 第二十六章

二十八 第二十七章

二十九 第二十八章

三十 第二十九章

叛旗 特別号

総目次

序 同盟内論争の公開に際して

共産主義者同盟中央委員会

1

I 9・24同盟大会への諸文書

三上治

3

一 総括と展望

神津陽

10

二 編集局会議報告書

神津陽

13

三 大会への提案

神津陽

21

四 意見表明選

神津陽

26

(1) 党内論争の結果と展望

神津陽

29

(2) 現況判断とたたかいの血路

神津陽

30

(3) 私の着目すること

神津陽

32

(4) 時代的困難の克服の途に

神津陽

35

(5) 現況を直視し、集団の修羅場からかくめいへ

神津陽

38

(6) 私的整理と現在V時の思想態度

神津陽

41

(7) 断片

神津陽

45

II へきめられたことVとへきめられないことV

一 BUND中央委通達

神津陽

49

8月24日号

神津陽

52

9月6日号

神津陽

55

9月12日号

神津陽

58

二 全国AIF通信(資料)

神津陽

63

8月15日号へ全国AIF大会招請状V

神津陽

66

9月5日号

神津陽

74

10月7日号

神津陽

86

III 回歸への道か?それとも飛躍への道か?

一 四月〜七月

神津陽

88

(1) 情勢論と補足的内容提起A・B・C

神津陽

94

(2) 四月大会への三上提案

神津陽

104

二 七月大会をめぐる

神津陽

113

(1) 七月大会への三上所見

神津陽

104

(2) 政治組織判断と展望獲得へ向けて(神津提案)

神津陽

94

三 八月期の論争点

神津陽

88

(1) 同盟への意見書

神津陽

86

(2) '75秋に際してのいくつかの提言

神津陽

74

編集後記

113

序 同盟内論争の公開に際して

共産主義者同盟
中央委員会

全国の同志、友人諸君、不幸な事態を伝えねばならない。70年6月戦旗派と分裂し同盟を建設して以来の、更に言えば、60年安保闘争以降のいわば叛期前史を人格的に代表してきたと内外共に評価されてきた指導的同志三上治の組織離脱についてである。

三上治は、本年九月下旬の同盟大会に、事前に中央委員会で確認、決定した組織指導上の混乱を惹起した責任と、統制違反への自己批判と決意文書に換えて別掲「総括と展望」文書を提出した。徹底した討議の上でその文書の撤回と政治思想、指導上の真執な総括を要求されるや、三上治は、期限付権利停止を申請し、総括の深化と、政治態度の鮮明を期すとの主張を下ろし、突然一切の対内、対外政治表現、活動の停止を宣言した。本年新年号政治局論文（大道無門）評価をめぐる対立以降においても、二月、四月同盟集会中止、九月天皇制集会・闘争提起と中止は、全会一致を旨として相互了解を画るといふ我々の原則が、何十回にも及ぶ討議と努力に拘らず、終に政治局、中央委における三上治と他のメンバーとの固定的対立として空転してしまふという残念な結果を迎えるにいたった。大会は止むなくこれを了承した。大会後、三上治は自ら、宣した最終結論をくつがえす言動を続け、増々唯一人の脱落を分派闘争、別党建設として強弁せんと恥の上乗りを重ねている。我々も、三上治もこの事態に対して、全ての同志、友人、「叛旗」購読者に回答する責務を負っている。同盟大会における最終結論をくつがえし、組織連絡

を断つ以前に、三上治より「総括と展望」文書の紙上公開の要請があり、我々もコメントを付して公表することを約した。我々は以下の経緯を付して三上治と読者への責を果したいと考える。

我が同盟は、周知のように、その形成と、実践の過程を通して、対権力との防衛上配慮すべき事項や、組織内問題として公開の要なき事項を除いて、政治思想領域における執着と厳密さを内外に自負してきたし、可能な限りの表現公開の原則を自らに課してきた。70年6月以降の野合戦旗派、情況派の、否それ以前に分裂したマル戦派、赤軍派を含めての第二次共産同系諸派の無惨なまでの四分五裂や路線転換に比して、外側から見れば驚異的検証を為してきた背後には、政治や組織そのものの相対化の帯域に固執し血路を拓かんとするの原則が自明なものとして血肉化されて在ったのである。

我々は、政治思想的にも、構成員の問題意識からも、自立思想や行動者集団や大衆闘争の産湯を使って政治界に押し出され、諸葛藤の末に不可避な分派―党派形成に踏み切ってきたし、政治―思想、自立―組織、大衆―闘争各々内部と、相互の矛盾に自覚的に激突してきた。我が組織においては、通常の党派が自明のものと疑わず援用している、指導―被指導系列や、多数決制や、分派禁止や、裏切り者のレッテル応酬やの、総じての権謀術策の政治関係を極力排せんとし、ただ政治思想の水準と内容と説得力とそのプロセスの鮮明化を唯一の組織、論争、方針決定の規準足らしめんとしてきた。

その経緯は、理論誌、新聞等のバックナンバーにおける、理論問題諸斗争への関わり、離脱者や、自供者や、組織矛盾や、ポルテージ低下の組織矛盾の切開の方法意識に示されてきただろう。他方、組織内決定においては、全員一致を原則とし、異論は各員が提出の義務を持ち、相互了解へ努力を重ねるという経験則を打ち樹てきたことは誇ってよいと考えている。

三上治は、我が組織の最高指導者の一人として、右の原則を率先して形成してきたし、他者に指示し、自らも批判され、政治組織としての我が同盟の歴史を困難な状況下で切り拓き、蓄積してきたのである。

三上治の「総括と展望」文書が、晴天のへきれきと写り、彼を除く全ての中央委員が機関の一員としての文書としてこれを認めず、大会で当文書の内容につき自己批判と撤回要求が一人の反論もなく決定されたことは以下の理由によっていた。

「総括と展望」文書が、今までの三上治の諸文章や、組織内討論や、指導と思想的連続性を有せぬこと。

また、「総括と展望」文書の内容が前半と後半で錯乱しており、かつ経過的歪曲や偽造があること。

更に、決定的なことは、右に述べてきた我が同盟内で討論と日常活動と闘争から培われてきた諸原則や気風を清算することによって、自らも我が組織をも辱しめばかりか、「政治指導では敗北したが政治思想では敗北していない」なる珍弁で恥ずべき自己合理化に終始していること等であった。

我が組織にあっては、將に自立・組織の矛盾に自覚的であるが故

に、三上治の政治指導の敗北は十五年間蓄積した政治思想の敗北なのであり、この間の日々の何十回にも及ぶ全ゆる会議や討論を介しての我々の衷心をもっての三上治への再生の用途をめぐる思想的批判を、彼は彼自身が否定してきた権謀術策政治のレウエルで分派準備が足りなかったと総括したのである。三上治が、大会における権利停止申請から、突然の一切の政治表現停止宣言、更に組織との連絡を一方的に断ち、自暴的にか十五年間の自負からか叛旗は辞めたが、政治運動は続けると愚痴ったり、公言したりの変容ぶりに我々は心底気恥かしいと思うが、それ以上に組織内部を信ぜず、外部へ働きかけんとする太宰治風に言えば「徒党の政治」患者への転落を哀れだと思ふ。政治思想の批判を、歪少な党派政治ですり抜けた三上治の政治思想的再生を我々は願って止まないが、彼が沈思熟考する途を択らず、酒場の政談に明け暮れている以上、今の所その可能性はない。現状の続く限り、今後三上治の一切の政治的言動は我々と無縁であること、だが自ら関わった我が組織への言及には批判もするし、然るべき責任もとってもらうことを表明し、党内論争公表への辞としたい。

(「叛旗」97号より転載)

I 9・24 大会への諸文書

一、総括と展望	三上治	3
二、編集局会議報告書		10
三、大会への提案	神津陽	13
四、意見表明選		21

一、総括と展望

三 上 治

(1) 党内闘争の現在と自己批判的立場

既報のどおり、私は「叛旗編集委員会」の第一期の解散と終焉を目前にして権利停止と除名の申請をした。

そして、この内的プロセスが不明瞭であるという批判を受けている。私はまず、この過程が多く諸君にそういった印象をあたえているとすれば、その一半の責任が、私の態度にあり、そのことを以下経緯を鮮明にしながら、自己批判的立場を明らかにしておこう。

自己批判的立場とは何か。正確には昨年夏以来、底流から部分的顕在化し、新年号の政治局論文（大道無門）の評価で具体化し、7月B大会で決定的段階に入った現在の階級的判断に対する対立を党内闘争や階級的判断に対する対立を党内闘争や論争として積極的に打ち出せなかつたところにもとめられる。

本年以降、中央委員会での論争としてたちあられ、日常活動上の評価をめぐる対立としてあらわれてきた諸現象は当初の段階では経験や資質的な差なのかと考えてきたが、“表現” “日常構成” をめぐって理論的にも明瞭になつた段階（叛旗10号）ではつきりと党内論争や党内闘争として自己の立場を全面化すべきであつたらうと思ふ。私はそれに対して自己規制というか、ある種のちゅうちよをしてきた。それは7月大会以来、党内論争や党内闘争に入れば分派

闘争へ転化するという予感があり、旧来の分派闘争のスタイルを改めて、それを避けたいという欲求が強かつたということである。その理由は全会一致でことを進め、路線や方針より、思想的・感性的共感を重じ、指導部での対立が決定的段階へくれば組織活動自体を止めようと決意してきた私にとって、どう処理したらいいのか、わからなかつたところがあつたというのが、大きいと云えよう。そして、私が転換の問題を打ち出せば、それはSECRET以来のコントラ「前衛」コミュニケーションへのより徹底的な純化となり、そのプロセスを叛旗派内の階程として進めるべきか、一人からそれを始めるべきか、その想定がうまくつかなかつたというべきであろう。私の気持は一担組織を解体し、コントラ「前衛」コミュニケーションの側へ純化することなしに血路はないという想いが強力にある一方でいかかわらず叛旗総体がそうなり得ないのなら、とどまっても（妥協してでも）その階程を歩むべきではないかと考えの間で揺れ、動いてきたのである。

何故なら、私なりに「叛旗」の歴史は個々のメンバーとの相互関係の歴史であり、哀歓共々私をおしとどめるものがあり、また私が同志たちの階級判断に批判的であつたとしても、その現在には私は責任を負うべきであり、まず自らの指導の敗北とすべきであると考えたからである。

8月以降の中央委員会の内部での討論過程はあらゆる面での対立感と見解の相違をはつきりさせ、その現実感覚や感性的なちがいの明確化は以前から秘かに推察していたものがあつたのかという辛い思いをもたらした。私が新聞用に書いた対談形式の原稿の中止、

9・29・30についての日大会の提議とそれとやりやめに対する同意、9・1・2政治局、中央委員会に於ける二―三月間の公的表現（新聞）の執筆中止と限定的組織活動の提案は私の方からギリギリの歩みよりの志向であったが、それはまた他の中央委の同志の側からの配慮に対する私なりの返礼であったといえよう。私は中央委での他の同志からの単独表現者……思想グループ……というのは問題にすならなかった。私がそれらに黙して対応したのは自分なりに想定した政治ヴィジョンや構想に自信がなかったからではなく、これまでやってきた同志と歩をともにできないなら、私は自らの路を一人ではじめるのが筋ではないかというように考えたからである。私なりの訣れ方だと考えたのだ。

これらの経緯が、政治指導として、一人がってなものだといわれれば、その批判は甘受せねばなるまい。

私はこの間の経緯をふまえて以下、総括を提案する。それにあたって、今後の立場を書いておこう。

(2) 何が根底の問題なのか

この間の対立や論争は、旧来の意味での理念や路線上のそれとしてあらわれず、主に日常生活の評価やそこでの態度の問題として現象した。対立や矛盾は一見すると卑少で、微細な契機から始る。私はそれが悪いということではなく、きわめて貴重なことであると考えている。何故なら一般理論の場合、背後にかくれてしまうと、現実的感性や関係意識がはつきりあらわれるし、その中にこそ、その人間が現実ととり結んでいるものの水準がもっとも明瞭にあらわれるし、

して迫ろうとしながら、何故にそれは功を奏さなかったのであろうか。

旧来の意味で課題を扱えば空洞を拡大させ、媒介を喪失すれば、現実的通路の喪失となるという矛盾について私は必死で解こうと試みたし、私が、天皇制・部落・ベトナム・労働運動等々について新聞紙上で試みた展開はいろいろの領域でぶつかっている問題と通底するし、限界はともあれ、そのポイントのとりかたは間違っていないかと思う。この中で私が展開せんとしたのは何か。

(1) 旧来の意味で課題自体が先験的に政治的意味をもつという幻想が喪失していくのは必然であり、それは自由国家の成熟と戦後ナショナリズムに根拠があること。

(2) にもかかわらず、私たちが、何らかのかたちで政治的課題の媒介を不可欠とし、その媒介を失えば（媒介する過程には心的過程も含まれる）現実的通路の（政治を介した）の喪失となり、その意味で政治組織に危機となるのは政治（共同幻想）も含めた人間の実存様式における不可避性というべき存在構造に根拠を持っていること。この不可避性は人間の歴史が幻想を累積させ、それとの交通に入るといふことと、遠隔対象性への自然過程的志向を含むこと。

(3) それ故に、ここでの問題は、そういった課題へ人々を啓もうし、それに向けての宣伝・煽動するのではなく、逆にその死滅に向けた還相的展開、つまり現存性へ向っての下向へ、その下降は自己の共同の幻想自体の自己破壊であり、それから醒めていくものとして想定される。この下降過程は、歴史に累積され

組織・共同性が生身の人間において構成されるとすれば、組織の水準もまたその中にあらわれてくるからである。

昨春秋以降、△組織▽を覆っていた危機感とはいったい何であったであろうか。それは大きく二つの内容を有していたと思われる。

その一つは中期路線の模索というかたちで語られた政治的課題や主題の喪失感であり、沖繩・砂川・三里塚の闘争環が持続のための別の段階への移行をせまられ、早稲田闘争（対革マル）とインフレ闘争が中途半端なかたちで終焉を迫られた段階で、やるべきがない、なにをやってもよいかわからないという状況においやられたことである。たしかに反フォード闘争や部落問題への批判的解明等々いくつか闘いは試みられたが、そこで私たちをおそっている危機感深まるばかりであった。この過程は四月以降も継承され、今日にいたっている。ここではいったい何がおこっていたのであろうか。

それはこれまでの経験的延長の上に、次々と出てくるスケジュールや課題に対応していても空洞性を拡大させるだけであり、そういった方法はとりえないという受感の深化であり、それは、政治課題自体に先験的意味があたえられるという共同性や個別的倫理の解体に根拠をもち（不可避性としての恣意的自由の深化）、それを必然的過程と洞察した。そしてこれをプラスの契機として生かそうと考えた。

だが他方で、課題としてたちあらわれてくるものの媒介なしには政治（共同性）そのものの対他性の喪失となるという他の面をも受感しており、実際のところ、媒介をほとんど無関心の関心においやり、そのことよって政治の現実的通路を喪失していく事態が他方で進行したといえる。いく度か試みられ、それなりに必死に中期路線と

た共同の幻想の歴史的溯行であり、親・社会・書物・サークル政治組織・獄という遠隔対象性へ向った心性や、そうある現実過程を逆にたどることであり、課題をそういった方向へ沈めていくことなのだ。

私は私の展開が現存過程にとどかないという批判を受けた。たしかに、この下降の過程・幻想へ向う自然過程と、それ故に国家や類似する集団や、そういった大衆的欲求自体と衝突しなかったとすれば、それはそうされるべきであろう。だが共同の幻想や国家から離反していく、つまり生活的現存を組織しなかったとすれば当然である。分離し、そこから（国家）（政治）からはなれよ、そこへ近よるなというのが、下降の内容だからである。

(4) この領域で私が自己批判的に、その指導を問われなければならず、今後の教訓とせねばならないのは何か。それは、こういった課題が、その媒介としての現実的通路が、人々を政治に向けて、組織し、レーニン流の宣伝・煽動のためということを破壊し、唯だ不可避性と、下降へ向う自己の切実さという点へ、もっとも徹底しきれなかったことである。レーニンの、啓蒙的組織理念に基く、政治課題というパターンをとことん破壊し、唯だ唯だその切実さと不可避性に向けて徹底出来なかったことである。例えば、新聞を何らかの宣伝・煽動の意味として考えれば、意味を喪失し、不可避性と自己の切実さに向って書くとき、逆に共同の意味となるかも知れないと考え、そうしてきた。

だがそこはどこかうしろめたさがあったのだ。この問題をもっともっと徹底出来なかったことを批判されるべきであろう。自己に向って書くという過程は一見すると文学に向う自己幻想を対象にするように見えるかも知れないが、共同性・共同の幻想を、全幻想を対象にするとき、かならず他対象は入っているものであり、その手ごたえはあり、それなしには書けないのである。この事情はアジテーションや行動においてもそうであり、私の60年以降の立場であったが、そのことをもっと断固として主張しなかつたことを批判されるべきであろう。

私は「叛旗」が結成以来、旧来の意味での組織メンバー以外に多くのシンパを持ち、その基礎と手ごたえこそ私たちが開かれてあり、政治組織が自然発生的に閉じられていくことへの歯止めとなる可能性であると信じてきた。合宿で指導的メンバーから吉本隆明ファン+知的興味云々という発言を聞いたとき、驚きであつただけでなく、コントラ「前衛」コミニケーションとはどう解されてきたのか、あらためて問う他なかつた。

(例) 政治的課題が旧来の意味あいでの先験的政治的意味を喪失し、にもかかわらず、媒介として不可決であるといった矛盾の中で、書く対象にせよ、行為の対象にせよ、政治的な共通の媒介へ転化するために私がつたててきたのは、その不可避性を過程として、押えることであり、その背後に沈黙的に対応しているものの手ごたえを押さえることであつた。

旧来の「書き方」(宣伝・煽動)、「行動」がやれなくなつていく意味を逆にプラスの契機へ転化することであつたが、この像Vやそれに向う倫理の自己破壊に向っていくと判断しており、それをプラスの契機と考へてきた。とすると当然にも、そこで求められるのは不可避性として関わつた組織(共同性、もしくはそこでの諸関係といつてもよい)を還相に向けて展開することであり、そういつた下降への展開とすることであり、それは自己表現や生活過程を覆り種々の共同幻想自体を粉砕するといふように内容は定められるであらう。

私が△組織V、△共同性、またその内部での諸関係Vの中で断えず出会つてきた困惑は、こういつた組織・関係の位相と現実に私たちが構成するそれとが矛盾するのではないかといふことであつた。

何故なら、私たちが△組織V、△共同性Vを組むとき、それがレーニンの範疇の党派として存在するほかないことは主観を越えたものとしてあることは疑えないからである。

私はこの矛盾に対して以下の処置をこうしてきた。

(イ) その一つは政治的組織や幻想の共同性を不可避性として確定し、それ自体を意味的世界として了解する。そして構造的には、自己幻想・対幻想・共同幻想はそれぞれ独自の位相にあり、この間には逆立構造があること。共同幻想や組織に向う不可避性は自体とみる限り自然過程であり、遠隔対象性への心的過程であり、あたかも親・世代の否定から書物にまでいたるように、社会的組織から政治組織へ、半知識人から知識人へ、活動家から官僚へ向う過程であり、私たちの課題はそこからの還相であり、この過程は「書くこと」、「行動すること」、「組織—関

の過程がレーニンの組織論と対立し、そういつた要素としての私たちの組織の内在性の自己破壊へ徹底することが中途半端であつたことこそくりかえすまでもなく自己批判の対象であらう。

(ロ) 中期路線の模索以来、必死に問いつめられてきた政治路線や課題はいつたいどうなるのか。それは不可避であると考へれば何でもよいということになる。組織、共同性にとってはその水準がだいたい確定されていくものなのだ。

要はその扱い方である。その過程はレーニンの意味での啓もうの対象でも、宣伝・煽動の対象でもなく、不可避性を媒介に、幻想上の革命と生活的切実さの双方へ、つまり自立の二つの方向に向って還相、もしくは下降していくであらうし、この過程は二つの形でやりたいからやるといふように課題自体が移行していくであらうし、それは「……べき」的政治的死滅過程である。

昨年末、△組織V自体を覆つてきた危機感のもう一つは何であらうか。その内容は組織自体の停滞感であり、活性化の提案自体が繰返えされなければならなかつた事態である。いつた、この根底を覆つていた要因は何か。レーニンの意味での組織の(党)の必然性が、政治的課題と同じように根拠を喪失させ、自体を浮遊化していくことにある。もう一つは、個々の構成員の幻想構成の困難さに対応するよう、生活過程の構成の困難さが、組織活動自体を困難にしていることである。

私は、△組織V自体は不可避性として想定しており、その不可避性は恣意的自由や私利私欲の拡大によって、旧来の△組織「係」から自由になることである。

(ロ) いつたこの還相過程、下降過程とは何か。それは心的遠隔性に向う体験、経験の逆過程を歩みながら、共同性や組織自体と衝突することであらうが(これは自立の過程であり、そういつた展開であるがV、この展開のプロセスはどうであるのか。自由国家のもたらす恣意的自由より、もっと速いスピードで、古典的、啓蒙的的政治理念や組織の自己解体をすることであり、この過程は幻想の革命と自立斗争へ向うことであり、この双方の展開は旧来の組織、共同性とういふ連環にたつたのであるうか。

(イ) 私は、我々の共同性や組織がレーニンによって考察され、ヌターリンによって定式化されたそれを不可避な歴史性として刻印され、その枠を遺伝的素質として受けついでいる面と自立派の伝統によるコントラ「前衛」コミニケーションの間の均衡のなかにあり、幻想構成の困難さと自立斗争の不在は、共同性や組織の面を膨化させ、前者の部分への傾斜が始まるのではないかと危惧してきた。

(ロ) この傾斜をふせぐ措置はどのように考えられ、想定されることか可能であつたのか。その一つはその幻想構成の像が普遍性に向って開かれているかであり、他の一つは個々の構成員の思想的自立である。この問題は、組織・共同性の内部ではどうあらわれるのか。この問題こそ組織、その日常構成をめぐる私と私の批判者たちとの対立であつた。

まず事態をはっきりさせよう。私のなかには8月16日以降

のコントラ「前衛」コミニケーションとレーニン以降の前衛論の混在として「叛旗」の現実をみる認識があり、それは情勢的な不可避性と判断し、過渡期論はそれに支えられていた。

この矛盾は共同性・組織の内部でどうたちあらわれるのか。それは必然的に、恣意的・反組織的傾向と、組織の強調としての対立と均衡としてあらわれる。

その当否は別にして、それを必然と認識していたのだ。何故なら、コントラ「前衛」コミニケーション、つまり自立への志向は私たちが混在させてきたレーニン以降の前衛論（共同性論）の自己破壊に向うし、現在まで私たちがとってきた組織の必要性の根拠を疑ったはずであり、逆にこの間組織（共同性）の実体は前衛論のエレメントで支えられてきたのだからだ。

私はこの間の集団論や日常構成論がただ形を変えた前衛論であり、啓もうの内容が、言語・行為から関係に移っただけであり、それはその位相での前衛論なのだ。

この間、関係について、とりわけ政治組織内の相互関係について、多くの批判を受けてきた。それに対する私の反論はまったく通じなかったといつてよい。レーニンの前衛論は位階性に昇華する、つまり官僚性へ必然のように転化するものであり、アジア的諸形態では平等な、自然な（なまの）関係論に支えられてあらわれてくる。

「いったい「政治」「共同性」における関係とはいったいなんなのだ。関係の重さ、累積された関係、それは何んなのか。相互の現存感覚のとり込み、どのように語られようが、それは

私にとって、政治的關係、共同的關係自体を還相に向わしめるとは、そういった關係自体の死滅であるが、これは当面の段階で、他者に啓もう的關係をすることのあたり限りの拒絶であり、戦争へ到る共有感・共生感の拒絶であり、それから醒めてあることなのだ。

私は「書くということ」の神話や幻想から自由になり、解放されるためにこそ書けなければならなかったように、「行動」、「共同の諸關係」からそうなるためにこそ、そうせねばならなかったのだ。

私は今日、政治運動、共同性がきりをもむように内ゲバに入っていく必然的過程を關係、關係意識自体の危機にみている。その理由はレーニンの前衛論にもづく關係・關係意識が恣意的自由の波にあらわれ、行為の共同性から革命戦争に到る共有感の底割れに到っていることにあるのだ。私は近親憎悪に似た關係のきりもみから自体を解放する道は、旧来の政治的な場所を介した關係の自己破壊や相対化であり、このプロセスは旧来的・レーニンの、つまり場所性へおいつめられていく、共同性や共同關係の二つの方向への解体・再編するしかないのである。それは「叛旗」が結成以来、混在せしめてきた前衛論や「共同性」自体の放棄からしかはじまらない。それは「場所」を不可決とする組織を、徹底して地域性へ、自立斗争へきりぎりぎりのところまで下降せしめることであり、その方向に向って段階的プロセスを歩むとしても、そこへ志向させることであり、他方で「場所性」が第一義の問題とならない幻想上の革命へ自体を向わしめることである。

この二つの過程は幻想上の革命と政治、自立斗争と政治の矛盾を、旧来のように思想と政治、もしくは「党—軍—統一戦線」、共青同

家族や、日常的諸關係から遠隔対象性へ離脱していく、關係意識であり、その共生感や共有感である。

かつて私は、家族、日常的諸關係より、そういった、日常的な、共同性を介した關係意識や、共生感に人間の人間らしさをもとめていった。それが結局戦争の本質であり、そこから醒めていくよりほかならないのだということを自覚するほかなかった地点から私は還相に向った。いったい關係や、關係意識自体から還相に転化するとは何か。それは、政治的關係や關係意識自体から解放され、離脱することであり、それをあたり限り部分化することである。はつきりいうなら、私は政治的關係などもちたくなないのであり、そういった關係意識自体から解放されたいのである。許されることなら家族の關係と少数の友人關係で沢山なのだ。だからこそ、政治の中では家族をけとばす倫理をたててきた。

何故、お前は政治的共同的關係をもつのか。それは、唯だ不可避性と呼ぶほかないのである。私は意志的、無意識的に政治的關係や、共同關係から離脱していくメンバーに批判的ではなかったし、今后もそうであろう。政治的關係や共同關係自体から解放され、そのように生きればそれがもっとも価値ある生き方だからだ。「政治をやるな」というのが最高の政治だ。「オルグするな」というのはたいしたことないであり、オルグしてしまうことが怖いのだ」という私の立論はどのようにけとられたにせよ本音だったのだ。私はなにより私が私を政治的存在たらしめていることに憎悪しているのだ。

建設等の中間的組織形態を使って処理していた過程の自己批判的清算になるかも知れないが、そこまでことを進めるほかないのではなか。

3月以降、急速に進められた組織再編に対して私が判断を下さず、かつ、ことを積極的に（反対なら反対なり）解決しえなかったことは自己批判せねばならない。多くの諸君から批判のあった私の日常構成について伏せていたこともそうであろう。私は私なりに組織再編の問題について、相互關係の問題について考えてきたのであるが、それ自体を第一義的に考えることに疑問を持っていた。何故なら、組織問題が、第一義的に浮上してくる場合、經驗的にみて、幻想の構成と自立斗争との連関が断れ、自ら閉じられていく過程であり、このことを全体のなかで位置づけることを失っていくのでは考え難い、また何故組織なのだという問い自体を失っていくのでは考えざるをえなかったからである。だが、くりかえすまでもなく、ここで私の指導が自己批判的に、まさに自己批判的に問われるのは、政治革命と幻想上の革命、政治革命と自立斗争の間のあいまいな連環を后者の位相へ突き出し、このことを媒介に、組織イメージ自体をまったく転換せしめるというところまで大胆に打ち出せなかったことである。この組織論はS E O T 6以来のコントラ「前衛」コミニケーションの純化であり、中央より地区へ、地区より自立斗争の当体へ、そこでは生活の必然性と不可避にもとづく斗争と組織へ、自体として自立せよということであり、誰れもたよるな唯己れだけを頼めというように、下放するのでなく、叛旗自体を解体するのであり、他方で幻想の革命を必須とする部分はそれに必要な自己表現

の場をも創出するというように解体するのである。この過程にはいくつかの階程が想定されるとしても、そこまでいきつかなければ、結局、中途半端なところにとどまるのである。ここまでいきつければ政治組織としての「叛旗」は一担消しとんでしまいが、自立と生活の根柢から斗いの端初につけるのであり、なおそこから不可避に政治課題が登上すれば、自己だけでなく、他の党派政治の立場となるのだ。個々の確固とした自立が前提となるとしても、そこまでいきつければ、旧来の意味での組織はなくとも、共同性はのこるのである。

私は孤立の意味をかたった。これは私語のなかで、組織などにたよらず、自分だけを頼めというところやれるのかと問うていたのである。私は、政治・組織、そこでの諸関係を還相へ転化するといふことと関連するのである。はっきりいえば、政治的な相互関係や現存性のとり込みなどといっている限りはどうかという事はないのだ。何故なら闘いというのはなによりも当人が自ら誰れも頼らずやれるかというようにあり、真に怖れるべき相互関係が政治的他者でなく、生活者大衆であることははっきりしているからだ。

組織問題が危機的にあらわれてくる要因の問題について、Xの〇〇〇問題について私は自分があいまいであり、他者のそういった問題へ関われなかったという批判をうけたが、私は思想問題と別にもっと現実的根柢を押えてきたつもりである。これについては多くを語りたくない。ここでは思想など生の意味づけを与えはしないといふこと、ある事実が、事実こそが決定的なのである(75年9月)

注・本稿についてのコメントは新聞97号を参照してほしい。

ジでは規範強化にしかならないし、私の考えでは、日常構成を中心に政治集団は存在せず、知識人集団であり、日常構成を相対化する方向でしかこの間の総括はできないし、かつ、連赤を止場することはできない。また組織を必要としないといふことを前提にしないかぎり政治表現は血路はない。」という回答があった。これに対してSより「編集局で相互関係に異和があり、ムスケルが残っているという次元の問題と中央委での離れる離れないの問題は次元が異なっており、中央委との相互関係はそうなっているのではないか。

私達の内部では、相互了解がなく、ここに誠意を示さなかったことについて、これは政治思想的にも全く納得がいかないし、相互関係のけじめのつけ方が最も政治思想的にも人格的にもはずせないところなのではないか。日常的な相互関係に対する判断のアイマイさの累積が、問われるところであり、意見のくいちがいはないのではないか。それが編集局とのつきあい方のあいまいさにはねかえっているのではないか。また中央委から離れたことについては、意見のくいちがいは、政治方針の分岐であるのならば、ここでそんなことを言わないで中央委で拮抗するべきであり、むしろ中央委決定を受容したのではないか。内容を受容したのか、決定し規範に異和をもちつつ受容したのかは問わないとしても内省のポイントとしては最もそこが重要ではないか。今の話を聞けば、多数派と少数派の分岐とらうことになり、政治イメージの分岐ならば分派になると思うが、どうか」

三上 「内省の問題でいえば、私もそこが重要であり、なぜ分派できなかったのか、ということについて内省しているし、今もそこが

二、編集局会議報告書

① 編集局においては、キャップ三上の9・11権利停止処分の際には小さくなかった。

現局員のみによる機関維持は困難で、次のイメージ、日常判断への最低位の条件を充たすためBの編集局参加をえて、編集局は不十分なから稼働している。しかし現メンバー各自の内面的葛藤、持続の側からは、現に累積している課題、疑問についての相互討論、どこで訣別し得ないのか、等を明らかにする回路(負的ではあれ)を不可欠としている(X・S)判断のもと、指導放棄した三上、同調者Iに対して会議出席を要請し、9月19日、全メンバーで 編集局会議をもった。(主要な提起は、X・Sのレジュメが提出されているので参照されたい。)討論内容は以下の通りである。

② 冒頭、Xの「中央委員会レベルでの三上の自己権利停止申請過程での相互了解はともかくとしても、編集局レベルでの三上及びIの離れ方について、了解できないし疑問がある。」という質問に対し、三上は、「私は政治指導者としての組織的位置を第一に考えていたので、中央委から離れば自動的に編集局から離れるということになる。中央委から離れて編集局に居ること自体矛盾であり、中央委と編集局はそういう連関にある。また中央委では、相互に意見が食い違ひ、関係のイメージをめぐって対立した。A等のイメージ

ひっかかっている。政治思想が大きな転換期にきており、私も15年培ってきた思想がすぐに転換できる訳がなくて時間がかかる。政治指導上は敗北したけれども政治思想的には敗北していない。分派し潜在的分派か公然たる分派かは問わないとしても、しなければならぬ。 という信念は固くあるが、再生するのには、三ヶ月か半年かはわからないが時間がかかる。政治イメージが異なり相寄れない以上離れるのは必然であり、編集局にだけ留まるのは矛盾である。私の考えでは政治行動が封殺され、言語表現がきつくなるとくるという状況があり、日常編成と言語表現の間の連関があいまいに中間型態として混在していることで組織問題に敗北している。このことは、旧来官僚制化してきた要素でもあるが、ここで表現と日常の間は何をはめるのが問題であり、表現から日常編成をできるだけ相対化する方向で問題を考えている。三上以外の中央委メンバー等の意見は日常を等価というが実際は異なる働いているものがあり、いないものがあり、書き手があり、ムスケルをやる人がいる……という具合にどこまでも不平等であり、等価であるといふのは絶対矛盾である。政治組織がこれからどこにゆくかということについて、私は中央委で意見を言ったが、関係をつめる、つめあわないうことばかり言っていて、どこにゆくのかということを行わな。君達が考える関係というのは何なのだ。」

S 「関係というのはイメージによって異なるというふうなものではない。関係を表現や幻想や還元したり、表現が関係を換起するといふようにたててきたこれまでの経験が、自覚的要素としては、現在の組織問題を惹起させてきたのではないか。現にある関係はど

これまでいっても表現によって止場できない。

政治組織が幻想的關係にあるというのは現にそりだということ、それを肯定できないものだというをはっきりさせなければならぬのではないか。幻想によって關係を喚起するといふときの幻想とは自己幻想であり、個体の幻想表現は政治表現ではなく、そこを無造作にしているのではないか。表現から日常編成を相対化させるというのは全く逆であり、集団各員の現存がまずあり、24時間がまずあり、25時間目をデッチアゲルということははずせない。何があつての表現かがいまいであり、24時間目の中に表現を設定しているのではないか。關係というのは実刑者と非実刑者を設定してもよいし、指導し被指導を想定してもよい。私の経験でいっても、そこでの相互關係の切迫感強いし、一歩まちがえば自己解體感にほいるようなところが常にある。その領域では、書き言葉、觀念に觀念を止場する回路は全く関与しないし、人間と人間が代替しえないというところで落ちつくこともできない。この關係の中では、書き言葉話し言葉の一切は不要であり、常に凍っている世界であり、感情を自己統括しうる領域でもない。政治域、關係域では、この問題は、自己統括に負わせるのではなく、言う一言もないの間での相互關係の持続―埋葬の問題であり、24時間をやり25時間目をデッチアゲる緊張度の持続、相互拮抗の問題である。言えは凍ってしまふ世界というのは個体が負うべきものではなく、相互で負うべきものであり、こちらが避ければ、その分他者がひき受けるという關係にはいる。このことについて三上は例えば11・19 斗争の指導を為したことに於て、私は不満がある。I氏についてもある。11・19の被

たと思つているのか。またそういう言い方は指導の敗北の責任回避ではないか。」

I 「關係について政治イメージについての意見は、三上と同感である。Sの責任追求については考えるところがあるが、ついでそれは、君自身の問題であり、一貫した生活態度を三上がどうたてきたのかにあると思う。残った問題は個人的につきあう。私は中央委の三上に対する追いつめ方、閣から閣への葬り方、文書の一方通行的な配布をみるにつけ上げつないと思つたし、中央委の指導は拒絶しようと思つた。信念は変らない。」

Sa 「三上は閣から閣へ葬られていない。むしろこれまで閣から閣へ葬りさせられてきた人がほろ大にいる。このことに対する三上の判断が異つているのであり、この判断、組織基準の形成が今問題になつていのではないか。」

Mw 「Aの三上への個人意見書に私は驚いた。しかし、うまく判断できず、保留しているか、このままではいられない。何とか考へてつめたいがよく言えない。」

K 「私としては、いろいろ不満があるがよく言えない。私の疑問に関しては、三上は答えていな。」

三上 「じゃまたやろう」

S 「文書を提出しない限り、やつても不毛だ。すれちがいにつては、意見のくいちがいで済まされたいし、言え言えいさりになつていて、内省過程のつみ重ねというイメージにはならない。三上は積極的に編集局をもつ必要はあるのか。「三上」「さ」「さ」なは不毛であるし、当面はやつても仕方ない。それ分派の信念が

告あるいは、私達にあたえたもの、あたえられたものについて重く、このことについてはどう責任をとるのか。」

三上 「責任はとる。しかし、君が実刑者に対して責任をとるといふとき、どういふことで責任をとるのか。現存の階級社会の中では、關係は不平等であり、窮極的には、実刑は個人がひきうけなければならぬ。」

個人と個人が階級社会の中で不平等におかれていふということに対して、君達が何かを為しうると考へているのは空想になる。

私はそういう關係の不平等性を官僚制として外化するのではないところで表現を媒介した集団を想定している。私が責任をとるといふとき（指導の敗北は認めるが）表現の客観性、普遍性の到達する途につくことでそうする。」

S 「それは知的な上昇過程にすぎない。觀念に觀念を止場する回路に關係を回収することはできないし、そういうところでは様々不満がでていふ。指導で敗北し思想的に敗北してないといふことは全く私には解らない。そういう余裕もなければ、政治指導や政治思想といふのは現在思想であり、これまでの業績でも、これからの研鑽でもない。」

三上 「政治集団は幻想的關係であるとしか考へられない。購読者に与えた影響は私が再生して回収し、それに答える。私には政治集団メンバーとの關係よりも、購読者との關係の方が重いかもしれない。言語的殺人をやっているかもしれないからだ。」

S 「言語的殺人とは何だ。三上は本当に言語的殺人をやつてきやらないといふならば、編集局レベルの問題でもない。「三上「信念は変らない。大会で信念を表明するつもりだ。」Sでは大会後に編集局会議をもつ可能性だけを確認して、今日はもう終了していいのではないか。」

三上 「いい。大会までにまとまるかどうか解らない。一年かかるか二年かかるかわからない。」

ほぼ六時間にわたつて前述の討論はなされた。編集局レベルで決着つくべき領域があると思われたが、アイマイのまま終つた。

三 大会への提案

我が「かくめい」と政治的血路

神 津 陽

① 爆弾と内ゲバを尖端とする現下の政治運動は、予め出口を閉ざされているかの時代状況の象徴的發現である。それは我々にとつては、自らの意志とは無縁に、情勢がはらんし、インフレにほんろうされ、諸關係の共同性内部の心労を強いられている。共時的な大衆的日常の問題であり、かつ二重に我々の政治運動が自らの政治経験をくりこみ、国家的共同性拡散下での時代状況と本質的に抗せんとなれば避け難く浮上する（政治Vの時代的規定性でもある。爆弾や内ゲバが時代状況の尖端的、本質的、政治的發現であり、他方で政治思想水準からいえば構造改革論と、基本的共同性が有効的国家（一対抗的国家）思想として相補的に出現している。

この尖端的政治への権力と、国家的一党派的政治思想水準のメ

は、この日本をとってみれば、戦后民主主義と解放軍規定、60年安保での大衆的エネルギーとBUND理論、また我々の経験域では全共斗Mの全社会的なと八派指下の古典性等として対比可能な、時代を形成する無定型のエネルギーと、それを収約し、方向づけんとする政治、実践、組織の断層と見てとれる。我々はこれらの局面にどう対処してきたか、今いかなる地点から、何を回路として克服せんとするかへの判断の前提は、かかる現状認識を土俵とする他はなし。

私は、「実践的試練を、手を汚さずして理論的に批判する」革マル主義も、その延命の構造も拒絶した地点で、思想も政治も形成してきた。それは、日共「近代文学」批判に端を発した、獄中18年をちらつかせての政治への思想的批判禁止のレヴェルの克服された問題の位相ではない。書物を傍線を引いて理解する知の内部での衝激とは全く別な、自らの家族、職場、日常における変革の異質な衝撃の扱い方を言っているのだ。

69年敗北以降の後退戦においては、政治が政治としてこの異質な衝撃を突き出し得ず、三里塚等を例外として、局所的な孤立的悪戦の裡に発現を余儀なくされた。我々は60年代後半の流動する状況に全力で応えてきたが、思想的に全時代を把え切ったという実感は個体に回収され、政治運動としては膨大な回答すべき思想課題の山積み、三ヶタすれすれの我が党派と、シコシコの悪戦の持続が残った。といってもよい。我々は、思想的に後退戦を克服せねばどのような政治Mも60年代後半の遺産の食いつぶしにしかならぬという痛覚と、小数であれ、局所的であれ、多々の持場で闘い続けることを、時代

ている。総体的社会ウィジョンの構成においても、大衆原像の引き寄せにおいても、かかる時代状況の側からの変容に直面し、透視することは、我々の体験的、感性的、それ故に思想的血路であると思われる。

爆弾も、内ゲバも、それ自体からしても、イデオロギーの意味づけからしても、何らの新たなウィジョンを導くことはない。だが、政治的有効性を断念した上で世界的に爆弾は続出し、脱イデオロギー化した内ゲバは国家、党派、職場、家族を貫いている。

爆弾や内ゲバが我々にとって無縁ではないとは、我々がそれらを為すか拒絶するかとして意味を有しているのではなく、それらを浮上させる推力の共存性を指しているのである。爆弾が国家、政治共同性への物理的反撃（水準的には日本におけるそれは、アラブ、南米、西独、米等に数段劣る）にすぎず、何よりも閉塞的現状からの昇天として、大衆の非日常志向を代弁している限り、大衆が自ら起つ契機足ることはない。他方、内ゲバは栄光のニクソンから庶民フォードへ、田中から三木へ、社会主義専制から多頭支配へ、日共の宗教対策、社党からの総評の自立化、新左翼各派内分裂と野合集散セレモニー的職場運動、インフレ下の住民Mの利害集団化、蒸発、子捨てと、遺構的家族との密通等を通して、国家・社会においても、家族においても、自己総括においても誰もが心的共犯者である状況の指標である。

私は、現在の所政治判断として爆弾も内ゲバも拒否するが、全政治的転換が国家水準の止場を帰結する方途は、内ゲバを状況の指標として直視し、全幻想構成の転換を党派性の止場として為す側に在

る側から強いられてきたといつてよい。

だが、私が政治、思想、状況に対する時、手離さなかつた規準は、自分が、関係が、生活が変わる（変わらせられる）ことと、時代的大衆的、政治的、理論的課題との連関への判断にあった。私にとって不可避な転換を迫る契機も、意志的に決断を下す際の鏡も、己れにとっての感性の成熟場と言わねば、混沌と矛盾と時代的共感や流行物への異和やの中での現存的、共時的戦場で終始した。いわば、全共斗Mが下らぬイデオロギーに引きずられて行くという了解よりも、全国的波及を不可避とする、現存的、感性的根拠の側で思想を引き寄せてきた心算である。

60年代後半以降の根源的波及力を持つ諸斗争は全て我々が名づけた政治的斗争、ないし社会的政治斗争の内にある。全共斗も、三里塚も、諸差別反対斗争も、現下の爆弾、内ゲバも、オソドックスな政治思想、実践の対象外にある。政治思想水準から言えば、差別告発斗争も、爆弾斗争も下らぬイデオロギーに粉飾されているし、それらをいくら積み重ねた所で自由国家水準（対抗的国家形成思想としての構改論）を超え出ず、吸収されるに至ることは自明と思える。

だが、全共斗Mが意識の私所有が社会的意味（学問による協力、社会還元、社会正義の実現のetc）をそぎ落とし、個人の趣味へ追いやったように、ウィメンズ・リヴはその延長で生活の中での関係の交差可能性を問うた。現下の爆弾の続発は閉塞的日常生活からの昇華としての大衆的願望をロマン的に代弁し、内ゲバは共同性拡散下の関係意識と判断の自己統括不能と、習俗への同致の不可避性を貫くと考える。もちろん全幻想域の転換への推力を為し、党派性止場の鍵を握るのは、政治域下の自己史と生活圏を射呈と場とする思想（態度）であると思う。自立への回路は、理論研鑽（意識私所有）や、私生活防衛（何を防衛しているのかが問題である）やの内にはなく、特に関係的自立の側に思想としても、現存的契機としてある。

我が「かくめい」の現在とのタイトルは、上述の政治、状況判断の総体への私の態度であるが、米口はどこからでも、否小さを領域である程、深く、全体像へ関わっているのだと言っておきたい。

② 国家本質が幻想性にあること。政治Mの対象、過程、評価軸は政治思想にあること、政治思想において自由国家を超える水準を獲得することは、誰の手に為らうとも革命への一歩前進であることを我々は言ってきた。だが、構想力は、空想に自足せぬ限り、歴史的幻想累積と、共時的状況への洞察、未知への透視を二重に鏡とする他はない。しかし、歴史的幻想累積は自由国家水準を上限する限り、この水準からの政治対象の理論的把握は、遺制的諸共同観念（天皇制、部落、アジア主義etc）批判か、個人や家族や社会に附着した共同観念批判かを為し得ても、自らの水準を自ら超え出ることはない。学問的営為の成果として、知的関心を吸引するとしても、未知の流動しつつある状況の彼方を、歴史的幻想累積を鏡とし、水準とする政治思想は語の真の意味では「構想」足り得ぬことは自明である。

革命に要求される構想は、学的水準による政治対象の整序とも、支配層動向の傾向と対等でもない。共時的現在における水面下の流動を透視し（この流動はますます反政治、非政治域にあるが）、未知

への架橋をなすこと（そのレベルは、国家、国家に対する党派、階級、共同性内の諸個人に上昇・下降する中をもつ）が、構想力の生命であり、課題である。

政治本質が共同幻想性であり、政治過程の本質が内部討論、抗争を通して敵へ接近せざるを得ぬ所にあり、我々が政治組織に在りつつ、政治本質の立場を指すのは、特に未知への透視を構想へつなげる場、経験を不可決の要件と抱えているからに他ならない。個人にのみ帰せうる学問営為と、討論、組織化、行動を介して形成しうる政治構想は異なり、前者は学者諸君任せても、後者は我々自らの生成、消滅に関わることだと考えてきたからである。

政治の固有の帯域においては、政治思想と、指導、実践は不可分であり、その内部で自らと自らの関与する組織の緊張軸を失えば、政治思想としても△死△んでいるのである。政治運動は個々の資格で関与するのであるが、それは個々人の連合としてあるのではなく、共同性―集団性として自らを押し出し、引き受けるのであって、その水準こそが問題なのである。私は、最も党的、官僚的、理論物神的傾向と離れた地点での大衆Mから、70年党派形成に踏み切った地点で上述の領域を問うてきたし、離脱者、自供者、発狂者、自死、表現力差、集団域でのポルテジ低下に對し、決して大衆やA・K Bメンバーが傷を負い、敗北しつつも、指導部や、政治思想や、看板が残るという途を取らぬと自戒してきた。

三上の口から、「政治指導としては敗北したが、政治思想としては、敗北していない。今の叛旗派とは政治、組織イメージが異なるので、別の形で政治運動を続けたい」との話を聞いた時、それ故私主張をもつなら、血みどろの分派闘争で徹底して意見を相互批判にさらすべきではないか。

組織は「生き物」である以上、「清算」にも根拠が要るし、手続きもあるのだ。現状課題から逃避し、叛旗派メンバーより読者に責任を感じるなんてことは分派の資格もない。叛旗派内では共同性を埋葬するとしても、外に向けて醜態をさらすことは、互いの相互関係から止めてほしい。

③ 政治運動の退潮期をどう突破するかは、全状況（その尖端としての爆弾、内ゲバ）の引き寄せと共に、組織内葛藤の方向づけにある。政治路線と、組織イメージについても上述の現況的、課題を外しては空想に過ぎぬことは述べた。

ここでは、政治指導の質、いわゆる政治的人格に問われるものへの私の考えを述べよう。ここでいう「格」の問題は、環界と拮抗しつつ形成されてきた人格や、持てうまれたと思いきまれている資質や、家族における自然的、原基的関与やを言うのではないが、それらを混融させて表われる政治組織（どのような社会関係、交友関係にも適応可の側面を持つ）におけるそれである。

叛旗派結成以来の大きな試練に、最高指導部のレベルでの意見分裂、一名の権利停止処分として我々は直面している。個々のBメンバーの心的過程は、組織原則、関係においても、かかる事態の発現自体への判断においても、大きな衝激を受け、各自の自立的決断が問われる。

まず、要請されているのは抑制力である。事態を客観的に判断し、

としては非常に驚いた。政治過程には、政治思想として、試行錯誤で心もとないが、よく人心を把えているという事はあるが、逆は成り立つのか？否。

誰もが周知しているように、叛旗派はどのような瑣事にも思想的に回答するという形で、69年決戦や分派や・沖・砂・三やW大ーインフレやの試練をくぐってきた。この過程で多くの離脱者を産むと共に、相互関係や、自己射程とも思想的にキック立てることを、状況の側からも、我々の党派位置（対権力、対他党派etc）からも引き受けてきた。

今になって、元々考えが異なっていたとするなら、読者も含めて、全叛旗派関係者への冒瀆であり、叛旗派そのものを組む必要がなかったことになる。また、途中でズレを感じながら軌道修正しえなかったとするなら、明瞭に政治指導の敗北であり、叛旗派の原則から言えば、納得のいかぬことを反論をせず、形式的に受容してきたことになり全く政治思想自体の敗北でもある。

同盟員より選出され、気心も知り合った中央委において、権利停止処分を引きよせた件につきよく考えてほしい。度重なる論戦で回答しえず、沈黙を続けた結果が、どうして政治思想の敗北ではないのか。今のようないびつな局面を回避せんと、この一年間努力を重ね、相互了解を私に画ってきたつもりであるが、それらへ気がつかなかったとしたら私は三上は指導者として失格であると思う。

もちろん、現今にいたって、叛旗派の路線と、自分の考えが異なるのなら、状況判断として不可避であるが自分について行けぬとすれば身の処置を考え、指導上の敗北を認めてもなお積極的に自らの自らの位置を相対化して把え、系統的に、手続きを踏んで、自分が、応えるべき課題に全力投球を為すことである。

ここでは、好悪の問題としてではなく、自分等の為してきた政治、組織、行動の総体に対して自らの立場を明らかにすることが重要。次いで、胆要だと思われるのは決断力である。これは政治方針決定の場合に通常総合的的判断から導びかれるが、現在は政治方針における結合、分離をめぐって問われている。指導―被指導、人格関係を問わず、いびつな局面を状況や他者の責任として判断停止するのではなく、自らの局面打開への責任の取り方を鮮明にすることである。

更には言えば、文章化、討論、身体表現、日常を通しての自己表現力である。正しい理論や、義理人情、や、権謀術策が、組織を動かすのではなく、各々の全表現を介した相互信頼が、全員一致にしろ、意見対立の処理にしろ、組織活動の源泉である。ここでは表現位相の差が問題ではなく、最も価値的行動はその強度に伴って身体行動を引寄せるといふ、表現の内実が評価軸である。

④ 組織的判断を、抑制的に、決断し、全ゆる場と手段で表現することは各メンバーにとっての自立への問でもある。しかし、本当の困難は、相互関係の内部にある。

編集局会議報告等によれば、三上は9/1・2中央委で主張し、批判され、それ以降文章化を約しながら提出しえず、叛旗派清算による「ゆるやかな」「ただ言ってみるだけの」「書き手を中心とする」組織イメージへの乗り移りとして権利停止処分に至った当の意見を、「分派」問題として押し出している。もちろん、何故分派し

えなかつたのか内省や、分派の信念は固いが準備不足であり、時間がかかるとその為にしばらく権利停止に甘んじるなどという主張は状況判断からも、相対的組織位置からも、政治思想と指導の技術的分離からも、指導責任からも、とにかくどの点から見ても噴飯ものであり現在根拠がない。

だが、相互関係に対して三上が、「全ゆるる関係は不等価であり、階級社会の個々人は差別的に立ち表われる故、感情の中性化が必要であり、相互関係は規準はなく面々の計らひによる他ない」旨の主張をなす時、何か聞いている本人にとって、自分の内部でひっかかるものがあつたのではないか。面々のはからひ、つまり互の考えを認め合う(プラスもマイナスも含めて)所から行くと、三上の考えもひとつの考えである。しかし、私は三上がどのような立場から、どのようなプロセスで、面々の計らひを主張するかを問いたい。真実はひとつの領域におけるそれであり、私が別の真実に就くことも、面々の計らひであるが、私は関係の準位を、自らに引きよせ、その転位へ相互関係を把えているからである。

社会の富も、知識の分布も、各々の体力も、この世では差別的であり、経済社会の側が関与した部分は、意志で左右できない。だがそれを甘受し防衛するのは持てる側であり、それを拒絶し獲得せんとするのは持たざる側である。ヘーゲルが労働者の貧困を奴隷の心性に根拠づけた事は転倒であり、経済社会域上の差別が奴隷の心性を産んでいるのである。階級、社会における個々は自らの意志如何にかかわらず、階級規定を受けるが、その内部で善意の資本家も、職制も労働の追求を受けることは当然である。この問題は面々の計らひの通有域

ることも、他者を許容することも意志しない。他者から許容を求められれば、限定的に許容する「旨に定式化した時、私は吉本の関係の絶対性や、雁の関係意識の絶対性批判以降の全共斗世代における最良の倫理を見た気がした。自ら省みれば、絶対のギリギリの地点で、他者と訣別する時には、文言化せぬが私も上述に準ずる規準で判断を下していたのである。

共同性と私生活とがレベルが異なること、各個人の意識内部の惨劇は外から伺い知れぬ事は当り前のことである。だがそれは立場と思想のプロセス抜きには、この階級社会において、自らの特権的地位の肯定や、自然過程への同致やを無自覚に防衛することにもなるのだ。自己防衛することは悪いことではない。しかし、不可避性(そこへ至る思想経路)から遠いほど、全人格的關係をスポイルするのである。

テックの職制が自立を語り、労組員に雁の手の内で何を言いかと批判する、内村剛介が日商岩井の重役から北大教養部長へ転進し学生対策に腐心する。江藤淳が学問の客観的評価を試すために文学博士号をとる等は、全く全共斗Mでの教授批判のパターンで対応可能である。このことは、柄谷行人がプリントを語り、三派全学連委員会長の斉藤が「情況の編集長に落ちつき、藤本敏夫が68・69年を抜かして書物を著わしといくらでも例示しうる。

イデオロギーや、衣装を外して残る業績の範囲で雁や内村や江藤の仕事が学ぶに足る克服、止場の対象であることと、私が彼らの生き様を折らず支持しないことは学問と思想評価の区別として明瞭である。だが、政治理論は学的対象化を目指しているのではないし、

はなく、それが有効であるとすれば不可避性の核へ下りた当事者間においてのみである。

経済的階級の内部関係は職場内対立であり、政治的階級の内部関係は法的疎外の攻守である。賃労働者にして株主も居れば、資本家にして日共支持者も居る。が、財貨と理念の私所有の止場へ向けて我々は、開かれた社会的階級、階級の創成が死滅へ至る自立した存在と関係を問うたのではなかったか。社会的階級は今だイメージや感性の方位に留まるから、不可避な社会的地位の上昇等を差し引いて個人と個人の関係では、財貨や観念の私的所有追求者とは生き様の差として付き合いを寄せばよい。ただ、ブルジョワ社会の全生産物に学び、そしゃくし、止場することが、好悪に拘わらず革命にとって不可避である点を押えておけばよい。

政治組織において出身階層は問わない。だが、それは政治本質にとって、経済社会構成の地位などは二義的であること、また親に生かされ、環界に付与された分だけ個人責任ではないということである。政治組織が、権力への通報者や、明瞭なスパイを排除すると共に、積極的な資本への奉仕者や、利敵者を排除することは(労組員の資格とは規準が別としても)あたり前のことであり、その組織の原則と許容度の問題で定められる。この問題も面々の計らひのうちに外にある。

面々の計らひが流通可能なのは、それ故個人と個人の関係にしほられると考えるが、共同性を介した日常的な編成では感情の中性化は空想であり、相互関係は許容し、許容される関係としてある。

東工大新聞休刊号が自らの相互関係の原則を、他者から許容され

我々の叛旗派的波及力が、その領域の業績にあつたのではない。

この共時的状況を引き寄せ、それに振り回されつつも、現状を首肯せず、理論と実践と組織で突破の途を画するという我々の方法は、各人にとっての自立(思想と関係や生き様の連関)を問う所で波及力も、我々の自負も有したのではないか。

△思想Vは、時代との緊張軸と、その総体像において他者に関わるのであり、逆に言えば、全人格をその根底でゆさぶることなくして思想が人を動かすことなどはないと思われる。個と個の間での全ゆるる批判は自由であり、相互関係で全う限り(特に指導部において)タブーを解除せんとする私の立場表明に、三上が私生活への介入として拒否し、他者に許容される場を選んできたと思われる彼が面々の計らひを言う時、決して彼が危惧し書き続けることで責任をとらんとする「言語的殺人」などは可能性のカケラもないと思う。

どのような筋道を通じて叛旗派の清算に、△思想Vの放棄に到ったのか、私は三上に更に問うと共に、文章上の跡づけをも為さねばならぬと考えている。

⑤ 我々はどこへ向ってゆくのか。「現状を止場する現実の運動」が共産主義だとド・イデ風に応えるには少し手間がかかる。

共同幻想構成の高次化が、共同性拡散と、共同幻想の市民社会、家族への下降を不可避としている現状で、「現状を止場する現実の運動」とは何何か。

国家への物理的反撃が、核独占を頂点に、警察強化を下位に、絶望的反逆を帰結する他なく、増々拡大する階級矛盾への反撃が理念としては、国家形成Mへ接木されるか、構造的に自足するかしかな

く、全ゆる現状克服へのたたかいがその先をはばまれているかの現局面をどう突破するか。

問題は、マルクスの時代も、今も厳然として人々の生活や考えが変わる核へ、その必然的条件への洞察に、自立した相互関係を基とする階級の形成（＝死滅）にある。我々は現局面において身体的政治行動を選択していかないことと、絶望的反逆へ駆り立てられる他の人々の必然的条件を連関づけねばならない。我々にとって、現状の全ゆる政治Mが有効性においても、象徴的意味においても拒絶すべき対象であることと、共時的に我々を含めた状況として思想的に引き受けることは異なるのだ。

自由国家水準の社会への下降が、何を考えているかではなく、何をやっていくか、規範や決定の受容ではなく主体的判断を「感性の民主主義」レヴェルで問うている時に、既にある現状への学問的批判も、あるべき未来への発明者の執念も、一個人の知的関心をより刺激しその範囲で解放感を与えられるにすぎない。問題は思想であり、そこからしか他者と関われない道路が狭く、かつ自分にとっての両刃の刃としてあるのだ。全幻想の構成転換を、関係的現存域からの上昇（共同幻想への繰り込みではなく）として為すこと、不可避な日常域を価値基底とすること、は反政治や非政治への迂回であっても、現在、最も政治的な、革命への回路である。ここでは、共同的表現の水準と、自己へ回収する回路がはつきり立てられていれば、状況へ声をあげつつづけること、デモや集会や政治効果の限定された斗争や設定も、オルグも、全く自在に、タイムリーに、創意工夫で設定してよいのである。経験的にも、充分可能な範囲であり、

すべてが、私生活を自然過程にあずけ、年令の上昇に地位の上昇と任務の限定と生活的安定と、遺構の家族との密通としてやりすごし、「共産党、家へ帰れば天皇制を為してきた。ここを外しては、労組は青年部に、党派はゲバルターに支えられ、理論と金を幹部が保障するという官僚制、閉鎖的自己救済の体系は解体しえなす。

△24時間問題とは、意志的にはふつうのことを、ふつうに為し、大衆へ下降する規準を明確にし、そこからはみ出る心、身のゆとり、でっ上げで全ゆる書かれた思想や政治はあることの了知だ。でっ上げの努力を続けていくことに政治思想の問題もあるのだ。

政治Mは、権力との攻防局面如何では、あらゆる可塑性を優先するが、思想的には各々のふつうのことをやる上での不可避な条件を各人が明瞭にし、各々の持場で、の闘いを組織内外を問わず持続することを問うているのである。

規範化せぬ組織の道は三上の側にあるか、否。こちらの全員にある。

四、意見表明選

(1) 党内論争の結果と展望

(A) ①わたしの政治論戦への問いと、そこでの判断構成の基本と、思想的態度について

勿論、私に課せられてきたことは、中央委の一員として、この間の党内論戦へ如何に関わり、どの様な判断と態度を表明してきたのかを明らかにすることであると考えている。△政治表現Vの構造に

組織体制さえ整えば、こちらが選択して、原則的政治活動、組織、斗争設定を為すのみである。

⑥ 我々は何を経由して行くのか。現状との緊張を手離さず、自立的相互関係への努力を経由して、不可避な条件を相互了解しながら、全戦線における“かくめい”を引き寄せながらである。

現在の叛旗派の方向が「連赤への道」であると批判している人がいる。冗談は止めてほしい。三上のような9/11以降の行動や発言が可能な、否、積極的に主張を展開してくれと要請している組織が何故連赤へ到着できるのだ。私は、状況がどの場にいようと内ゲバ的關係を強いている以上、特に政治組織においてはこの局面から目を外らさず、逆にプラスへ転化しうる道を模索すべきだと考えてきた。関係の単位は、各人にあるし、そのように対処してきた規準であり（その内部に私は思想水準を想定しうると考えているが）、恣意的にキックしたり、弱めたりできることは現実関係においては無い。生活共同体とか、山岸会とか、官僚化への道とかの批判は、自らの眼のくもりより発している。

我々は、政治でメシを食う方法も、労組と議会のパイプも、クソがついても金は金という立て方も排除してきた。おそらく、子供を抱え、女が労働に従事し、綱渡りのな生活の上に支えられてきた我々の政治は、外側から見ればもろいものであろうし、今後、子供の成長や、次々の出産や、手狭の住宅や、中途就職先の限定やに加えて、親族とのキョリや、親の扶養やの、生活的危うさの条件は度を増すだろう。日本で、そのような領域が政治思想の対象となったこともなければ、引き受けてきた組織も個人もないのだ。

対する私の△判断Vや、社会分析の方法についての△判断Vや、過程的論戦についての断片的諸整理について、昨年12月以降、レジュメや組織局レベルでの△報告Vや、私見として述べてきたつもりであるし、何はともあれ思想的な態度としては、組織的な日常構成やもつとも時間と討論と心労を投入してきた中央委活動と地区活動の裡で他者との相互関係の位相で判断される他はないと思っいる。しかし、事態は依然として、私が何をなしたのかについて述べることも、語ることも、卑下することでもなく、何について、どの様に判断しているのか、この判断に於いてどの様な態度をとったかに尽きている。

問題は、昨年夏以降の70年代中期路線の確定をめぐる判断の構成と、イメージの展開について、中央委員会内部で顕在化していた判断構成とイメージの誤差が、三上氏の「戦后価値」評価の提起とあいまって顕在化した領域から浮上してきたと私は考えている。

勿論、持続的な課題としては、早大インフレ斗争以降の組織問題、集団域での諸矛盾の顕在化と、政治日常の構成—政治指導の構造についてのBレベルでの総体としてのポルテージ低下の真因をめぐってその鞍部への下降の仕方として誰れにとっても共通の前提は存在していた。勿論、三上氏が断片的に述べていた様に、Bメンバーの総体としてのポルテージの低下は、個々のメンバーの側に還元されることでも、我々の社会的な存在の仕方の総体の構造の側に還元されることでも、それらの二重の脈絡に於いて結果としては残る者が残るといふ達観の裡に在るのではなかった。その意味では△政治方針Vを出せば、現在の危機は突破可能であるという判断が何故

に一年有餘も空転してきたのかは総括され得ないのだと考えている。

新年号に於ける三上氏の「大道無門」Vと私の一面論文に対するA氏の批判的視座の提起を契機として、私には党内論争の端初は切り開かれたのだと考えている。勿論、このことは現在からの解釈としてそうだとすることではなく、A氏の批判からその時に受けた私の心的、思想的反射は、その後の持続的契機として、自省や、問題意識の核の形成の鞍部を生み出していったからである。

A氏の私の論文への批判的視座は、情勢判断の構成は、△概念把握V―構造把握の裡に還元され得るものではなく、△関係把握Vの視座の欠落は、政治判断の基底として弱いものであるというものであった。私にはこの批判は痛覚を促がすものであったが、一方でA氏の集団域への論及の視座や△関係域Vへの判断の展開が△動的Vなイメージを喚起してはいないのではないか、その意味では△表現Vがイメージを喚起するという位相では自己の内部で成立している幻想と現実の对象的相立関係の準位をめぐっての視座が介在する必要があるのではないのか。いかえれば△文体Vや△概念Vの準位についての判断を、△現在状況V性との関連で明らかにすべきではないのか、といった反批判的視座を構成した。

だが一方で、大道無門に於ける三上氏の提起した内容についてのA氏の批判には、多くを学び、多くを検討すべきであると考えていた。私は、自己の内的イメージと思想性の鞍部について、「大道無門」を对象的に扱うことの裡から△戦闘的批判Vの基底を中に入れるべきだと考えた。一月から三月の間、私はこの数年間の政治活動で最悪の事態にまで悪化していた持病の治療に専念せざるを得なかったが、

念として下降する、いかえれば思想的課題を確定するということがあった。A氏の12月同盟大会での私への批判的視座とそこでの私の痛覚と、反撥も含めて幻想の生活を本質として把握した場合、それ自体として成立する位相に△政治表現Vの構造を確定すべきなのがある。ここでの水準と現在状況を明らかにすることなのだ。他方で自己の幻想の生活と現実の生活の相互関係の裡に準位をもち、このことを介在させた構造（関係の構造）が△場Vとして現われる位相に集団域、組織問題、相互関係の課題が現われるのである。△大道無門Vを基底とする△戦后価値Vと、△戦后社会Vの評価は、結局、思想的にも、実践的にも、△政治表現Vの帯域、△集団Vの課題へと集中することとして私には批判的に、撰取されたという判断との引き換えに同盟回状として執筆した文章の編集局による第一章の削除（ここで大道無門への前述の批判を△大道無門Vを引用して行っていた）と、A氏のそれに代る（同一内容であるが）さし換えという事態に私は沈黙で応えた。

理論誌10号は△政治表現Vの構造とその帯域に対する私の見解を表明したものである。勿論、集団域の課題は、自己の思想的態度として、地区の日常編成やB相互間の実践的問題として展開してきた心産である。これに対する批判や、検討は、大いにまたれていると思われ、相互関係の裡で引き受けなければならぬ。

7/1政治集会、7月合宿での党内論争に対してとった私の態度は、根底的にこの様な位相で自己総括されていたと考えている。しかし、この私の判断は、9月号の文芸での吉本―植谷対談、他方で国

その間は専ら、この数年間の私達の政治的实践と、組織的諸問題の累積し連続している課題への私なりのふみ込み努力した。

私の復帰以降の最大の組織問題は、地区、機関Bの再編と、4/28政治集会の延期―開催をめぐる諸討論の渦中であつた。集団域への組織的なる対処と、そこでの判断―経験の諸検討、他方、政治集会の内容確定と政治方針との関連での討論、これらは私には、決定的に重要な意味を有していた。なぜならば、对象的には△大道無門Vでの政治局論文の水準と位相が、政治総括の視座として徹底的に扱われなければならないと考えていたからである。4/28集会の延期の決定は、地区の有能なAIFメンバーの散発的な反応以外には、直接的な手応えとしてはなかったが、第一級の組織問題、政治問題であるという確信は私にはあった。この沈黙で迎えられた4/28政治集会の延期の裡にこそ、現在の私達の思想的、組織的基底を見定めるべきだし、BUNDの指導的水準を測定しなければならぬと考えた。

この私の考えは、4/28集会延期に関する同盟回状の執筆段階で△大道無門Vに対する批判的視座の構成が不可避であるという信念をもった。その一つは共同幻想の構成転換論であり、その第二には、知識人―大衆概念、いかえれば△表現Vと△実践V的な課題としての△大衆像Vの問題であり、その第三は、個別斗争論についてであった。これらの諸論処への批判的な視座は、第一に徹底して△政治表現Vの構造―位相への对象的作業を不可避としていることここから△政治表現Vの帯域の確定を明らかにすること。他方で第二に、集団域、日常組織編成の累積と、連続している位相の裡に観

文学での吉本―大岡対談の内容を検討し、判断することを通して、大いに感応するところとなった。吉本氏の24時間―25時間目の問題は、△革命Vの問題を25時間目の問題としながら、如何に25時間目をデッチあげるのかの△規準Vをめぐる本質的―現在情况的な課題であり、思想の核心であることを誰れも読み取った筈である。

吉本の大岡信との対談では、25時間目で終始する課題とその方法について、文学表現の位相といなながら△幻想性Vの外化一般に拡大し得る本質的―現在情况的な課題を提示するものであり、ここに、政治表現の帯域と方法論について誰れも読み取ることが出来る筈である。その意味で、現在私達が根柢から問われている課題への判断の構成の入り方と出方を間違わなければ問題はそれほど複雑なこととは思われぬ。様はこの問の過程的論戦が逆に明らかにしてきた課題と内容と傾向への対処の仕方である。私には、この問題の帰着する位相も、そこでの判断も明らかである。私の判断の構成の断章と態度については、A氏のこの問の心的にも肉体的にも驚意的と思える努力の裡に示されている。私には、これ以外の位相で△裏も表Vもなく抑制的に論議に参与してきた心産である。その意味での帳尻は勿論全面的に引き受ける所存である。

追補 △党内論争の本質的、現在状況的な不可避性についてV私にはかつて10号の序文で△政治表現Vの幻想性の水準と現在情况的課題として、△レーニン的政治概念Vと、△戦后政治理念V及び△自立概念V更に、60年以降の新たな△政治理論Vの一つの範型として長崎浩の△政治概念Vに触れておいた。私は何故に戦后政治の行き語りが体験的復権か仮像の帯域への退行としてのレーニン主

義の復権であるかについて自明の道行きを自明なものとして取りあげた心算である。要は、何故にそうなのかということの透徹した判断の所在である他にはない。この間の私達の党内論争が、この課題を本質的にも情緒的にも問題にしていることは間違いないことである。△政治表現▽への入り方と出方の判断の異差は、思想的には24時間をめぐる評価に集中する外はないし、△政治像▽△大衆像▽の問題はこの位相をはずせば、△生きたもの▽か△死んだもの▽かの決定的な異差があるのだ。私は、この位相でも帳尻はつけなければならぬと考えている。

(B) 私はここで私の△断言的断章▽を述べることにする。その根柢は何であるのかは、自分に明瞭であるのに、言語化することが苦痛であり、徒勞感を伴うものであり、といった類のものではない。その意味では、この数ヶ月間、私は冗舌であつたし、依然として△断言的命題▽は私の口からほとばしり出ていたから。本当は、何かに憑かれる様にしてしゃべり尽くしてきたのだと総括して、堰止められていた「何か」が、もう△流失▽してしまつたという地点から△失語感▽を味っているというのが、今の私の△情況▽へ与えられる△形容▽である様に思われる。つまり、快感は余韻の裡でくすぶっているのだ。私は僭越ながら、地区やその他の会議での沈黙の△質量▽を正確に受感している。否、それだからこそ私は私の△言葉▽の△流失▽を意志的に止めなかつた。そして△発語▽の△流失▽の極北で△失語症▽になつた者の敗残か勝利かが△沈黙▽の△質量▽に良く拮抗しえたのか、という側に私の情況があり、資質があり、△格▽と△構え▽があつたのだと総括して、私と、私達の闘いは、

きた訳ではない。

本当に、SECRET以降のコントラ「前衛」コミュニケーションの純化過程に党派性の止場の問題や内ゲバ止場の課題が浮上するのであるうか。問題は三上氏が考えている様に「叛旗」がレーニン主義と自立主義の折衷であり中間形態だから中央よりも地区へ、地区よりも自立闘争の当体へ「叛旗」を解体するのでもなければ、幻想の革命を心須とする部分で、それに必要な自己表現の場をも創出する様に「叛旗」を解体するのでもない。この「二極」への解体「論」は本当は目新しい事態ではない。この数年間の政治体験、組織体験の裡で「AGU・AIFの解体論」「早大WAC」のSECRETへの心的、組織論的移行（勿論、個的モチーフとして）、旧中大五メンバーの同人誌発行や、その他無数の組織離脱者や、周辺部分がつとてきた方法である。25時間目の形成の△規準▽から見れば、まず「25時間目があり」、しこうして、といった部分による現存意識の現実関係からの解体の結果であり、25時間自体の構成の準位と方法から見れば△情況▽的な課題から個的モチーフの世界への移行であることは自明のことである。私達は自分が政治運動を継続し「叛旗」の一員でありつづけていることに内省の核を置いているのであり、自己を合理化する心魂は存在せぬが、この様な「二極」への解体「論」こそ、私達は批判の対象、拮抗すべき対象として考えて来たものではなかつたのか。

私は今一度三上氏の連赤批判を読み返してみた。その中で三上氏は、永田洋子の談話を引用して批判の核心を構成している。つまり、永田洋子が内部粛清の核心が「革命戦争」論の正しさへの確信と、

△新しい▽地平へと突き進まなければならぬと考えている。

党内論争の水準と位相について三上氏の側から最終的な「総括と展望」が提出されるに及んで事態の深度は露出したと思う。この間の論争の帰結は結局のところ「政治表現」と「政治的表現」の差であり、「組織問題」と「組織問題についての評価」との落差であり、その空隙を埋めるとなれば三上氏の25時間目の形成の準位と25時間自体の構成の判断へ△鏡▽は向けられなければならないのである。政治体験の現存意識として、60年安保段階の位相へと適及せねばならないのだという私達の述懐は、「総括と展望」の裡で逆に向う側からころがり込んで来たのだというのが正直な感想であつた。その意味では三上氏の「敗北宣言」は根柢的な位相では私や私達が希求していた三上氏の取るべき態度からの逸脱であり、連赤問題や内ゲバ問題が真に情況の課題として浮上している本質からの△身の引き方▽でしかなかつたとしかたええない。私は△死者に鞭うべきではない▽ということの真意を知っているつもりである。また、I氏の人間に対する評価の規準や、それへの手続の過程に於いて、私や私たちが「理解を欠いている」とは思わない。たとえ、百歩譲つたとしても「連赤と同じことをお前達はやっているのだ」という中傷の胸ぐらをつかまえて、連赤の止場や、党派性の止場が一体、どの位相や水準や領域で問われているのかを、その内部粛清の△場面▽に連れていく外はないのだろうか。

私は、その意味では△言葉の応酬▽や、自分の思想的△通路▽の道筋の講釈に「聞く耳」を持たないと素直に述べてきたつもりなのであつて、党派性や内ゲバの止場の回廊から身をそらそうと考へてこのことへの「人の要素」についての確信の結合の裡に、本当の連赤総括の中心があるのだと総括しているのに対して、三上氏は幾多の評価への根柢的な批判（いいかえれば、政治を展開している者の心情の基底と迫力）を展開しつつも、連赤の内部粛清を、ブルジョワ社会の内部で日常的に行なわれている「制度的殺人」と連環させることを通じて連赤内部粛清の悲劇を擁護したといえる「批判されるべきはブルジョワ社会」と国家の存在であると。

私は、三上氏が引用している永田洋子の側に「本質」がかくされていると考へる。永田が連赤の帰結が「革命戦争と人の要素との結合」に於いて二重の確信を有していたその鞍部に、問題の本質は存在するのだと語っていたことに本当は耳や目を傾けなければならぬのだ。「革命戦争」は観念の問題であり、その確信は恣意的な域を超えることがない。連赤は、観念の対象としての「革命戦争」と「組織論」が、認識の対象としても、表現の内容としても分離していく時代的、情況的な本質に対して、「革命戦争」の実践的貫徹の側から収約し整理、価値化を計つたのではなかつたのか。その意味で、「人の要素」は不断に「革命戦争」の現実的遂行の側に解体されるか、共同意志の世界の構成に馴致されるを得なかつたのである。

現在、私達が集団域の課題と、情勢論の課題を規定する根柢が、それぞれ24時間と25時間目の問題としてあり、そこでの「無関係」の関係、いいかえれば、個々の主体の幻想と現実の对象的相互的關係—いいかえれば、歴史的現存的な「関係の構造」が介在する他はないのであり、この意味で集団域と表現の問題は、本質的には無関係なものとして扱かう外はないのである。連赤の悲劇は共同性の課

題を、個々の主体の幻想が歴史性に志向する（自然過程）観念の道行きで、革命戦争と「人の要素」を結合させんとしたその意図の地平に浮上している。そしてこの問題が共同体思想の死に直面した戦后社会の日常的な希薄性の裡から共同性の課題を浮上させようとする者にとっては避けることのできない本質的な問題であることは論をまたない。政治関係が幻想関係であるのは、政治の本質性の位相に於いて自明のことなのであり、では、その時、政治本質へ何を媒介に關っているのか。政治本質へは、私達は幻想としてしか關わることがないのだという「覚醒」の根柢には私達の対象的活動、対象的实践—意味的、価値的行動—としての「革命」はどうか存在するといふのか。問題の鍵は、政治革命は、まだ「革命」ではないという歴史の真理と「革命」は、非政治の本質を媒介にする外にはないという「革命」の情況的課題の連環の裡に存在しているのだから、ここから「革命戦争」自体の評価と、「人の要素」の評価が本質的な規定から問われているのである。

現在、私達に問われている共同性の課題は、連赤悲劇や内ゲバの側にはない。政治集団の第一義の課題が国家であるということ、対象的国家との距離がはるかに遠いものとしてしか存在しえない時代情況と、他方、国家自体の生活過程への下向が徹底的なスピードとして貫徹している状況の裡で、依然として共同性の課題を国家への志向の裡で創出していくことが不可能性としてあるという問題は、対象的活動としての政治運動自体が繰りこまなければならぬ第一義的な問題なのである。私達が「政治表現」の構造や帯域について对象的になり、他方で集団域の課題を重いものとして扱ってきたこと

後者の領域では、政治組織と現存意識との自然成長性、生活的現実と未分離のままの政治実践像の混乱等から、まず、自身の解放的契機が自らの禁制から解放されることからはじまるという教訓であった。そこでは、個々の判断（政治集団の実体は前提のうえで提出されたり、任務・機能とその代償等）の基底そのものからまず疑え、そして、相互関係、共同性自体の水準での基準こそ問うべきだという自己の位置の取り方であった。露出した関係域は、徹底して私生活域は差別的だし、恣意的であり、獄中生活費を「不可避性」以外の相互基準の水準で扱えない根柢を突き出した。結局のところ、党派代行と余裕の問題へと転化したことへの反省である。

② 私は、現局面に対する判断（階級）をA大会総括文書「叛徒96号」のなかで述べた。

向かつ、この間の〇・〇内論争、指導の総括を提示することにより、政治状況判断の総体像を提出し、共通の前提を構成したい。反インフレ斗争以降、特に顕著であったものは、情勢論と日常実践の連環であり、国家本質が幻想性の水準にありつつ、突破の方途を政治行動のラディカリズムによる権力実体攻撃ではなく、全く政治思想によってしか超えられない、というジレンマであった。構想力による自由国家水準の突破と経験力による内的水準の転換は、歴史の諸累積を対象とせざるを得ぬことと、どう見積っても片手間の作業では為しえぬこと、しかも、政治対象への判断・実践へつなげれば、遺制的共同観念との膨大な批判的戦闘の投入と、そこからは何も産れない矛盾であった。この矛盾に一般理論と従来の政治主題のパターン化による接木では、もはや一歩も進まないまま、各成員の

の根柢は、共同性の課題が歴史性の側にはなく、現存性の側にある、その現存性自体が基盤とする個性的な刻印の領域にあることは、この間の理論的情況的な諸検討に於いて自明のことである。

(2) 現況判断とたたかひの血路

① 私には現在を判断する上で、二つの事柄に対する内省が基底にある。ひとつは、第二次BUNDの分派斗争過程で直面させられたにがい教訓であり、もうひとつは、獄中体験を通して培われたものである。前者では、組織基準やイメージが本質的に問われはじめたならば、それ自体の位相と領域内部で徹底して現在課題を扱い斗うこと、もしもそれが困難であったならば、自らの政治思想の敗北の道筋と帳尻だけは鮮明した方がよいと言ふことである。

赤軍分派「69年秋期決戦」B党内斗争の激化のなかで、私自身まだ諸論争の周辺で細々とした大衆斗争、組織を編成しながら、感性的に受感したことは日常指導域ではB系であったが故、官僚への強烈な批判意識と現存意識による大衆課題への対処の自信とが底流に流れており、「俺は決してそうはなりたくない」という直観的なものがあった。だが、反転して絶えず、自身内部の組織基準やイメージの日常活動、党派性の壁が突付けられていたことは歪めない。当時の実践上の態度は常に「一卒伍」として参画し、党内論争の継続よりかは、実存の重みに賭けていた。

現存的、生活的な修羅場が相乗的に浮上し、経験自体も無効にせしめる事態の加速性との斗いに終始しはじめたのである。

集団問題は、位相と領域を違えてはあれ、政治党派派結成以来、持続の根柢を問う以上当然にも対処すべきだし、そこへの判断の凝縮が、その時代と社会の水準を露呈する故、どの狭い領域で生じた矛盾でも徹底する方法をとるべきである。私達は、集団問題の解釈ではなく、実践上、政治Mの帯域内での共同性—集団性水準自体を問われているからであり、それらは個々人に帰する位相と全く、相互規定性の関係以外は消滅しえない位相とがある故であった。上述した、政治思想水準と集団問題との浮上は共時的であり、時代状況を写す鏡であると判断した。

③ 私は、現下の政治、実践、組織がこうなっている危機は、関係の距離の内省の欠除と表現イメージの断絶からくる対他—対自性の喪失そのものにあるとは考えない。

しかも、政治的世界が日常性から疎外された非日常性である故、日常性のくり込みと不可避な現存性との斗いであるという規定も間違っていると考える。確かに、政治表現が時代状況のなかで封殺され、国家の共同性の拡散の下での政治本質の根柢的な問いが迫られている。私達は、この局面に拮抗するには、政治本質が共同幻想性にあり、日常実践、集団編成をなしつつ、政治本質自体を対象域に浮上せしめるとき、自らの幻想内部で引きよせられ、生成と消滅の論理を自体的に扱うことである。それ故、関係や集団内部の相互関係に凝縮した対立や異和は、表現の水準（言語表現）による血路によって止場されず、時代的規定性は、全く、関係意識の浮遊化のな

かに現出しているはずだ。これを避けた表現の喚起自体を実は疑ってかかるべきだ。まして、前提化された言語表現領域—学問的営為で立つ余裕などこの酷い時代と社会のインパクトのなかではない。私達は、まず、現存意識や24時間目があり、そこに終始せざるを得ないことと、全く非本質的な領域に陥入れられている25時間目の課題を分離し、対象化することにより、△革命▽の課題、対象が浮きぼりにされるのであって、予め政治的世界が非日常であり、日常範囲と拮抗しているなどと言うべきでない。つまり、日常性内部(24時間目)で終始している劇自体の内側に、余りにものっぺらぼうな世界が観念と現実を錯誤せしめ、非本質的に生かされている故に、非日常性の必然性があり、やはり日常の諸繁雑に帰するときの態度なり、己れを知るといふことである。

私は、70年以降党派形成時に、第二次Bとの抗争のなかで培われた党的核の規準は実は自身の足下内部に埋れており、獄中自供、転向、離脱者、シンパ、との接融のなかに対象的になることと相対性の獲得に全力を傾注してきた感がある。この領域は従来の党派では影の存在を強いられ、沈黙か指導への弱々しい批判で自足性を保ってきたことへの冷厳な判断がある。

④ 私達は、現下の局面切開の途を、武器と政治イデオロギーにより、国家への物理的対峙、反撃を下降のロマン志向による絶望感をバネとするか、政治の有効性による国家形成運動の途へと転落するか以外の狭い、細いたたかひが要請されている。

私達は、政治の有効性に絶望しても尙かつ、自らの日常場で考え、思索し、不可避的なたたかひを形成せざるをえぬ人々の内的格闘を

(3) 私の着目すること

① 同盟内論争の収斂すべき場所は、一つには自己の現存的思想であり、二つには全情況への判断である。

中央委員会の統一の見解を提出不能な現在、私のここでの表明の責はすべて負うとして、収斂すべき場所への評価のくいちがひから派生している不毛性については自覚的に処したいと思う。

私がこの間の同盟内論争にかかわって着目して来たのは、人はいかなる言語表現を介しても、心的概念や規範はただ日常の世俗的、家族的な顔をしているというところが、裏—表もなくさせられてくる情況への驚きであった。正直なところ三上氏が「Xが○○○○の準備をしており、それへの協力が日常時間構成の一義的課題である」として彼のこの間の活動へのかかわりが明らかにされていく過程と、「○○○○問題で何かこの間の組織活動で支障をきたしたことがあるのか」「職業の一つである」として自己弁明していく姿の中に、日本の政治運動の中に自己と自己の諸関係を統括出来ずとも、△政治思想▽は啓蒙的に存在し、自己が死滅しても政治思想は残ると考える高野実なみの人が存在することの強固な残存をみるのである。そしてそれ以降の(つまり9/11以降の)三上氏の動きの中には「分派できなかったこと 内省している」「政治指導上の敗北であるが政治思想的には敗北してはいない」といふ珍無頼な、だが看過で

思想的に引き受けるべきだ。

自由国家水準との拮抗は、学問的営為と予め政治的世界が規定されて、日常場を相対化することは、全く知的上昇の意味づけで自足性を語っているに過ぎず、下降された国家本質の幻想性が、社会の局所であっても、絶えず判断や評価が迫られている内身に実は△かくめい▽の回路である。 遺構的体系に同致しつつ観念の自足性

を許容された法的民主制下の個人原理は、共同性と個人レベルの対立ではなく、共同性自体の内部での(ブルジュワ社会)自然過程や秩序を予め前提にしたりえでの個人原理であること、従って、現状を理念的に否定し、反体制的であっても、思想や関係や立場自身が置かれている不可避な経路を抜きに、ただ、認識のレベルでたてているにすぎない。私は、現局面の「内ゲバ」を情況の象徴としてみなし、認識を加えることより、自身の自立へ向うときの不可避な課題として、避けて通れない政治組織の課題として遇している。

つまり、共同的な表現水準がこうむっている危機と、自己の内的な回収回路とを接木でもなく、且つ、許容された相互関係の裏側で愛憎の劇を繰返すことなく、現存意識、関係域から共同性自体を相対化し、不可避的な日常場に終始するには、規準を設定することから、はじめねばなるまい。核心は、やはり思想と関係への自身の態度であり、その中味の規準・評価の検証をなすことが時代状況と抗する前提だ。

きない言動にこそ本是はあるように思われる。

私の政治経験やそれ以外の感性的契機からみれば全く逆に思われてくる。自己の政治思想上の信念や政治にならない感性的行動や諸々雑多な心的世界を介して行なわれてきたこの間の集団的行動が行動や表現の一回性として死滅しており、かつまた感性的契機としての結合条件を欠落させられておりながらも、依然として、自己の責任の△外▽から関係を強制されるという被告団に象徴される事態にこそ△思想▽は直面しなければならぬと考えてきたのである。

そして「大道無門」以降の諸表現への異和は、まず私には「政治的死」や「表現における死」の以前に、「関係的死」をひきづっている私たちの日常的、現存的思想こそ、第一級の課題ではないのかということであった。私は無自覚的ではあれ、又、拙い手つきではあれ「歴史的現存性としての不可避性」論や「社会の有機的構成に規定づけられてあらわれる個別的な集団編成」論という三上氏の集団イメージとそれの構造的説明に対してなしてきた反論や「私利私害、恣意的自由」論や「青年期論」への異和は、その論旨の展開はともあれ、(それ自体検証にたえないと思っているが、その理由は後で記す)自らの表現根拠たる△関係的死▽への洞察から身をそらしているとの直感にあった。つまり、どのように判断しても、表現が、他者の水準から借りてなされようと自己の経験から手に入れようと自己の日常構成と心的世界を介してなされるし、そこでの不等価性は「絶対的に無化」しなければならぬし、「手ぶら」の大眾としてのみが、私の相互関係の評価軸である。つまり、三上が日常を、とりわけ我が組織内やジャーナリズムで△政治指導者▽として遇さ

れていようが、いまいが、そこには価値の序列も意味の序列もなくただ「関係」をひきずる個人がいるだけであり、そこからの「表現」を不可避とする思想の内的課題があるということであり、その「表現」の時間がかろうじて残っているときには、いかなる関係のおきかえにも耐えうるということなくしては、どのような表現も「無意味」であり「無価値」であるとする私の立場からである。

② 第一期叛旗の埋葬と継承をつなぐもの、つまり結節点は私には「歴史的現存性としての思想水準」と「現存的思想」の混融の中で生成し、発展（退化）してきた私たちの政治と政治思想を、明瞭に、「現存的思想」つまり政治の死滅、自己に還元されない表現の死滅の現在性」におくことを一致した上で、自己史の射呈を提出しあうことであるように思われる。当然にも累積した関係については、自己が参与した範囲で知恵や力や金を全力で出しあうことを前提で生産的である。政治Mをやめようが、やめないが「現在」を止揚するVMが私たちの評価軸であることは当然のことである。

爆弾、内ゲバが現在の「自由国家」の過渡性の浮上としてあり、その理念的跡づけとは別に現存的感性として（つまり当人もその理念や言語表現が目じゃない）大衆の現在性からの超出を象徴しているものであり、彼らも、私達も、政治思想や政治指導「被指導」の敗北や勝利ではなく、「感性の現存性」こそが問題である。そして感性の契機が制度や武器においてではなく、日常「関係」に、つまり生活のプリミティブな領域へ下降することにおいて決れるのである。下降を許すのは思想の領域であるが、それを許さないのは関係を歴史的現存性として構成する階級社会の問題である。このことの自覚

のであろうか？

一つは、あらゆる「場」や「時間」において、ある種の「余裕」や「ゆとり」や「曖昧さ」を許さなくなってきた時代の客観的條件。インフレで人々全部が今日、明日の生活維持に精一杯で他者の事などゆとりをもって構っておれなくなった事態。年令的成熟による家族問題の正面からの取組みの必要性。対関係、親子関係に対する判断、将来的生活設計に関する明確な判断の切迫。

二つ目には、五年間の運動蓄積における諸々の判断の食い違い。傾向性の純化。心理的異和、とりわけ関係の取扱いの落差の累積的極点化。つまり、組織構成員個々の政治思想の内的連続性や姿勢のズレや不可視性。

しかしながら、このような分析など通用しえないような現在の離脱者等の姿態を私は見る。直言すれば極めて無節操で無神経なそれを。本当は政治・組織・運動イメージの食い違いや関係の異和、感情の問題で組織を離れたはずなのに、たちまち見事な生活信者に变身し、自己の経済的社会的安定を第一義とするところまで転身する者達。かかる人達の「生きざま」に思想的連続性や根拠を見出すことは極めて困難であり、不可能といってしまうくらいだ。まさか、自らの政治的構造や思想的根拠をもち、唯だ、客観的時代の表層に感情的に自己同致させたにすぎないのではあるまい。

あるいは、過ぎし日の青春期の「ユマ」として思い出ばなしや酒の肴にするものもあるまい。私の確信的判断では客観的時代性の表層に浅薄に感情的自己同致させる思想は、敗北の思想である。客観的情勢が一見高揚するとすく乗っかかり、沈滞を始めるや否やただちに撤退

的「意識的扱いの裡に現下の「転向」「非転向」や「同伴」「自立」の止揚と「政治」「組織」「かくめい」の全課題がある。このことを情勢判断の中心課題とすべきではないか。

(4) 時代的困難の克服の途に

① 私は昨年夏半ば寝ボケ眼で出監以降、未だかつて経験したことの無い様々な苦悩や心的葛藤や感情的異和や焦燥感を見たり聞いたりし、又自ら感覚した。分派し結党以来の同志として斗ってきた○○氏、△△氏、××氏など多くの同志の戦線離脱という事実。一種の精神的解放区を形成し、時代の熱気を全身で現わしていた人々の現在の頹廢。（単に底の浅い感性の共同性と虚しい祭り事であったというのか？）又、自らの肉体的精神的存在を意識的に無に追いやってしまった同志Sの驚愕的死。諸会議フラクにおける討論の空転現象。政治内容や方向をめぐってのそれではなく、何かしら自己幻想の現在水準の発表会や啓蒙の場として立ち現われていったこの事態（他者像のくいまや自己の相対化が全然見えない）。部分的局所的には大衆的面前に基礎をおいた独自の活動を展開しつつも、全組織的闘いが水圧の高いものとして一切組めなかつたという、この拡散状況。

このような諸現実を見極められる根本的基底はいつたいいかなるもを開始する。これこそ便乗主義であり、語の真の意味で日和見主義である。そこには思想の一貫性も謙虚な姿勢も思想の内的連続性も垣間見ることできない。これは転向の問題である。

② 昨年来より政治局段階で「価値構成」をめぐっての論争が展開され報告されてきたが、私の感じでは率直に言って何の事かよくわからず、現在の困難な情勢についての把握の食い違い、政治方針、路線のちがいと判断していた。だが、今春以降の種々の論争過程で先述のことのみならず、実はもっと底の深い各々の政治像、関係像、生活の処し方、思想の立脚点に及ぶもの、すなわち、政治思想の根幹、革命運動の構想をめぐらるものであることが徐々に感得されて来た。

この間の現われ、傾向性（現実的動向に対し書きこぶことばによる理論的水準で答えんとする）にどうしようもない異和を感じて来た私にとって、かかる事態に対する自己の決定的判断が要請されていた。すなわち、三上同志の表現や発言を象徴的現われとする「日常」的集団編成における相互関係においては確固たる基準を設けず、理論表現の水準内容を結果軸にした集団イメージ」に対する徹底的不満と批判である。もちろん、政治集団において冷徹な情勢分析力と理論的洞察力は極めて重要な課題である。にもかかわらず、その表現内容が集団的日常の相互関係や、運動蓄積に裏打ちされた、すなわち、実践的総括や思想的総括と裏打ちされた表現でなければその中味は宙に浮き、全組織的に回収されない自己幻想の一人歩きに

転落するのは必須である。我々の五年間の拙い政治経験を徹底的に對象化し、総括し、現状への切り込みと政治的構想の糧にすることを問われている。

従って、今我々にとって切実なのは、足下を直視し、相互関係の原則的基準を定立し、大衆的流動を基盤とした自立的闘いへの着手である。すなわち、私は今こそ相互関係における沈黙し不信の壁を突破し、遺性的共同性を打破し、真制の自立的政治運動—組織構築の機が熟したものと考えるのである。

(5) 現況を直視し、集団の修羅場から

△かくめい△へ!!

(1)

「人がいばん信じてはならないのは、即自的な党派思想である。新約書では、人がいばん信じてはならないのは、その家のものであるとなつてゐる。なぜならば、思想にいかれた経験をもつてゐる奴は、よほどすぐれたものでない限り、箸にも棒にもかからない人格崩壊者か、観念の伝染病にかかりやすいお人好か、どちらかである。政治のえげつなさをくぐつてなお純正な素朴な資質を保存してゐるものに出あうことは稀である」

「世界の了解を世界図式からはじめるか、日常の箸の上げ下ろしから始めるかは、もちろん恣意的な自己倫理であり、またそれ以外なものでもない。しかしながら、このいずれの発想も政治運動債を引き受けるしかないというぎりぎりの地点での決意。「甘えるな。自分の吐息に。まわりの吐息に。何でお前が斗かったものか。何でお前が耐えたものか。お前はたくみに甘えていただけだ。おまえがいつもたどりたかったものは自己憐憐の穏やかな充息。厳冬、大学の生ぬるい冬の季節、意気がるものにも唾を惜しみ、非憤がる者にも失笑を忘れた。やすっほい。嘆や恥しらずの舌に乗り切れるほど俺達は生を渴望していない。俺達はいつだって、まだまだやれたんだ。いつだってそうだったんだ。だから甘えてはいけない。自分の吐息に、まわりの吐息に。」

それ以降、学園斗争—党派斗争—沖繩—三里塚—早大斗争の激動を支えてきたものは、私にとって、69年を頂点とする行為の共同体験の言語にならない確かさであり、その共同体験で流された血や関係が復権しうるといふ△△△であった。そのことへの不当なハイエナのような収奪や、清算への激しい怒りの原点はここに源を発している。

世界認識の図式的理解からも、飯の喰い方からも私の政治—闘争への関わりは決してやっばしなかつたから。一切の關係から放逐という現実—大衆の感性的キ裂から端を発し、新たな關係に向かふとした共同意志を媒介にして成立した60年代後半の政治運動体験は観念の収奪や、接木的場への回帰等許しはしなかつた。そして、私達が—私達の戦斗がある時代性を獲得しえたとすれば、それは断じて党派的思想の優位性でもなければ、巷で流布されているような行為の突出による大衆への自己点火行為に於つたものでもない。「僕達の闘いは国家が影を落とすときから始まる」「僕は死ぬま

の帯域の問題になりえないことは、まったく自明のことしかすぎない。△政治運動△はそれに固有の帯域をもち、運動者に、その帯域の内部で消滅することを要求する。……ところで、頓馬な政治運動家は△政治運動△と△革命△が、なにか關係があるかのように錯覚している。そして、途方もない世界図式を描くのだ。

そして、頓馬な政治好きと政治嫌いが、その図式に従徒する。△政治運動△と△革命△がなんのかわりもないことに自覚的な者だけが、政治運動に耐えうるのだ。……では、ただの人達は△大衆△は何にたえているのか。もちろん日常生活の繰り返しに、夫婦や親子や職業の、どこにも解放されない卑少な生活に耐えている。耐えていないものなんか存在しうるのか。存在しうるかどうかは別として、亡者として存在しているのだ」「試行37号」情況への発言、吉本隆明)

△政治運動△の固有の帯域とは何か。理論的にはなく、私にとって体験的になにか、69年秋、秋期決戦、全学バリケードで逮捕され出獄した私のまわりの風景、それはその頃どこにもあつたことにはない。自治会—全学闘の霧散、何事もなかつたような学園日常、活動家の日常回帰に向かつての総括。「俺達は無惨にも敗北してゐた。佐藤訪米が阻止ができなかつたからか。全学バリケードが解除されたからか。機動隊セン波ができなかつたからか。否!!断じて否!! 斗争の敗北は俺の裡に何の崩壊も引き起こさなかつたかわりに、何も残しもしなかつた。……このとき、俺達は敗北した。とり返しつかない敗北を!!」そして70年春、主体の解放感を謳歌した当然の報いとしておそいかかってくる学園—家族關係の反動的負力があつたのだ。

(2)

現在、私達が視なければならぬのは、混乱しながらも存在している△△△の時△が垣間みせた時代の共有度のイメージと共同性の鏡に写し出された大衆の生活日常のヴィジョンであり、そこへ回帰しえず浮遊しているイメージの回収回路に他ならない。

共同性—共同体の拡散、理念的統括の解体と強インフレがもたらす民衆の崩れ打つ私的回帰が、牧歌的政治の基盤自体をほろくずしている事態の進行は、69年の敗北を幻想上の革命の不徹底性や行為突出力の不徹底性に置いてきたもの、そして延命してきたものに確実に死を宣言しているのだ。支配階級の危機は、大衆の私的回帰がもたらす議会への回路の切断と、経済共同体の露型状況に何ら対応をもちえず、かろうじて行政的権力を媒介に、民衆間交通の分断、疎外と、国家間交通の△外交劇△による擬似的回収への転回でそれらしているにすぎないところにある。

民衆の日常から見てこれほど△△△を相対化した時代はかつてないにもかかわらず、他方で自らの△性—労働—家族△という日常生活が、かつてないほど、日常關係から疎外され、追放され、射程や判断を構成することがきつない時代はないという風に現出している。そのことの反映として、政治運動の帯域に於ても、固有の帯域で耐えきれず、観念的にきつく、關係的—生活的にはできるだけゆ

るくという風にたち現われてくることも又、ブルジョワ国家に対応して現出している。

政治運動が幻想零に規定され身体に収れんする宗教でしか構成させられていないことと、政治主体の幻想上の革命から主題を産み出していくとの主張―実践の両者共、政治運動が成立する共同性や集団構成場からの追放、政治運動の浮遊状態という根源的危機からの逃亡であることは自明のことである。

国家が共同幻想を政治本質として、自然宗教という形で完結した構成をもっており、常に共同幻想の最高水準として存在し続けることに対し、聖書や資本論や吉本氏の業績がその領域で国家を無化していく大衆像、思想根拠を定在させていく、25時間目の位相と、国家が大衆の集団―日常の諸編成内部で泥々した日常経験でつむぎ出される全幻想構成と経済社会構成水準の接点で支配様式として収奪していく階級支配に対して、階級斗争を不断に組織し斗から政治運動固有の位相とそこからの不可避な政治―集団表現にこそ、私達は注目し続けてきたのではないか。

そこでの対象域の一義性とは、国家編成―社会編成内部から越境する階級―時代判断であり、問われるのは時間射程、回収基礎は集団の修羅場であり、その関係単位、結着規準は、日常価値構成、関係強度の度数にある。旧来の反体制的政治思想と実践のズレとして現出しているこの間の私達の危機は、全ての先験的政治思想による集団編成や、個に還元された身体的突出に意味を付与する戦斗集団編成、(幻想零の心情や感性の共同性)に確実な死をもたらさざるを得ないだろうというところを見とれる。

(4)

政治運動の持続が価値でもなく、不可避にこのような局面にまできてしまっている私達にとって清算するのではなく、プラスの契機に転化すべく引き受け、時代の新たな徴候を読みとり、何を押し出し、何を捨てるのかをはっきりさせ、自体の体験を対象化し、時代と関係に使うことをせよ。経験Vを我がものとしていくことである。そして、そのことの意味を問ひ、みづから為してきたこと、よくことこの価値を、日常構成の側で追いつめ、相互変容しうる集団の形成の向かう果てで、政治運動―政治集団の帯域内での死滅II(かくめい)へ突き進むことなくして、私達にどのような転身があるというのか!!

集団編成が内ゲバ状況であるから無効であるとか、政治組織運動が不毛であったとか高言する諸君。馬鹿を言ってもらっては困る。個の徹底化で関係矛盾が、△自立、政治、組織Vがどこで解放されるというのか。個に回帰して何か解放されると高言する人々が存在する限り私達の斗かう根拠は時代や階級からまだまだ与えられているのだ。

私は、凝制的な自由な個の連合という反動的回帰の延長上で、集団問題―表現の敗北状況を回避させた、単独者や、やりたいものの政治表現を浮遊させんとする諸君に対し、組織活動、政治指導上の自己総括とそこからの政治―生活思想の水準的回収を要求する。

私にとって、69年敗北、学園―分派闘争、沖繩―砂川―三里塚―早大インフレ共同斗争体験、4度の獄中生活、一年半の地下逃亡生

(3)

生身の人間の集団問題に、個の結着思想で登場せんとする部分や凝似的な自立した自由の個の連合という形で対置する部分や、一方での関係矛盾への志向性からくる判断停止部分に対し、累積された沈黙への踏み込み、関係的世界、日常過程への下降とその場への判断こそ強く要請する。私達が、問題として現在一義的に扱ってきたのは共同体編成内部の個と個のあり方であり、ここをばづした意識の私所有に基づく思想価値―非日常としての政治構成からくる自己思想と生活日常の地続き的結合がもたらす一切の政治表現は、集団表現の敗北に全くの無自覚か、政治人格の完全な破産者という他なく、階級攻防を60年代水準へ引きもどす反動的な試みという他ない。この前提をばづしては、私がつたなくはあれ、存在と関係の転位をかけて、階級や疑似共同体の打倒―止揚を目指してきた戦斗体験の完全な清算だと私は断言する。同志Aの三上治あての個人文書は個人への中傷という歪少化された枠で清算化されてしまうことに抗し、現下の政治―集団表現の内部編成を問ひ、累積された政治―組織関係への負荷を引き受ける政治的自立への判断提起であること、その位相で共通の論争を活性化させていかねばならない。今、真に集団表現の敗北を問ひ、その総括から政治運動の持続と転回へ向かわんとする私達にとって誰もが看過できないし、又誰もが現実の渦中で苦闘していることへの克服の方途―羅針盤として私は受け取ってきた。早大以降の諸論争をこの時代の試練と克服の問題、組織―運動へ急ピッチで根づかせていく作業こそ現下の一義的政治課題ではないのか。

活、I君の発狂、H君の死、数多い離脱者との拮抗等の重さをして、またそのことを構成していくことによつてしか、政治持続がなかった故、政治表現の空転化、集団表現と家族編成のはく離、自己対象化力の減衰に、(何でそうなるのか)を問い続けていくのである。今一切の△関係Vの不可避性をばづした凝制と退廃を撃て!!

以上の点につき、三上氏に政治―組織指導上の総括を要請し、そのでの生産的論争を徹底化するよう訴える。

最後に、荒けずりであり、意味不明、概念整理を二義的に、私がいたかったことがイメージとして伝わるのなら△私Vにとっての書き言葉はそこで終ると思っている。

同志諸君!! 共に進まん!!

(6) 私的整理と△現在V時の思想態度

◎9/10上京から各級会議に参加し現在私にある感情は、進行していた同盟内諸論争と事態に対し、私自身のかかわり(心的・現実的)が、あまりに浅すぎたのではないかと苦しい自省の思いである。私が事務所当番を観念ゼロでやっている時、各フラクに言うべき範囲でのみ関わっている時、家庭的雑事や、娯楽にかまけている時、一方で、同志三上の15年の政治生命が問われており、他の諸同志に

あつては5年間の共同的信頼関係が崩れていく事態に言ひに言われぬ大きな心的負荷をこらむつていたのであり、そのことが、私に気づかれていなかったことは全く自分自身が嫌になるほど、辛いことだ。中央委員会に於いて、三上氏の言動を真のあたりにし、私は、本当の意味で思想や政治について心あらたまる気分になった。そして、自らのこの数ヶ月を恥じた。

私は、指導者三上に断固として私の下獄問題、11・19問題をどう考えのどと迫るべきだったのだ。A同志、B同志、C同志等の心の裡の寂寥もようやく現在判る気がする。

7月合宿以後、上京の折につけ耳に入る三上同志の問題、〇〇同志問題等も、多分今から考えたと私にとっては、今迄にあったことという範テウでくくられていたものであり、あまり尻馬にのるような形で批判すべきでないという低度の事態認識でしかなかったと言える。理論問題での検討も、私がどこまで言え、書けるかとは別に、「ちょっと突込み」が無いというところであったり、「これでは、政治論文にならない」のではないかとこのころでの不満に止っていた。

その背景での、思想態度や価値基底、生活思想等についてもまだまだボンヤリとしたものであり、あまり人に言ひうる事ではないのではという感じ方であったのだ。

しかし、中央委員会に参加して、三上同志の「単独者での表現をとる」との言明を聞いた時、私には殆んどこの間の私自身の立て方、かかわり方が、事態と無縁な所におこまれている事を知った。

きたことについては、正直なところへ驚きがある。しかし、昨年来のフォード斗争への中央参加可否を巡る書記局との討論で問われた政治、実践イメージの転換、本年初頭での「大道無門」論文を巡る論争。その後4/28中止から7/1/7/5へ到る過程等をみれば、思想(言語)領域での応酬から現実判断へ判断から思想態度へ、態度から態度そのものの基礎(日常構成)へ到ることも現下の悪条件下に於いては私達(私自身)の経験水準や現在為していることとの内的衝迫度をからめてみれば必然の途でもある。

この間の三上氏文書と中央委文書、A氏文書を介しての私の判断は、それ故中央委員会の判断、A氏文書に於ける基本姿勢を支持するものであるが、問題はA意志V/A不可避Vを巡る言語の使われ方と、それを媒介としての究極的な政治、革命イメージと自己史の幅でのかかわり方、集団問題(思想グループ化等)について、現在判断の射呈および展望の領域へ一歩進めることが要請されているのではないかと思っている。つまり、現在何をどうし得、為すべきなのか、諸派、ブルジョアジーの動向の中で如何なる橋頭堡を(生産的)に創出するかについての現実的具体的方針についてである。もちろん、これらについて多くはA未知Vの領域に属しているのであろうか、依然として私達が政治集団である以上現情況に於いてはこの領域が最重要であり、私達の論戦の真意、それをはずしては思想のこぼれしか流通しない現在までの累積的矛盾に陥没すると思われる。判断の(展望)第一は、9/29集会で立てられていた(9/30行動を含めて)問題について至急そのレベルの方針問題を確定することではないか。そのテンポをみきわめ組織転換、再生、処理等を為さ

筆法鋭く、口論厳しいA同志の構えに深い慮りがあり、B同志の三上同志批判に、何とかして変わってもらいたいという裏打ちが為されておられ、Y同志の内向する言動に心労極まったという苦痛があったのに比して、私の沈黙はあまりに軽かったし、そこでは本当にA関係Vに向かう思想が火花をちらしていたのだ。

私には三上同志の如く確信を持って言うことは出来ぬが、政治問題を私達の累積や、状況の現在で、成立させんとすれば、集団問題に執着することからしか始められぬということは、ぼぼたしかな事だと思われる。政治問題と言わなくとも、思想の態度として、累積している集団矛盾、離脱者、脱走者、19被告団、9/16被告団、死者、精神病者、シンパ、等の集団関係が不可避にむぎ出した諸事態とその継続に、如何なる形であれ、思想の域で対象的であることは最前提であり、そのことをはずしては、思想として現在を語る資格はないはずである。それ故、私は充分には真意が測りかねるところがあるが(本人と直接話してない故)三上同志の現在の判断については、全否定の評価を持っている。

そして、今後予想される三上同志の擁護や、それへ追隨し中傷に加担する部分に対しては、私は全力でそれを粉碎する決意である。

また、過程における論争については与り限り参加し、自らも組織する所存である。「判らないではなく判ろうとしていない」と言うべきだ」は、現在の私と私達の言葉である。

7月B大会段階で象徴された指導的同志間に於ける意見相違判断分岐は、この一ヶ月余の間に現在態様の如き煮つくりを見せて

ねば、現在地区、地方展開を自立的に為している部分や、対外的な連絡―統合条件もどのようにならうかと一時中断Vのうきめを見ることが必須であると考えられるからである。

さて以下の論争の中軸である24時間問題も(その多くは伝わり方や、話され方として25時間の側から為されている傾向があるように思うが)上記の問題を介在させぬところで一般として論議されぬ限り個々の政治関係(指導―被指導関係の累積)を捨象したA糾弾Vにしか関係としてなり得ぬことを危惧するからである。

私のイメージでは、政治関係に於ける話しことばの領域で諸概念が氾濫する事態はあまり頂けないと思える。もちろんこれは牧歌的な信頼関係や画一的内容の提示を意味しているのではない。すくなくとも言葉が多くなっている相互関係に自覚的でありたいという意味である。究極に言えばA自立VとA革命Vという言葉にどれだけ自分や関係の側で息吹きを与えられるかどうかという問題であり、それが駄目ならA生活Vに終始するという姿勢を問題としたいから(少々格好が良すぎるが)あえて言うのである。総括、過程的論戦内容をその判断等については徹底してA言葉多くV詳細に書き言葉として遂行してゆくことは当然である。

非政治、反政治的なA政治Vのイメージが成立する為の組織集団関係の前提には最底限、理論的共同的課題と現実的具体的課題の混乱が払拭され、上意下達式の統一流通概念のみという関係が無化されていなければならぬと思う。また、その分個々人が整分的論理域から感性としてA解放Vされているべきではないか。

私達はこの領域でどのようなA急進性VやA突出Vが可能なのか

が勝負ではないか。理論域での水準的整合性や原理性については、現在の私達の編成（内的外的）では全く不可能であることははっきりしているし、方法としてもそこから現在政治理論が構成される条件もないとすれば、限定し対象を選択し現在に回収される範囲で諸先達の作業をかつぱらうことであらうべきだと思ふ。

しかも、個々のモチーフが底割れしている現在では必然的に24時間での走向や指南力を明らかにすることから、関係的了解を形成し、経験（25時間目の）対象化を共通に立てる側で共同的作業に入ることにして理論域（政治）は立てられるべきであらう。

③ W地方での組織関係は現在の論争をナマの形で再論争する基盤は現在ないと言える。

もちろん、これは、24時間位相での経験が未だ私を含めて未成であることによってしている。それ故判断としては、一方で現在も継続中の労研―教研活動の関り方や、自身がこめていっているイメージ、R大斗争の判断をめぐる（この間の累積問題―烽火、ノンセクト）差と詰め弱さに集中すること、一方で未成ながら時々浮上しつつある対関係やバイト、就労問題についての個々の、共同的な判断と基準をめぐって論争を組織したいと考えている。

D大、R大天皇制部落集会、地方問題、教研、労研等について判断が最終的に立ってないところがあるが、これについても上述の進行とメドを立てて至急結論を出したい。

つまり、生活過程における諸問題は、ついにその個体やその家族の問題であり、彼の自己統括に帰するのであって、他者は啓蒙することとはできても、関与することはできない。思想的な表現と生活態様とは一義的に対応しない。そのような私の考えから視れば、この間流布されている他者に対する評価や理解はどのようにも粗雑であり、人間に対する根底的な了解を欠いているとしか思われなかった。

たくさんの言葉が、同じ様なキー・ワードが滝のように、私に押し寄せた後、私に残ったのは深いかなしみのようなものであった。私の共同性についてのイメージと全く異なってしまった現在の私たちの共同性に対して、思想的な訣別を、再び会うことはないであろう訣別を準備しなければならぬと考えた。

政治組織とは不可解なものである。ついでこの間まで相互に了解しえていたと思われる諸君が、急速に変容してゆき、ほとんど同じような単語をならべてしゃべりまくっている。「自らの言葉を持つことが自立の前提である」と確認してきた諸君が、何故危機に際会したとき、ほとんど同じ言葉を語り始めるのか。私はたった一人、とり残された場所、この不可解さを根底的に解き明さなければならぬと考えた。

政治的な表現や行為は私の日常生活に影を落とし、様々な不可逆的な刻印を残してきている。私は様々な局面で指導を受け、共同的な関係を引き受けてきた。そのことは、私自身が了解し、私自身が行為した事柄である。だから、私の日常生活における、政治表現の、もたらした困難さや諸矛盾について、私はだれに対しても文句を言わないし、責任を追求するつもりはない。もしも、私が何らかの理

(7) 断片

歴史の中には、どこに真実があるのか、たいへん見えにくい事柄が無数にあり、闇から闇に埋葬される真実は、その場に立合った当事者にすら気付かれずに、かき消されてゆくこともしばしばである。私が現在、眼の前に行っているこの間の局所における密室の中の闘いもまた闇の中であり、私の心の奥底からは「透視せよ」「透視せよ」という声が聞えてきて止むことはなく。

共同性から自由になつていない精神が、危機に際して、生身の人間を取り扱うとき、どのように醜悪な側面を露呈してしまうか。孤立した人間の共同性に対する根底的な闘いに対して、「聞く耳を持たない」と公言してはばからない諸君がどのようにうら悲しい心性によって応答するか。

私は視るべきものを視ていると思ふ。

私は人間の現存過程の個別的な現われ方には、様々の態様があり、そこにはどのようなみじめさや卑少な契機があるかは他者からは伺い知れない領域が膨大に累積していると考えてきた。そして、どのように倒錯した現われ方をしようと、その背後には不可避な闘いがあるのだと考えてきた。だから、何らかの規準による他者の生活態様についての裁断はできるだけ避けてきたし、そのような生活態様をめぐる諸問題は個別的に扱ってきたつもりである。

由により持続できなくなったとすれば、私にとって何事かが終わったのだと考えるだろう。私がいつどこで敗れ去るか私自身にも解らない。

私たちは未だ何者でもない。全くこれからだと考えている。

注 Iの四で取り上げた意見表明は、全て9月24日共産同大会へ向けて提出された(1)と(6)には、その前に出された見解も本人の希望から付加した)。大会においては、七月段階より公然化してきた同盟内論争に対し、予め中央委員会より各員の見解表明を求めた。ここに取り上げた意見表明は、それらの中から編集委員会が選択した一部分に過ぎない。(7)の断片は、提出された意見表明のうちで、同盟の現状に疑問を投げかけ、基本方向に異議を唱えるという形で、強いて言えば消極的に三上治の判断の側に就いた唯一のものである。他の見解とトーンが異なるが、敢えて収録した次第である。

叛旗

第9号

JUN. 1974

B5版 / 価 ¥400

戦後革命運動の鞍部と拠点

―党派抗争と権力構想―

|| 三上 治

生活圏の変容とかくめい

―集团的疎外と日常価値―

|| 神津 陽

支配の危機と情勢の旋回軸

―インフレ闘争の前進のために―

|| 共産同政治局

政治表現の原理的措定と

経験的総括

|| 立花 薫

日本国家と遺制的共同幻想(上)

|| 三上 治

転形期の思想水路

|| 神津 陽

インフレ批判の基礎理論(序)

|| 坂田 正彦

呐

喊

4号

70ページ

400円

全国反帝戦線連合機関誌

個別闘争・帯域と

我々の現在

I

支援にのつての〈争議〉と支援にのつての〈支援〉
「過渡」としての労働者集会と政治的関与の位相
戦后労働運動(思想)批判
〈たたかい〉の持続の根拠とは何か
―S工高闘争の総括―

畦倉 有馬 真 恭
齊藤 進 治
太刀川 守

II

学生運動の規準について
〈知的過程の自存構造と大学批判〉
大学像の解体と転向の根を撃て

坂本 直
藤田 浩
高見沢 洋

★蒼氓社でも取り扱います

発行所 新宿区百人町2-16-18 小林ビル105号

希望社
(368) 4630

叛旗

第10号

JUN. 1975

B5版 / 価 ¥700

II

△きめられたこと▽と△きめられないこと▽

一、BUND中央委通達

8月24日号、9月6日号、9月12日号

二、全国AIF通信

資料

8月15日号、9月5日号、10月7日号

一、BUND中央委通達

8月24日号

① B諸君、夏大会で再選(留任)された中央委は、大会段階での論戦の組織的処理、A大会準備夏期臨時指導体制、新聞、吶喊スケジュール等について幾度か検討、必要最少限事項についての実務判断を為してきた。だが、諸君昨夏B再編以降、政治実践概念、拠点指導、戦後価値評価、11/19被告団、編集方針、教組、自治体問題、労研F、最大課題としてあった日常構成、離脱者オルグ、財政問題、行動方針e.t.c.をめぐって幾度かの判断のくいちがいが生じ、組織活動上の相互評価を含めて、統一した組織文書を一人人が執筆することが不可能な事態が続いてきた。

しかし、少し検討してみればわかるように、そのような諸判断のくいちがいが空転したことは、何らの政治実践、行動、判断の要請へ踏み込む形ではなく、個々人の政治イメージ、世界把握、状況判断を概念整理と表現水準で計ってゆくという、討論の進め方自体に問題があったのである。そのことへの危惧は、諸々の形で拠点、地区Mから、あるいは4/28中止段階での討論に集中して表明されてきた。B諸君、情勢論と、集団問題を引き寄せた政治判断こそが重要なのだ。この課題に、中央委はこの半年間、応えるべく努力を重ねてきたが、引き延ばし、後手対応に致ったことにつき、指導の責を負わねばならない。漸く、何をやるかの方針問題をめぐって中央委統一文書刊行体制にこぎつけたこと、そこにおける政治判断を、結

果のみならず討論過程の要旨を報告することで、自覚的指導への一歩としたい。

② 日常構成を前提として政治思想深化、判断の引き寄せをはかるといふ大会結論は、結局やることだけ決めた(会場予約という意味で)9/29集会の内容、また政策阻止斗争としては取り組まぬとされた9/30(別にこの日でもなくてもよいとの意味)斗争、身体表現、原則的政治活動のイメージや射程という、現下の政治・組織判断の根幹を中央委討議に付したという不充分性を有していた。夏期における組織活動の偏重、新聞、A内通の遅れ等も、上記に因りがあったことは否めない。ここで8/17・18中央委、8/21における密集した討論で、一応の結論が出されたが、その論戦過程こそが重要なのである。

③ 8/17-18段階で集中的に検討・確認されたのは以下である。

イ A大会への取り組み、発言責任体制、地方連絡e.t.c.(口述)

ロ 現在における尖端的革命課題は何か―爆弾、内ゲバ
中ソ論争―自由国家評価

ハ 何に対して、どのように闘うか―政治課題設定と身体表現、

社会的現実

- (一) 組織編成(ロ、ハと連関して)―継続討論
- (二) ロ・ハと連関して新聞紙面構成変更如何。
- (三) (一面論文・政治判断：二面現在の矛盾への下降)
 - (イ) 地方、地区、諸戦線、対策
 - (ロ) 9/29集会内容と、9/30斗争設定問題。

④ さて、討論の順序は逆からと言ってよく、また現下の政治判断の焦点として、最も時間をかけて為された(ロ)の領域を報告したい。9/29集会をどのような内容で構成するか、政治・組織・実践転換と併行しうるか。9/30斗争を政策阻止としてではなく転換宣言の示威行動として行うことの是非の検討は、7/17と18での結論への過程、別の要素を介しての8/21での再検討は、中央委結論と附言へ継続している。判断の拡がりを引き寄せ、経過をたどり得るように、客観的に報告する。

- (イ) 9/29集会は政治判断と不可分な発言内容、7/1総括を踏えての準備過程等を保留しながら開催する方向は確定されていた。7/1集会で司会より秋期に吉本氏を招いて政治集会を行う旨の勇み足の発言があり、直後に吉本氏に事後確認をとり交渉にあたった三上氏よりまず、「内容を天皇制問題にしぼり、吉本氏よりの発言をうけ、我々はこの間の新聞紙上での発言等を深化し、天皇訪米は政治課題たり得ず、9/30訪米阻止を政策批判斗争として取り組みぬ

(二) その後、9/29・9/30は旧来よりの政治・理論・組織の全面転換の指標である(内容としても結集・組織強化としても)ことを確認。組織的に更にきつく課題が拡大し、時間には追われ、やる者のみがあるという旧来の延長で結果しない為の諸方策が検討された。そこで、B拡大、再編、個別的決断、諸戦線との接触、日常活動点検等に移り、主に③、④、⑤より9/29、30と組織転換を併行させることは無理があるのではないかと、生起し累積している組織矛盾を内容、組織関係としてメスを入れることが重要だ、9/29・30も天皇訪米が主対象でなくなったのだから白紙に返し、時期をずらしてもよいのではないかと等の発言があった。実際、究極の問題が、革命、政治、組織選択の根拠、自己射程から浮上しており、この領域で、この間、B大会で明瞭な判断に食い違いがある以上、革命の根本問題、イメージ、表現主体と、政治組織・運動の連関、規程について徹底して煮詰め、それと併行した抜本的組織再編、重層化、個人射程との連関を各人で明らかにし、転換を克ちとる欲求が一義であり、9/29・30は組織行動としては中間形態であることは共通見解である。ここで、形態はともあれ、革命の本質問題・組織の最大課題、成員の関心事につき、徹底して差異を明らかにし、結果水準に応じた再編を為すという事で、9/29・30を白紙に戻すこと、新聞紙面の一面を政治判断、深層海流、裁判報告等で表現の連続性を確保しつつ、二面で個人署名での内容展開を連続的に出

という事で他党派との政治判断の差を際立たせるべきだ」との提起があった。

- (ロ) それに対し①より天皇制は政治思想の問題としても尖端的課題たり得ず、内ゲバ、爆弾、中ソ論争、インフレ等。や革命と政治集団問題等に内容を定めるべきではないか(後に吉本発言と「文芸9月号」等の領域で要請すべきではないかとの補足あり)等の提起があり、また②より7/1の組織的取り組みの総括、言語表現(書きことば)への執着が、身体的、話しことばによる、実践を疎外している構成を、革命、組織、行動の評価から転倒せねばならない。もちろん発言は①領域でたてるべきだし、政治実践転換の烽火として9/30斗争をとりくむべきではないか旨の提起があった。

- (イ) 討論の結果①等の内容集中は全体で確認された。②の9/30斗争提起については三上より、これまで立ててきた政治実践概念、表現の連続性の側と、意図はどうあれ客観的に訪米阻止政策反対闘争の一環へ繰り込まれてしまう故の反対意見が出された。その後、4/28集会延期や、7/1準備、水準的理論の空転(組織日常との分離)、集会に行こうというオルグと、一諾に斗争をやろうというオルグの落差等が、活発に議論され、結局9/29集会と9/30斗争(政策阻止闘争ではないという保留をつけて)を行うことが確認された。

す。組織内部で補註をつけ討論を経て11号を出し、12月位を射程に、全面的に政治・組織・実践の転換へ踏み出すことが決定された。

- ⑤ 8/21中央委においては「転換」の具体テンポ、進行予定が集中して扱われる予定であった。その思想的根本問題を②、三上個人見解を叩き台として検討に入った。

- (イ) 冒頭で、三上より議事進行には賛成だが、8/18以降での内的検討の結果、「転換」と直結せず、情勢への判断を内外に示すという意味で、9/29集会をやるべきであり、再度検討して欲しいとの個人提案が為された。これに対して①から、問題は根本的な領域を含んでいるから、討論をまず第一に24時間・25時間問題に集中し、そこでのイメージ・展開の深度をはかることが要求されていること。この位相について徹底的にあいまいにしないでつめること。更に第二に、組織・政治表現の転換のイメージと方向づけについての展開を実践や経験の累積の上にならして提起していくこと。更に第三に、そこから、現段階における日常展開と9/29・30の責任ある判断を下すことである。等の討論の整理がなされ、了解された。

- (ロ) まずA24時間V問題につき、三上と②のレジュメの評価をめぐり、徹底した討論が為された。ここでは、革命の最終的問題、組織位置、自己の関わりが、検討されたが、判断の食い違いは依然として残っている。(まず、①、④文

書を各々検討してほしい。

- (ハ) 9/29集会再提起の根拠として、③は外側からの組織評価、情勢に声を挙げ続ける必要性行動方針を介した組織討論、財政、日常活動の点検等を付加した。それに対して①、②の方から本年3月段階での4/28延期問題をめぐると同盟員総会での討論(4/28の延期の判断基礎とは何かをめぐると)の連続性からみて三上の今回の提起は逆転しており、「情勢に声を挙げ続ける必要性」とは何かについての判断が不明であるというところで討論が進行された。特に①、②は三上の昨秋以降の新聞紙上、組織内発言、日常活動上の判断と連続性がないのではないか、またB大会での発言と対談形式の個人文書(カット予定)と、今回のレジュメとが連続性がないまま領域を拡大していることへの内的経緯の表明要求として、3/30段階での4/28延期への三上判断と、9/29固執への判断が全く逆であることをe.t.o.を例にしてなされた。この件につき三上氏は内的連続性を主張し、組織指導上の総括を提示することを約した。全体においてこの組織上の諸問題につき、批判、討議を相互的になすことが確認された。一応、中央委決定として9/29をやらぬ既定方針が確認された(④)よりは、この件につきB段階で討論を行い、再審議の要請ある時は大会にかけるとの旨の保留条件が付された)。この領域の論争は、この間のみ全面化される問題であることを全員で確認した。

BUND 中央委通達 9/6

- ① B員諸君。中央委通信を手元に届けるに際して、本通信の遅れに象徴される政治・組織判断の現局面についての困難を徹底的に了解し、この矛盾克服への各員の英知を集めるよう呼びかけたい。この困難に対して中央委は如何ような結末に至ろうとも全責任を負う所存であり、現在その克服の方途と展望をめぐって中央委内部での意見対立があること、この問題の処理は旧来よりの叛旗派の組織運営、経験をこえる未曾有の領域への突入を不可避とすること。能う限り「精算的ではなく生産的に」問題解決の方向と判断と予測とテンポに意を用いること。当然ながらこの事態の処理は結論的にはB大会に委ねられ、中央委の各員も、機関としての中央委員会もその信が問われることにつき冷厳な判断を有している。先号の中央委通信での諸プランの遅れ、中断、変更等につき、中央委はコミニケートの方法等を含めて自戒せねばならないが各員は平時の指導批判の範型に留まることなく上記の局面判断に留意し、自覚的に自身の問題として討論、決定、表現、日常活動に参画されんことを、
- ② 先号以降の客観的な政治局、中央委レベルでの事態報告と決定事項から報告しておきたい。
- (イ) 8/23 A I F 大会等については周知の通り。発言内容判断等は A I F 全国通信 3 内通参照。発言者、司会をめぐると混乱は 8/21 当初と 8/22 末尾での C 判断差によるものである。主に三

⑥ 今後の「転換」問題のイメージ、論戦、組織化テンポ等につき中央委が各機関地区会議に全面的に介入することと同時に、同盟員各自の積極的な意見書、内容提起を全面化させながら、A大会後早急に具体案を提示することが課題として残っていることが確認された。

⑦ さて以上、中央委の7月～8月に渡る3回の開催での討論過程における展開の諸要項を客観的に記述することをこころがけてみた。当面三上、②の提議文書と理論誌10号、今夏期合宿地区合宿e.t.o.での累積と諸判断に基づいて、早急に、急展開で深化されることとが要求されている。8月中にこれらの領域につき、各級、各機関、各地区会議開催とそこにむけた討論の組織化が問われている。

⑧ 各員の意見書、提議については討論の連続性の上に立って生産的な進行パターンを形成する必要がある。まず、自らにとって必要なことは何なのかを基軸にして、窮極的には自立した自己表現の対他性の入場と構成をどう展望するのかを明らかにしていくことの一義性が確認される必要がある。それはとりもなおさず、各員が引きうけている領域と、自己の思想態度の実践(「格」の問題)思想がどこに現実的・現存的基盤をおいているのか、所謂24時間と25時間目の問題)の対他性、累積の評価、相互批判としてなさなければならず、そこでの集団・組織・表現・運動・行動の内容を確定していくことが今、我々の焦眉の問題として要請されているのである。

上とBの発言内容の「対立」としてうけとられている領域につき、その問題性格をA I F 内通を軸に先号と今号の本通信を背景にしながら各機関、地区の討論指導に全力を傾注して欲しい。

(ロ) 8/27中央委設定をなした。だが前段で現局面の問題は組織的手直しのレベルに留まらず各員が明瞭な決断を持って討議する他の形で的一般討論は意味がないとのC提案を政治局で了承し、この項につき政治局保留事項とし、日常活動の指導(↓略)を討議すること。Cが問題の一方の当事者である三上と、個人的、かつ政治局派遣として相互決断を下すこと。更に9/1～9/2政治局(可能な場合は中央委も)設定で結論を出すことと変更された。ここでは日常指導、全国体制(略)への過渡局面における判断が討議され決議された。(略)

(ハ) 9/1～2にかけて政治局後に中央委が持たれた。政治局よりの報告として現下の日常構成あるいは思想態度をめぐると対立は革命、政治、組織をめぐると根本的な事項であること。尚かつこの問題は我々各員の、特に指導メンバーから厳しい相互関係、総括が問われること。更には通常組織(諸政治・社会組織における風な対立のインペイ、あるいは処分公表における分派という形での処理と異なる方途を模索せねば、我々自身の今後の予測される事態への判断停止に陥ること。結党以来の最高指導メンバー相互の判断のズレを生んでいる以上第一期叛旗派の終了を自覚し、第二期をどのように展望するかを相互に押し出しつつ指導総括、責任をB大会に問う形で解決方向が提出された。その後の討論内容こそが重要である。(③として一括する)。決定事項と任務に

ついでには最終的には以下が確認された。

(1) 9/24 B大会を設定し、累積課題、指導総括、論争点、相互批判を含めて第一期叛旗派の終了を自覚しつつ徹底した口論をなすこと。第二期叛旗派はこの過程でこそ準備され内容的、思想的持続と、組織的・運動的転換が軸であるが、この軸をめぐっての対立は形態はともあれ、組織問題として処理されるべきこと。相互の人格批判に触れる領域の扱いは第一期叛旗派の終了と共に各人の中で埋葬すること。(公的なものとしてはこの領域は扱わない)

(2) 新聞紙上での先号中央委通信における公開論争の提起は、その前段での判断に食いちがいが生じた以上不可能であり、9月1日号をA大会特集号で組み、9月15日号休刊、10月1日終刊号(廃刊ではない。次号は名称はともあれ再刊一号あるいは第二期一号の形となるであろう)を出す。この終刊号の内容は9月24日B大会段階までに準備し、そこでの判断に従う。(9/24は第一期の終了確認が前提であるが、組織、運動としては連続しているのだから9/24時点で次期イメージ確定が要請される以上当然である。会議形式は別に検討を要す。)

(3) 上記のテンポにそってまず中央委報告(注、本文章)と三上文書を早急に提出する。A内通、財政、被告団、全国体制、各機関総括等の必要性が確認された。

(4) 9/1/2以降各機関、各地区討議が進みいくつかの判断が要請されている。特に三上の側から新しい条件が提起されている。9/10三上文書に詳細は委ねるとして、重要な前記の判断に変更にも拘わる問題を含んでいると思われるので本通信末尾に政

れない)

(3) 地区や諸戦線の日常組織はその編成を下降し、具体化し、自立化を図る。

(4) 集団編成は状況の必要性に従い、情勢如何で行動組織をつくるが、関係、生活域へは原則的に不介入。当面BUND、反帝戦線を解体し、個人立候補によるゆるやかな結合で党派性の止揚を図る。

(5) 去る者は追わず、来る者は拒まず、身体行動はやらす「ただいってみるだけ」という批判があっても、そこに革命、政治、組織の突破口を見出す他ない以上「いってみるだけ」に全力を傾けるべきである。

(4) 三上の要約(1)~(5)の第二期の政治・組織イメージに対し、Bより自分のイメージ、判断は全く逆であること。Dより同旨。Eより離脱者オルグや、11/19被告団において問われている問題はそれでは回答し得ない、理論経路を明らかにして欲しいとの要請があった。三上より重ねて前出のイメージは未確定である、判断保留している部分があるとの補足があったが、Aより細目に変化があっても大枠において変更が(あるとは思えない故に)ないとすれば、三上のイメージは思想(集団)グループへの解消であり、総括、指導責任抜きでの現叛旗派への清算であり、地続的延長での転換はありえぬし、支持できない旨の発言があった。Cよりは、累積している各員間、離脱者や、ンパとの関係、現存矛盾に配慮する方向で、内部論争か、分派斗争か、組織問題以前の人格関係の解体なのかの扱い方へ、討論を具体的に絞るべきである旨の発言

当局よりの補足として問題点をまとめて提出しておく。

(3) 先号でのA日常構成VあるいはA思想態度V問題についての決定的な判断の食いちがいを指摘し、そのことに直接ふれている三上、神津文書の検討を要請した。そのレベルでは、思想判断の差が、どのような現下の政治、組織判断の差へ至るのかは確定的ではなかった。9/1/2における討論はその不鮮明な箇所へスポットを当ててなされた。

(4) 三上の側からは、冒頭、現下の諸問題につき、自分自身で混乱し、判断停止に陥っている領域を、政治運動を持続していく方向の下で、まず相互関係・共同性の問題、次いで革命・政治・組織問題で問われている理論問題の整理と自分の関わる可能的条件について検討したい。そのために二ヶ月位の総括期間(実質的には活動領域限定、自己権利停止申請)をくれ。また第一期の終了を確認すると共に、自分としては生活域、関係域、人格批判をめぐる領域は徹底してやるが、ある時期がくるまでその内容は第一期と共に埋葬したい旨の発言があった。その後判断は、討論過程で可能条件の中を含めて中央委判断に委ねられる形で二転、三転したが、中間結論でもよいから、政治・組織イメージ、可能条件を提示して欲しいとのA等の要請により、未だ確定的でないとの留保をつけて以下を提出した。

(1) 「書く」表現内部での転換が革命、政治組織の最大問題でありそこでの水準的表現者によって機関骨格を形成する。

(2) 現状において身体行動の血路はない。(革命戦論を越えら

が、関連してなされた。Aより更に、三上見解はイメージとしてはSeot6や、叛旗派結党以前のインテリ大衆BUND構想に類似しているが、中心問題はこの五年間の斗争と組織の総括であり、自分は9/16三里塚、11/19沖縄、早大インフレ斗争等の過程での判断と、引き受けた課題(集団矛盾から下獄問題まで含めて)を組織的個体的成熟の不可避性と把えており、この問題をここで解く以外に政治運動の持続の根拠はないと考えている。

三上は、この五年間の歩みを自分のイメージと組織の動きがズレた、悪い方向に道を誤った、ないしはズレと組織、集団問題について二義的なものとして、異和をもちつつ処理してきたという判断を有しているのか聞きたい。どうしても、指導的政治責任を負ってきた者の発言とは思えない等の意見があった。この件についても、三上は書きことばで見解表明することを約した。

(4) 討論順は先後するが、(4)で問われている領域を、どのように結着をつけるのかをめぐっても検討が為された。旧来よりの組織内対立の一般党派における処理は、限界点ぎりぎりまで下部団体や公的表現で発表せず、極限に至れば多数派が少数派を処分し(多くの場合は公開の時点で除名)、個人の場合は闇から闇へ葬むるか(革マル派の森茂、中核派の田川和夫等)であった。我々は結党時点より、昨日の友は今日の敵的な覆返りや、美しく未来を宣伝する徒党の内部こそ相互不信で満ちているといった結合を、感性的にも、第二次BUNDの解体過程(特に情況派との関係)からも拒絶していたし、その地点の思想化を共同性の内

実とせんとしてきた。つまり、当初の組織メンバーの間では、相互不信が組織対立を招く事態は陥ったときはそれで終りであり、徹底して討論と表現の公開性と一致への努力を一義とする判断が暗黙の裡になされてきた。だが、ここにおける沈黙の共同性は、出発時点で留まる部分や、自己の突出へ執着する部分や、組織運動内部の相互関係で検証されると把握する部分や、それ以前の思想態度が最も集中して生活判断、集団問題に問われると考える部分やへ、新たな参加者への継承を含みつつ分化していったのである。

(1) 今回派生している対立は、その根幹において、ただ考え方の対立というに留まらず、どのような態度をとってきたか、何を為しているかへ転化することは必至(むしろ、そちら側から派生した)であり、中途半端な共通土俵の持続を前提しての内部論争や、その公開という形では収約できぬこと。

(2) では、党内斗争・分派斗争の形をとるかという点、その軸が象徴的には政治集団と思想グループの対立の形である以上、分派以前の指導、総括論争で終始すること。

(3) では、このような困難な局面を、もうつきあいきれない、そこまでくれば終りという形で、なしくずし的に活動機能停滞から拡散過程への歩みを放置しておけば、当然のことであるが各地区、職場、産別、被告団、また定期購読者、カンパ対象者、シンパ等との関係での累積する負債への責任回避に至ること。それ故に、新生のバネは解体すること等が確認された。

(4) その上で、では現下の対立を隠蔽、処分、内部(公開)論争分派、自然拡散の形を択らず、「清算的ではなく生産的に」克服

する方途は何か。この全く未経験の領域への踏み込みが問われており、中央委員会はこの件につき、先述してきたように、組織指導や総括問題については、まず党内で徹底した論争をなす。だがその問題は不可避に集団、関係、生活域での人格的評価へ追つめられざるを得ぬ故に、第一期の終了、解体を前提にす他はない。しかし、そこでの後者の領域は公的政治の場へは提出しない(第一次BUND、sect 6の解体等、また「試行」同人解体等)との方向性を確定した。他方で、現在の主要な同盟員は60年代末〜70年代初頭よりの活動を軸として自己形成しているが、60年BUND、sect 6等よりの継承は人格的には三上同志一人に支えられてきた訳であって、その意味でも現下の対立は、細い道を通って現同盟全構成員で再出発するという結論を得ぬ限りでは、どのような持続をしようとする第一期の叛旗派の終了であるのだ。

(一) 現下の対立は、はっきりいえば中央委員会レベルでは三上とニュアンスの差はあれ他の部分という形をとっている(積極的支持を得るような、要請する形でのイメージを三上同志が提起せず、あくまで三上個人の判断としている所にも原因がある)。つまり、多数派、少数派とかの形での組織問題以前における、累積した政治と、新たに考えられた思想というかみ合わない形での関係に至っている。三上はこの点につき、大枠③の(1)〜(5)のイメージを追い詰めて、④現組織内で全課題に應えるか、⑤現在想定される最良の革命へのアプローチとして思想グループを組むか、⑥来るものは阻まぬが、単独の表現者の途を択るかを決断するとしている。この件につき、決断を下す主体は三上自身であるが、

参考意見を述べておく。Bは④を希望するが、その為には24時間問題をめぐる思考変容が前提(つまり(1)〜(4)イメージの撤回)。Dからは、表現水準だけを問題にするなら③しかないが、現存課題に目をつぶる位なら沈黙(意志的大衆への下降)すべきではないか(自分ならそうする)と発言があった。Aからは、④の可能性をこの間最大限追求して現在に至っているものであり、人間の思考や日常を極限では外側から強制しえぬ以上三上の決断を待つしかない。Aとしては、組織内、外を問わず思想態度としての24時間問題を評価の軸とする。三上が④を択るならば、ただ表現された結果としての水準で評価するし、旧来と異なる結合の仕方はその一点において可能である。⑥の場合は、明瞭な総括論争の延長にあり、なしくずし移行とは徹底して闘う旨が述べられた。

補 9/5 BIA、BIC、9/6 三上〜C〜A間の政治局レベルの討論の中で、三上より「調査書や、日常時間構成や、アルバイトの必要性、個人カンパ等の問題でネックになっていることを、私生活への介入拒否や、妻の親への世話の不可避性といったこと。だが、これまで言おうとして言えなかったのであるが、本当は出獄後一年半、Xが〇〇〇〇を目指して勉強しており、それへの協力問題が重要な問題であった。言わなかったことはすまないが、今後の政治・組織活動の前提として了解してほしい。」との発言があった。Bからは、組織にいても、離れても地獄だが徹底して組織討論すべきだ。Cからは言うべきことは全部いった、後は三上自身の問題である。Aからは、それを聞いて今までの三上の表現や日常の変

容の経緯がよくわかる気がするが、判断には全く反対である。今までの相互関係における発言や、介入の累積も含めて、そのような判断を下しているならば徹底して組織問題として扱うべきではないか。そうせねば、政治局指導、同盟員相互、反帝戦線間、シンパとの関係を含めて信用的にゼロに至る。9/10予定の三上文書は、その領域に集中して執筆して欲しいと要請。三上も了承した。(個人事情であるが、相互信頼上の重大事なので付記した)。

BUND 中央委通達 9/12

④ 11日フルメンバーでの中央委が開催された。既に各人に配布されているA・Fの個人文書が提出され、以下が討論の結果決定された。(討論は後述する)

(1) 一切の清算主義を排し、組織、機関、各地区、個人レベルの討論を密集し、第一期叛旗派総括を9・24日大会へ結実させる。24日の内容については現機関から責任をもって提出する。第一期の終了確認後、第二期のイメージ検討に入る。

(具体案は別稿予定)

(2) 中央委・政治局を指導的に担ってきた同志三上を24日までの権利停止(本人は除名を要請)とする。三上は9/6、9/10、9/11と延期してきた自己総括を9/15までに提出する。政治局、中央

委、編集局招請に応じ、全組織活動につき、組織的統制下に入る。

(3) 三上を外して24日まで臨時政治局、中央委、指導体制を確立する。編集会議へは当面Bが臨時指導に入る。第一期の24日に於ける解散と、第二期の開始とは思想内容、総括と諸実務事項、被告団等として継続し、政治展望、組織規程等として飛躍があるが基本的に次期体制が根本的に構成されるまで、現組織体制を補強つつ進める。(10/1終刊号内容、責任も同様)

② 冒頭Aより、三上の思想態度、評価を中心に調査書、編集局活動上の不鮮明な三上の当件処理については、明瞭に、彼が自己批判すべき事柄であること。A個人としてはこの問題の扱いかい象徴される。三上の組織活動への関わり、現状への指導、判断留保は組織指導者の人格として疑問があり、その領域を共有、相互点検しえなかつた現政治局の限界を認知し、第一期の解体に関わる個人判断として提起する。

三上より、自己批判すべき事柄について、総括も含めて責任をもつて提出する。がAの忠告、見解については異論があり、私信なり、公開なりの形で反論と見解を出すと言言があった。続いてAより、文書は、個人資格で書いているが反論を予期していない。自己自身の思想、政治、生活連関については、判断を問われればいつでも述べるが、泥試合的個人関係は避けたい。事実的生活を問題にしていくわけではなく、組織活動に抵触する生活域、あるいは、政治責任、指導態度を問うているのだから、まず三上の側から、政治、組織活動上の総括こそが、問われていると思われる。

表現者としての政治的発言等を主張するというのなら、この間の討論も含めての叛旗派の清算であり、一切の対外的処分公開、内部での棚上げ、不鮮明な形での組織ボルテージの低下等の回避へ向けた、政治局、中央委、同レヴェルの努力への自からの背信であり、権利停止処分と活動限定を為さざるを得ぬ旨(討論を踏まえての)の提案がBより出された。三上はこれを受諾し、15日までにまず権利停止要件域についての見解表明を約束した。

④ 次に三上の権利停止の扱いかいにつき、③より、これまでの全努力はかかる形での組織処理を回避せんと為されてきたと思う。

政治・組織活動上の総括、相互批判・方針の分岐という形をすり抜ける以上に分派問題にはならない。権利停止処分になるということ、は、統制委の監督下におかれるということであり、これまでの〇、〇、〇、同志と等価に、シンパ、カンパ名簿の提出、組織内外を問わず政治的活動家との接触報告、可能最大限でのBへのカンパ等を受諾することであるが、それでもよいか。最も中心的な指導者としてかかる屈辱的な関係を私に取らたくないが、三上は権利停止者として当然の一切の政治組織活動の停止を含めて受諾するのか。現状の組織課題、論争内容に対応しえず、総括しえず、累積的な集団関係を扱えないのなら、政治思想の敗北を認め、いさきよく引く(自己転換をあらかじめ断っている以上)べきではないか。敗北者をもむちうつということは我々自身も予期せぬ敗北の道をはらんでいくという意味でも内省の糧の側の問題から最低限に止めたい。それに対して三上は、真正面から回答せず、あいまいな組織関係

③ この間の中央委での発言を引き継いだ形で各人の発言が為された後、三上より、判断が大巾に食いちがっている。現在のBUNDをやめる旨の発言が為された。ここでも三上より重ねて、職業選択の自由の範囲での私生活の問題であり、ほぼ今まで通りの活動は、可能であるが、組織の側で認めてくれぬ以上、止める他ないと発言した。

それに対して、一般的な組織共同性と私生活の分離の問題でないこと、具体的な組織活動上の判断、現下の組織矛盾をどう克服するのかの総括と方針の問題であること等の意見が集中した。次いで、三上が止めるというときの叛旗派との関わり方が討論された。三上は9/11/9/2の中央委判断は変わりがない。政治組織活動を止めるつもりはない。当面、表現内部の転質が政治の第一問題である。組織、グループは二義的で必要に応じてくめばよいが、ゆるやかな関係にこしたことはない。まず、単独表現者として書きつづけてゆくが、来る者はこぼさない。ただこれは24日B大会以降の個人問題である旨発言した。

これに対し、如何に困難であれ、現在の叛旗派の政治、組織課題に回答せず、無総括のまま、中心的指導者が、他の場で政治運動(形は単独表現であれ)へ地続き的に移行することは認められない。5年間の叛旗派を清算しての立論は中央委見解対立のレヴェルを越えている。この間の政治―組織、理論上の総括を責任をもって為した上での抜本的な方針としてなら、24日での個人提案として検討の対象となるが、それをすり抜けて、現組織の離脱と別の形での政治運動の持続に固執し、ただ言うだけの、ゆるやかなグループ、単独

に止まりたくないので、除名して欲しい。と重ねて要請した。

今までの我々の原則から、階級敵、権力の側からの明白なスパイ等以外は除名対象としていない故これは撤回させられ、結局三上の権利停止が本人も含めて全体で確認された。

この件につき、経験的組織原則として組織的処分の扱いであることが確認された。(略)

9/24日までの準備事項、24日以降の展望等につき残留中央委での検討は以下である。現下の中心討論は組織総括、24時間問題等に集中している。

もちろん、政治組織の展望は、方針にまで高められねばならず、思想原則、組織原則が総括問題に凝集する足下の不可避な条件を顧慮せねばならない。政治展望、どのような形の組織をどのテンポでつくるのか等は24日間に合うかどうか別にして、中央委を中心として責任を持って提起してゆきたい。

BUNDは、24日を目前に転機を迎えるが、地区、地方指導につき、内容問題は中央委内組織局部分が責任をもつ。終刊号の紙面構成・再建新聞内容等は、24日討論を踏まえ、新指導体制下で行う。

(もちろん細かい組織いじりは止して、現体制と、補強で過度体制を組む)

各人の判断、意見表明を組織活動を通して集中することを情況は要請している。

9/16・11/19裁判等の新事態は別途書記局より報告。

8月23・24（大会招請状）

① 劣悪な時代状況下で、自力で試行を重ねている同志諸君、大所高所の政治状況から課題を引き出す以前に、自らの思想營為、個別斗争判断、集団的關係保持の内的拡散に直面せざるをえない現下の我々の困難を、億するところなく直視し切開し、プラスの糧へと転化せんが為に、8月23・24日AIF全国大会を久方振りに開催する。幾多の矛盾をかかえながら恒常的に組織展開をなしている諸君、自らの課題を答えあぐねている諸君、職場や学園や地域における闘いの場の自足性に不満を覚えている諸君、全ての志ある諸兄弟の結集を要請する。

招請状、日程、議事項目は別紙の通りである。だが、ここで「叛旗」紙上を借りて公開できる範囲の外の、我々の実践的な現況と葛藤を、思想・組織・個別場の闘いに涉って下降し、よってもっと議事項目と全体集會、分科会討論を設定した由縁を明らかにし、同時に検討すべき議事項目のアウトラインに替えたい。

② 反帝戦線が現在拘えているアポリアは、組織体にとっても、接触、関連メンバーにとっても手に余るくらい多岐にわたっている。ここで手に余るアポリアを嘆き、その周辺をなぞったところで、何らの問題解決への糸口をも掴み得ぬ事は、他の事象と同様である。拘えているアポリアが、累積されてあるものの現象と、状況的に押し寄せている波浪の過中にさらされていること、遺制や習俗や法制や経済システムや制度的家族やに拘らず、全ゆる共同なるものと

る部分には、神話ではなく焦燥が、閉塞状況への身体的欲求が常に侵入する。この傾斜は、政治本質が共同幻想にあるという洞察、国家の死滅が、党や階級の死滅と同伴するという判断、現下のいかなる対象的政治実践もその延長が革命へたどりつくことはないという断念、「にも拘らず」、「だが、しかし」という反すうを経て、対象的世界の壁への組織的対峙に固執せんとする。

政治本質、実践概念、行動の目新しさに拘らず、それが主張する至少な理念やへの批判は、自らが為しえず、為そうともせぬ行動的突出への批判を党派的思想で批判する革マル主義への傾斜ではないのかという危惧が、ここでは活動家の全共斗や安保斗争や、沖一砂一三やを経てきた自負を傷つける。狼事件や、皇太子訪中に際しての西田派の浮上以降のタブー化されてきたビンの流行や、クアランプール赤軍や、それらの理念の下らなさへの批判に余る、自らが何を為しているかへの検証を、政治的情勢把握と実践的突出、組織活動における規準の強化へ途を見出さんとする。ここでは、時代閉塞化の密室状態打破への、下意識の表現と、形姿への徹底した考察の欠如が問い返されねば、いつか来た道へ帰る他はないというシレンマを突破し得ぬのである。

右の両傾向は、我々の内部に於ても構成差はあれ浮上しつつあるが、（本当は幻想、内部にも、日常性の側からも政治Vがその場を失いつつあるという状況からの投影である。）政治的对象を考察するという作業の内部にも、集団へ所属して任務を遂行するという日常構成の内部にも、何事かを共同で為していくことへの思想や關係の迫力が欠落しつつあるのだ。

個体の内部意識や衝迫の接ぎ目に浮遊していること、つまりは現存的—關係的課題へ集中していることをまず見てとらねばならない。我々は、先験的理念に基づく世界のイデオロギ的分析から導びかれる総括—情勢—方針のワンセット図式や、同じく先験的な党、階級理念の呪縛から解放放たれて久しいが、古い神話の解体が次なる神話への依拠をうむという知的大衆の悲喜劇とは無縁でないのである。

この傾向は、今の所、体験的基礎予め排除しての哲学への傾斜として、基準が明らかでない水準評価や、自立や生活というコトバへの転倒した依拠としての全共斗M以降の一流行の延長を占めている。いうまでもなく、戦後社会の良き徴候としての恣意的自由や私利の優先は、全ゆる共同なるものからの離脱として把える視座をもたねば、ブルジョア民主主義の対語としての個人原理に墮するのであり、そのレベルの恣意は語の真の意味として個体の觀念的世界の内部を空転しているにすぎず、内部世界への不可侵、關係的相互介入拒絶の自己防衛をしか示しはしない。そこにおける矛盾は、組織表現における持続そのものの中に、個別斗争の不可避な集団編成との関わりの中に、何よりも自らの性、言語、労働を介した現存的—關係的世界の前での判断停止と習俗への同致の中に押し止めようもなく立ち表われているのではないか。

③ 自己へ回収される外ない自己表現（これは至少化されて書き続けることと転倒されたりする）や知的関心（これは至少化されて世界史的幻想水準や自己関心に限定される）の自足性を退ぞけて、自らの思想的・政治的・運動的共同關係や組織關係に執着せんとす

ミニコミ誌の隆盛、表現内部価値を日常価値と取り違える倒錯や他方での幻想性ゼロに至った内ゲバや具体的ロマンとしての狼や日本赤軍やの再生産は、ただ状況の指標としてのみこれらを読めと我々に強いているかのように見える。だが（政治）思想や組織が、政治的、社会的対象を、状況の指標としてしか把え得ぬとすれば、その時点で政治Vは自からの旧来的根拠を解体されているのだ。

この政治Vの浮遊状態は、自己幻想や表現への執着、亡霊的生活に於ては、幻想性ゼロの身体行動や、習俗としての大衆への下降に於ても回収の場を持ち得ない。我々の政治關係、経験からしても、幻想的、日常的に政治V域から外れたものの中で、徹底した思想の単独者の作業も、徹底した自覚的大衆下降者としての表現もひびいて来たことはない。我々が、对象的に共同性—共同体拡散の波浪にさらされながら、政治V思想や集団に固執してきた根拠は、右のような経験的時間の流れから意志的に分離され、メスを入れ合う段階に至っているのではないか。この時点で、我々が革命を像や論理としても、集団編成の問題としても対象的に、總体的課題として相互に突きつめる過程を外せば、必ず思想においても生活においても中途半端な習俗としての政治V化と、無自覚なままでの自己思想と生活日常への内部分解を更に拡大させる他はないのである。我々が解体しつつある政治Vの側から、状況の指標とし、諸実践を受けとるのではなくて、我々自らの政治V組織Vを对象的に扱うこと。意志的に個々人が課題に直面することがまず問われているのだ。

⑤ 旧来的な意味での思想的ジャンルも、組織領域区分も、一挙的に崩れつつある。文学も、政治、思想も、また都市も農村も、各戦線と機関も、我々についていえばブンドとAIFの相互関係や協力内容や独自活動の領域も、境界が不明瞭に、課題は共時的に浮上しつつあると思われる。我々が、かくめいの論理、構想、射程を各自の掌中に引き寄せること、他方で对象的に政治を扱う組織位相を確定し、その内部関係相互評価、組織日常の準位を各員の日々の実践場に回収することの指標と志向を手離さぬ限り、我々の「政治」の、そして「組織」の困難の切開と公開は、この劣悪な閉鎖的風土の中での、最も革命的な思想と実践足り得ると思われる。

A大会は、その基本構成を、右に述べた現況判断を伏線に对象的世界の変容と我々の課題についての報告、またAIFに連関する集団的、組織的、日常の状況と課題の報告を全体的に検討し、分科会の構成は一応非学生、学生に分割して、実践的運動展開の現局面を直視し、相互に到達点を明らかにすることとして設定されている。

A自体の組織性格をめぐって、また全国各地方メンバーとの距離判断について、大衆運動における「場」をめぐる確執について、検討は更に進化されねばならない。「叛旗10号」、「喊4号」、各地方地区パンフ、「呐喊」特別号(8・23刊)準備過程でも示されるように、関心や感応する個所の差はあれ、浮上しつつある論点は、全体的な問題として各員の判断参加を要請していると思われる。

⑥ 思念と、感性のメスを、各々の観念と日常にたたき込むこと、構想水準や、関係日常やとの連関を手離さず、なおかつ私は私であ

全国AIF通信 9/5

本内通は以下の構成をもっている。

- ① 8/23~24全国大会の経過と総括点
- ② 9/29天皇制集会の中止について
- ③ (省略)
- ④ "

①~④は密接に連関しており、①の領域は台風6号の影響で全国から参集不能であった多くの諸君の為に、能う限りの範囲で詳述する。とりわけ①でなされた公開的な論争課題は、各拠点、各フラクの経験総括と現況への判断への諸傾向を反映しており、徹底して深化が要求される。もちろん、現下の組織や運動の状況を推し計る基準は対象化された言語表現の中にはなく、又、事実や情報の集積にもなく、自らの日常活動の経験の対象化過程と、当面する累積した関係への執着とそれをくみこむ思想スケールであることはいままでもない。

① 23日は「対象的世界の変容」をテーマにまず、a同志より、「情況の局面は、自己の身体から疎外される自己幻想の領域が、对象的自然との多義的対応と特定の対象との幻想の縦深の構造へはいるが、現実の日常関係へ、つまり「家族」に象徴される「人間と人間の自

ると宣言すること(この宣言は書きことば、話しことば、日常営為、身体行動(表現方法の如何を問わない)、各員の判断と射程を明瞭に突き出すことは、革命のかくめい—関係のかくめいの前提でありかつ、持続的課題であり、現況的結語である。政治思想、組織における全表現域にリアリティを獲取せよ。その共同作業への転換の相互了解と意志確認が、本大会の獲得目標であり、また場所的課題への実践的回答の指標と強度でもある。心的世界における価値的行動の強度は、その強度に応しい身体参加を呼び寄せるのである。

AIF大会においては、右の議事予定、報告の合い間をぬって、地方発言、幾人かの指導的Bメンバーの現況判断と方向づけに関する発言が予定されている。白熱した討論を、討論の場への回収を、自らの課題を反芻しつつ意志的なAIF大会への参加を、

然関係Vとは、自然的に接地する条件をますます乖離させるという本質性を裸形化させていること。つまり「関係矛盾」に集中している。このことがインフレ、中ソ対立という国家や資本の自然的運動が、自体としては自己死滅の根拠から遠ざかる情況にあり、「革命運動」Vという概念の自然性を空語化させていること。諸範疇の複雑化に対する「方法」なき情勢把握が実証主義として均質空間と平板的な身体像水準として還元する事を極北化しているとき、そのような思想を拒絶して世界認識の構成水準を「個体」V「家族」Vという自立的範疇に翻訳しうる回路の側から「情況」Vの基準を創出して「く事」等として、諸政治、経済思想への批判視座が発言された。

b同志よりは「組織—運動経験からの情況の抽出」をテーマに、「我々の政治表現の危機が、歴史的に累積された幻想水準内部からも、日常関係域からも「政治」Vがらち外に追いやられていることにあること。内ゲバ、爆弾闘争の倒錯の興味性も、クアランプール事件も、単に情況の象徴として抽出する以外に方法がないならば、我々の経験域での累積や日常の組織や実践が情況の中で浮遊するという矛盾にさらされていること。このような自己解体と情況の喪失を拒絶する我々の主要な基軸は、自らの革命像と論理、集団編成自体を対象化し、自己史の射程と日常場でのたたかひの中から表現場の意志と不可避な(関係への執着という思想の立場からの)回路を選択すること。各自の感性の基盤や理念を自らの観念と日常の裡に対象化し、関係的世界が引きおこす像や判断を主張し、表現することにまず出発の根柢をおくべきこと」等の提起がなされた。

c同志は、a・b同志とは別の側面から、概略以下の発言をなし

た。「現下における政治表現は歴史的な表現の水準や位相からみれば『反体制的共同体』は実存しないが故に、『政治をやるなどいうのが最高の政治』である。にもかかわらず、私が政治集団を組み政治表現を行なわんとするのは、私の意志性というよりも、人間の社会的存在のしかたの現実性の側にあり、不可避性Vとしかいいようがない。人は『何のために生きるのか』という問や『何のために死ぬるのか』という問を拒否することが生きることの現実性であると同じく、『何のために共同性』や『集団性を組んでいいのか』という問を拒絶するのが、共同性Vや集団性Vの現実性であることはたしかである。真の意志性は、こういった現実の存在の仕方や歴史的現存性のあり方を拒絶することにある。そのとき私自身の関係としての共同存在とのたたかいであり、私の敵は私だということである。この矛盾は、一般的にいえば表現を介しての共同性や共同諸関係と、そのこちら側にいる現存的自己が矛盾していることである。確かに私達は表現されたものこちら側にある契機を重いものとして立ててきたし、こちら側の契機思想によって矛盾をこうとしてきた。しかし、非表現や沈黙の共同性こそ環だといっても、政治表現を介した関係のあたえる(つまり共同性もたらず)矛盾はとかないのであり、政治表現はその表現自体の中できれいになれる事はない。このことは、私達の組織問題における共同諸関係に対する原則の再検討を不可避とする。つまり、政治的であろうが社会的であろうが組織は人間の価値に逆立するのであり、表現価値V或いは意味的価値Vとして組織表現を再構成することでしか突破しえない。」と、吉本隆明氏概念をつかいて政治表現についての整理が

このことは累積した25時間目の問題の位相での意志の選択であって、決して不可避性Vではなく情況への血路への前提である。」として概念整理の問題ではなく、情況判断と革命イメージをめぐる論争課題であることが強調された。

24日はまずE同志より、C・D同志の論争的提起をうけて全体集会以要旨以下の通り発言をうけた。現下の諸政治潮流との関係においても、この間の我々の実践経験からみても、現在に累積されてある離脱者、獄中、負傷者や死者、財政問題等の集団領域から身を返らしての、一切の論議に対して、拒絶するという立場こそ、現下の価値的行動であり、情況Vへの直面する仕方である。牧歌的政治の解体が身体行動の突出としても、構想力水準突破と集団問題との接木としても、事態としての組織編成を不可避としないという判断が重要である。つまり自己史と生活圏の時―空で何が不可避であり、それが引きよせる政治―組織―理論ではどうかという、従来の意味での政治V―革命V―組織Vの根底的なAかくめいVにこそ、意志性が関与しうるのである。日常相互関係不問の組織編成、表現以前の日常の時間構成を問わぬ対象化されたA知(言語)Vの展開が、現下の政治状況で浮遊しており、転向―非転向論争、同伴―自立概念、全共闘以降の幻想累積と日常基礎を問わない習俗としての家族や制度への同致へ至るのは必然であり、あらゆる日本の知識層の敗北の道行をさし示している。つまり、戦後社会における恣意的自由や、私利私害の優先という観念内部での自己幻想の成熟は、遺構性としての集団・家族との屹立として、あらゆる共同なものからの離脱という意志性を問わねば、累積された観念のA時

提起された。

これと対照的にD同志からは概略次のような発言がなされた。「情況が政治表現の有意義性や有価値性を水準的には無化し浮遊させており、それへの本質的対処の仕方は、表現価値をとる。とらぬ以前の問題領域にある。我々も大衆も意志するとしなにかかからず、歴史的現存性の渾では、日常の生活圏で終始する事から逸脱させられており、吉本氏のことばを借りれば25時間目に非本質的にA生かされているVことも確かである。しかし問題はこの24時間と25時間目の分離が徹底的な自覚的、意志的課題となり25時間目の死滅の現在性こそ中心的な問題である。かつてある契機で政治表現をなし組織を組むということが私達にあり、それが不可避性Vであったとしかいいようがなかったにしろ、現在性においては明瞭でなければならぬ。現下の私達にとって政治本質Vとしての表現位相からは遙かに隔たった所にいるとしても、累積した諸関係は遙かに重いものであるし、そのことを引き受けることなくして現在の思想などは、対象化されたA言語Vとしての思想はあっても、本質的にはない。又A言語表現Vとしての思想に回帰することは、私達の足下の課題から逃れるものである。つまり、当初25時間目の問題でしかなかったものが24時間の問題に下降しかつ容解させられてきている現在の状況下では、私達は意志としてそれを引き下げる下降をなす以外ないのではないか。それに終始することであつたとしてもそこにA死滅Vすることがもし可能であれば、仕方がないところまで行きつくべきではないか。現下で政治本質から逸脱させられるとするのなら、私達は革命本質をとる。」

代水準Vの内部で一周まわって、若いみそらで老衰へ至ることは自明である。情勢の急スピードでの展開の中で、家族や労働過程やあらゆる集団関係に対するA感性Vの異和とその累積に直面しつづける中で、なおかつ自己の内的課題を表明しつづける判断を欠落しては何事もはじまらない。私達の政治実践・組織日常の準位を24時間の修羅場に回収する位置を鮮明にすることなくして、革命のかくめいも関係のかくめいも空語に墮すのである。集団編成の現在性の内部に全世界の課題を引きよせることなくしては、白々しさ以外の何ももないこと」等としてこの間の論争の浮遊状況に対して論争のA次元Vを足下の問題へ回収することが強調された。

分科会に於いては、従来のA戦線VとしてあったA学斗V、A労働Vという枠組をこえて、政治本質と革命と組織の断層をめぐり、議論され、現場における個別表現場では、制度的枠組と政治本質の背離組織表現内部におけるA心的行動VのA身体行動V封殺という情況下での、倒錯や非行の不可避性の検討に集中し、CDE同志の発言の検討と深化として浮上させざるを得なかった。

23/24の総過程を通じて、政治組織の選択の意欲が政治本質からも、価値本質からも、不可避としないという情況の裡に、我々が集団編成をなす意欲的思想の根柢へ向って集中したことは、情況に敏捷な我々からすれば当然のことである。しかし、ここに要約されたA大会の経過からも明らかのように、我々が70年分派以降の諸経験の累積がようやく、対象的課題となること、それを日常実践場でひきうけることの二重の仕様が、情況の中で強調の度合や関心の差によって徹底的に空転させられていくこと。このことに自覚的になる

ことを手ばなす時、我々を諸潮流の第五列や場末の政治サロンに転落することを教えている。つまり、思想場必然性や八自立V以外の諸要素をそぎおとすことがとわれている。

⑦ 1集会で司会より秋期に吉本氏を招いての政治集会を行う旨の発言があり、それへ向けて様々な反響があったので、この内通で、この間の検討事項を報告しておく。9月29日は、天皇訪米の前日であり、諸派の政策反対のキャンペーンが予定されている。

しかし我々はこの間くどいほど「天皇制」は政治思想としても情况的にも尖端的課題たりえず、情況の中心環はインフレ—中ソ対立や内ゲバ、爆弾等の自由国家の八過渡性Vの浮上にこそあることを主張してきた。又、我々は4/28政治集会の中止から7/1へ至る過程で徹底した情勢認識と集団関係の統括として「政治判断」へ集中することに全力をあげてきた。又、その事の一定の結論付けと水準確定を介して、全領域へ転戦する諸準備をすすめてきた。しかし、現下の我々の主体情況の中で、革命、政治、組織選択の根拠が、つまり我々にとっての究極の課題が、自己射呈から浮上しており、八かくめいVの根本問題、イメージ、表現主体、組織、運動の累積的課題への規準を鮮明にすることが第一義であることの判断に達した。いずれにせよ、分派以降の、沖—砂—三、W大—インフレに集中した第一期叛旗派のM—組織の対象化が精算主義的ではなく、生産的に検討されざるを得ないという意味でも、70年代前半の諸政治組織の再転向や、春斗構造の解体やスタグフレーション状況の全面化に対する我々の斗いの規準を鮮明にすべきであるという意味でも、

抱をめぐって様々な論争がなされて来たことは周知の通りである。

(新聞紙上のみならず内通、各拠点文章、各フラク等参照)そして現下の爆弾、内ゲバに象徴される自由国家の過渡性の全面裸形化と「批判」はしても「止揚」は不可能という現状の中で、なおかつ八政治本質Vがらち外に追いやられながらも自己史と累積した政治的諸関係を引きずりながら、我々は何処へ行かんとしているのか? という鋭い問いを日々つきつけられてきたといえる。ここでの中心的課題は、一つには個々人の現存的思想であり、他方では情況への判断である。様々なイデオロギーや生活の不可避的条件を抱え持ちながら政治組織に結集する我々の現在を、目をそらさずに足下をみつめれば、自己史と生活圏の側から八政治運動Vの自体的連続性を希薄化する水圧と爆弾、内ゲバ情況に象徴される極限的な共同体思想の水圧に狭撃されている。このような中において、我々の政治実践が政治的信念や政治化されない感性的契機や、諸々雑多な心的世界を介して行なわれてきた集団行動が、行動や表現の可視性を一回性として死滅や封殺をされながらも、法的—階級的疎外の現実として社会の全幻想水準から強いられる関係に直面させられているという事態をどのように突破するのかわかるといって、きわめて実践的な要請からBUND内論争が浮上してきた。その一端は、前々号(A大直前と前号の全国内通に記されているが、この間の最高指導部の内通における統一的内容確定不能という事態に至ったので新聞紙上で扱ひの前に全国の同志諸君に公表したいと考える。別途に公開する三上同志の文章は、彼の意企はともあれ、彼が70年〇〇結成以降なしてきた諸表現、諸活動とその累積をすべて精算しているのみなら

八情況Vに対する一程の到達地点である。すべての同志友人諸君は、自己の組織—経験の累積、関係矛盾への対処規準の鮮明化、と新たな革命イメージ、と集中軸をより深化し、現下の論争課題へ意欲的に関わらんことを要請する。

全国AIF通信 10/7

前号に於ける「③秋期局面の判断 ④報告要請事項」の欠損と不明瞭な表現等の不手際があり、混乱を与えたことについては執筆より自己批判する。その因はBUND指導部に於ける責任の所在を不明瞭にしたA大会発言に端を発している。以下この事を含めて全過程を明らかにする意味で以下の構成にする。(B内論争等は、追って諸文章を公開する)

① 現下の組織的課題とは何か。|| Bよりの報告

— BUND内論争の結果と展望 —

② 秋期局面の判断と実践環。(別稿)

③ 報告・要請事項。(別稿)

① 現下の組織的課題とは何か。

② 昨秋のW大斗争の一巡以降、我々の政治実践をおおっている危機の性格をめぐって、かつまた我々の集団編成—集団間交通の根

ず、我々が現在直面し抱えている諸矛盾に回答するという視座を有せぬものであり、当然にもB大会で撤回と自己批判が要請された。

三上氏は撤回に同意し、一切の政治活動、表現の停止を自己宣言した。(経緯については別述する)三上氏は「私は幻想上の革命として、知的表現の不可避性をとるが、個々人は自立的諸斗争をどうぞ」として「面々のはからい」にゆだねているように扱っているが、現下の情況下で累積した共同諸関係は八—対—Vの關係へ回収しうる範囲での「面々の計い」の共同的諸關係への拡張は空想であるばかりか、自由国家水準への自己同致である。あらゆる意味で相互關係を軸に扱ってきた我々の組織編成は、歴史的累積として対象化された幻想水準の自然性を根拠としているのではなく、我々の感性的基礎とそれをつむぎ出す自己史と生活圏における日常の思想態度の現在性こそが中心軸である。日常の組織編成における中心課題は八規定し規定される關係Vであり八許容し許容される關係Vとしてあることはいままでもない。その八關係Vの異和の累積への対象的止揚の課題は「幻想の遠隔対象化」や「幻想構成の転換」としてはなしえず、自立した相互關係への転位と内部での埋葬の問題であり、ここに「階級判断」の中心課題があることは自明である。〇〇結成以降の 実践からみても、9/16、11/19、W大、インフレ斗争等々で直面した獄中、逃亡、自供、離脱、発狂、死傷等膨大な諸關係を累積しており八表現Vや八政治本質Vをとる、とらない以前の相互的心的過程における相互介入の領域にこそ我々の思想が負荷を負う場であり、かつ今後ますます広がり、深まっていくことは言うまでもない。このことなくしては八表現Vも八幻想上の革命Vも八自立

思想Vも味噌もクソもないのである。

⑥ 別掲する「三上同志」の文章の取扱いについては、我々における内部論争の扱い方の原則と諸経緯とコメントを附して次号「叛旗」紙上に公表予定である。B段階では一切のタブーを排して全員一致、相互了解の方向を確定してきた。今回の文書に至った過程はそれ故に旧来の党内論争とも分派とも全く異っている。その意味では今回の三上氏の敗北は彼個人の敗北であるが、一時代の政治思想の敗北でもあるといえよう。現編指導部たるBUNDメンバーは60年代後半〜70年代初頭からの活動を軸に自己形成をなしており、60BUND、seott6等よりの継承は三上同志の転変に内外共に象徴されてきた訳であって、その意味では70年への前史を継承した第一期叛旗派の形式上の終了である。しかし全幻想水準の歴史性の側からのVの終了としてあってもA個々人の幻想の総和Vの現在性としては依然として累積した我々の位置へ直面する以外にないという意味で、各称変更や再編基準を変更することはあっても、現在を止揚するMは継続される。再度BUND内論争を遡及する中から現下の組織問題の中心環へ接近する。三上同志の文章にあるように、この間の論争は、日常活動の評価やそこでの思想態度をめぐる卑小な微細な契機に終始している。それは我々の「政治的諸関係」が「非日常」であり「政治的な相互関係や現存性のとり込みなど」といって限りではどうこうということはないのだ」という三上氏の立論の空想性とは逆に、革命運動が、自立した個人の連合としてではなく、個々の幻想の総和の側から、歴史化された幻想の水準を回収すると

の事実性への歪少化と「自分だけ頼め」との自立思想の歪少化は、日常構成批判への私生活防衛、関係内部での課題のA表現水準Vでの回答(?)、そしてseott6への退行としてあらわられてきたのである。我々はVの経験的原則たる「不本意なことに同意するな」というテーゼからしても、彼はこの間のたかいた組織関係への他者のオルグ等をなして来たという意味では「政治責任」を徹底して追求さるべき位置にあるのである。「集団論、関係論がたちをかえた前衛論」というに至ってはデマとしかいいようがなく、ただ我々は彼が思想的に敗北しても責任は追求されること。旧メンバー含めてVの今後の活動には一切発言の資格がないことを確認しておくたい。

⑦ 問題は三上同志の「唐突」なとしかいいようがないクーデターの発言(8・23〜24A大会に象徴される)や文書にあるのではなく、日常の組織編成を介した運動領域への実践的回答課題の山積み状況であるというまでもない。彼の敗北に示される事態が、自由国家の過渡性の浮上が、幻想としての人間—自然をつなぐ過程が人間と人間の関係の直かのA経験場Vから遠隔化をますます強いていくし、それだけ関係矛盾は激化している情勢の中心環であることは疑いえない。爆弾路線が大眾の現実的感覚を代弁し、その理念的表現が、最も遺制的な国家思想だという逆説は、日本の革命運動史においてはそのなにより新しい事態ではない。そして政治的有効性や理念的波及を断念した上で爆弾や内ゲバは統廃し、オルソドキシイ—な運動スタイルの外から時代の転換を告げている。風俗や生活様

いう経験の場を不可欠としているという認知を重視してきたからである。そして誰もが予知しているように如何なる些事にも思想的に関与し回答をなすという。で、内部論争、党派抗争共同行動を組織し、そこでの構成水準を介して(思想的—関係的)、政治方針、実践判断を為してきたのであってA政治本質Vとしての共同幻想に自己を根拠づいてきたのではないし、ましては自己幻想が自己に反射する範囲に幻想上の革命と表現の場を扱って来た訳でもない。つまり、まず政治的共同的諸関係の不可避という個々人の恣意的な25時間目がありそのあとに24時間目の日常生活圏があるのではなく自己史と生活圏の不可避があり、そこで終止することから逸脱させられる階級社会の現実があり、そこでのたかいたに意志的に下降する思想的規準の側から、表現の時間を相対化する位置へ我々が立つことなく社会ビジョンの現実性も階級判断も空語に随すのである。生活問題や相互関係への心的介入は「ある事実が、事実が決定的」ではなく、個人の内部で想定される関係の準位と、他の個人の内部で想定される関係の準位が、個体の意識で演じられる心的ドラマにふれうる形で相互交流されることの不能性とは別に、現存の階級社会では差別的にあらわれることへ、对象的になることの最も現実的な行動である。大眾が日常圏で自己の生活思想の水準を、自己の言語、労働、性の表現の対他—対自構造を介して、日々手に入れる他ないように、不断に、我々も自己—他者の24時間目を問う他ない。我々の表現が、いつも自己を排他的な安全圏におきながらの日本の啓蒙思想へ随すことへ自己の歯止めは、表現と非表現の、発語と沈黙の境界と回収経路の位置の明瞭さであるのだ。三上氏の相互関係

式にまで深化した爆弾や内ゲバに対して、我々は政治判断として拒絶の立場にゆくが、その推力たる感性(時代としての幻想構成の深度)の現在性については決して手離すことはできない。我々も彼らも、政治思想の波及や指導—被指導の敗北や勝利でなく、全幻想への革命を指向しているのがA感性Vの現在の契機が、制度や武器器具の問題ではなく、生活圏のプリミティブな領域へ下降することにおいて彼らと訣別するのである。下降を構成可能であるのは思想の領域における関係—日常構成に価値源泉をみる我々の個々人の内的課題であるが、それを許容しないのは歴史的現存性としての階級社会の課題である。我々は、政治活動とその組織編成が、出身階層や、その表現方法の如何を問わないという扱いをするとき、歴史的現存性として人間存在を、個人に責を負わすことができないという意味でそうしている。しかし、明確な利敵・通敵行為のみならず、ブルへの自己同致や、自己利害を組織編成へ押し出す行為等を含めて、階級原則をその編成水準の内部で扱うことは当然であり現下の民衆共同性水準とその拮抗を軸に、経験的にも、思想原則からも規準をつくり出して来た。日本の政治運動の内部では、その行動や理論の内部編成自体に価値転倒の視座を行って推進されたことはかつて一度もなく、「原理主義—大眾主義」として啓モウ主義の円環を思想的に系列化してきたし、「いったことはやる」「指導部から突っこむ」ことをもって、その倫理性の基軸としている中核派に於いても、ただあたりまえの、大眾への意志的下降と25時間目の分離は自覚されず、党物神、知的コンプレックスと倫理的恐怖を軸に日常編成をなしている。労組は、青行隊や青婦部を内的編成の基盤

とし、外的編成をコネと顔ききで編み、政党がその上前をはねるという図式や、自己の思想的営為の現実を自己の日常構成に根拠けられぬ知識層の政党・労組・諸運動への応援団（同伴）として、この構図自体が解体されることなく上底化をかさねながら浮遊してきて現在にいたっている。全共斗M以降の諸Mにしても、まず孤立した社会の局所での斗いからはじまり、その波及が啓蒙のコミュニケーションへの転位した時点で、その集団編成—集団間交通のプラスもマイナスもふくめ一切を自己の累積した関係の内部に準位をおくのではなく、「歴史化」された表現への上昇に接木してしまうという不毛性を転倒できない敗北をくり返しているのである。我々は意識の自然成長性（私所有）にブレイキをかける、大衆の現存的像と自己の関係日常の側から集団編成の根拠を問ひ24時間目の内部の空洞と拮抗しつつ社会ビジョンの掌中の仕方に腐心して来たが、現下の状況下ではますます、その相互関係をきつく扱う事を要請されている。政治本質における恣意性と日常編成における遺構性と制度への安住という日本の左翼Mの伝統的パターンは、爆弾、内ゲバ、インフレの足下からの浮上と、何よりも我々の革命のかくめい、関係のかくめいの現存的契機や共時的現在の状況で共振している中で、表現V時間のデッチ上げや、とりはますます限定化される中で、我々の階級判断としてそうせざるを得ぬということ。現下のA表現Vをめぐる攻防は、社会の構成の特権的位置を介せぬ限り、自体としての構成をなせぬことと、その事の水準的評価とは別に、我々が価値的行動として、それを拒否することは次元が別異であることを明瞭にしつつ、Aあちら表現の時間、こちら日常構成Vという二元論

でなく、現存性としての思想規準としての評価を相互関係の裡から相対化すること。25時間目の課題は、日常構成のいかんにかかわらず個の表現水準のみが評価軸であることは、明瞭であること。（その内部に死滅の根拠を有していること。）等については思想と表現の価値基底としてくり返したちもどる鞍部である。BUND内の論争が生産的に生かされるには、このような現下の状況判断と自己射程へのビジョンの側から直面する細い経路をしつこく追求することを措いてない。

（補註） A I F 通信各号は同盟内論争と時期を同じくする経緯のなかで提出されたものである故、資料として掲載した。

Ⅲ 回帰への道か？ それとも飛躍への道か？

一、四月～七月

組織局文書 A・B・C、三上提案

63

二、七月大会をめぐる

三上所見、神津提案

86

三、八月期の論争点

三上意見書、神津提言

94

三、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

一、四月～七月

(I) 情勢論と補足的内容提起 組織局指針

(A) 対象的世界と政治運動の位相と水準

政治思想とは何か、という位相から始めるべきだと考えてみた。対象的な政治過程と政治運動の位相と水準を少しでも「現実的」——いかえればそれ自体としての時代的な幻想の位相と水準に定置させようと考えてみた。

政治運動も、それに関わる諸個人の社会的幻想の表出と見る立場からは、言語表出から行動も含めた内容として提起されなければならぬのは当然なものである。そこで私としては政治表現の内在性(連続性)について少し前提的に触れておきたい。

幻想構成、価値構成、あるいは世界思想—生活思想 e t c の諸概念の形成根拠について、私の理解する展開過程は以下である。

① 個々人の社会的幻想の表出は、人間の存在と人間と人間の直かの関係に複雑な媒介関係として挿入される諸契機、いかえれば人間の歴史的現実的な社会的存在の仕方が人間の存在と人間と人間の直かの関係と矛盾することを通して具像的な人間の存在と人間と人間の関係を抽象的なそれへ転化していく観念の運動(人間の幻想性)の自然過程として本質的にはある。

② 社会的幻想の表出は、それが一定の歴史的水準を有した段階で習俗、信仰、感性の体系として現われる。

③ 国家は(幻想対の共同性)をこれらの人間の幻想性としての本質が(遠隔対象性)として構造的に現実的契機に逆立する時、内部的に喰い破られる位相で発生する。社会的幻想の表出として生み出された習俗、信仰、感性の体系(共同幻想)は社会的共同性として構造的に転化する。

④ 自然過程としての社会的幻想の表出は、不可避に国家(最高次の共同性)へ発展していく。私達が国家を地域的に累積された自然宗教が個別性から一般性へと発展していく、つまり宗教、法、国家の発展様式として把握するということは、共同幻想(個々人の社会的幻想の表出の総和)が構造的に社会的現実過程と連環する位相として理解することである。それ故に国家は国家の内部本質としては宗教、法、国家の発展過程(個別性から一般性へ)であり、内部本質の外部で経済社会構成と無数の連環をしている。

⑤ 共同幻想(社会的幻想の表出)は、個々人の主観的幻想性が、社会の現実と係る位相に発生するのであるから、社会的幻想の表出はその位相と水準を扱うとすれば、幻想構造の内在性の位相と水準と社会的現実の諸契機の位相と水準の二重性としてのみ把握される。

⑥ 現実とは、それ自体としての幻想(観念)の位相と水準を有している。このことは、幻想の歴史性と現存性ということであり、現実とは、まさに幻想の歴史性と現存性ということである。

⑦ 幻想の表出は情況に還元される位相では情況の結果であり、個人に還元される位相では個人の追求の高さの表象である。(観念の運動の水準である。)

さて、以上の①～⑦までを一応整理の基準として以下の諸命題を

の側に回収される位相の二重性を有している。この二重性は根底的に重要である。私は前回の「情勢論」「大学論」で出来るかぎり、日本社会の現実性の側に回収する方法を追求してきたが、この領域は依然として私達にとって極めて未踏の領域である。「呐喊3号」等に於ける諸論文が、社会分析、現実把握に失敗しているのは必然的にこの問題であり、沖―三―砂総括の基礎が不鮮明なまま現状に至っているのはこの点であり、政治思想―実践概念が、自己思想の側のみにからヤブにらみに構成されている観がある。この点について討論を必要として考えている。

② 私的利害、私的感性行使の現実性と、その政治実践―思想上の課題は戦後大衆の意識上―生活様式上の構造分析と評価を介在させて展開させる必要があること。六〇年代の政治的―社会的大衆M₀の評価について(口述)

③ 日本の社会の二重構造の分析について

a) 二重構造の不可避性の証明

b) 二重構造の変容と転換の証明と分析

c) 日本ナシ・ナリズムとインターナシ・ナリズムのカンボツ

d) 大衆社会化論と戦後民主主義評価

e) 戦後資本制の分析と二重構造

f) 尖端―土俗の構造について

g) 遺構的共同観念と集団問題、遺構的観念の死滅の回路

④ 政治思想―実践の統括

a) 安保―日韓―ベトナム反戦

b) 六九―七一年(沖・三・砂) 諸学園斗争

とで解決していかねばならないことを私達に強いている。つまり、内的な結合―編成が一定程度、情況や情勢の進展に対して、思想のことは、で対峙しつつ政治判断を構成していくという我々の意志そのものも、古いもの、限定されたものとしている情勢―情況の転換に対する実践形での政治表現(組織対応)が要請されるといふ事態の到来である。

③ それは、戦後社会―政治構造に対する世界史的段階としての抽象性(過渡期世界論から現下のインフレ情勢への分析―判断)を介在させての对象的把握という極と時代的―現存的な自己身体と他者への関係づけの对象的了解の極とのすさまじい程の断層の裡で浮き彫りにされる構造指定としての分析―判断とあるが、我々にとつての不可避であり不可欠な判断領域は自己思想や個体原理の抽出を、時代的―情况的な客観性としてへ一般化∨現実化∨しうる、∧関係の構造∨総体の単位としての戦後社会―政治構造の分析であるはずである。その位相と水準での革命―組織―政治域の指定であるはずである。

④ 戦後政治と社会、運動と主体の何を革命すべきか。これらがある感性的、観念的な同一性(時代的)として扱われた先駆的な六〇年代から、私達は客観的―現実的な位相としてこの問題を扱う七〇年代のとは口にした。ここでは戦後革命の可能性と不可能がともに新たな段階への変容、転換過程として沈行し、屈折しそこで断念の上ではなく、そこへの連続的な累積(経験的・表現位相的)の上にした。た地点から、浮き彫りにされる諸現実を扱うという視座への転換―いかにえれば我々の飛躍が主題とならねばならな

c) インフレーションの諸問題と戦後社会の転換と変質

d) 左翼思想の変質と支配者階級の転換―権力分析としての二重構造論

e) 新左翼の変質と座折―自立思想の回路(体制内M₀とテロリズム)

☆ 政治実践概念と組織論について(略)

(B) 実践の現況統括と政治的展望に基づく陣型の創出について

① 昨年以降の組織問題の主要な環は、集団矛盾に対する個体理論と自己思想の統括を、抽象度の高い実践概念や政治思想の領域でなしていくという指示向線が扱われてきた。まず組織構成員の意欲と思想深化、表現過程への登場のつめetcが中心の問題になって来たが、現下の水準は政治―組織―革命の位相と水準をめぐって、政治M₀の理念―主体―形態に対する構造的な判断構成が、まず前提的に鮮明化される側で組織構成員の意欲と政治への関りが組織されねばならない段階に突入していることが決定的に重要であるといえる。

② 戦後社会の評価、戦後革命運動への对象的指定、我々の六〇年―七一、七二年段階の思想的―行動的実践の総括が、まず对象的に指定されなければならないということは、従来の闘争サイクル、情勢―総括―任務方針の枠のせまき、先験性・固定性を超えなければならぬと考えつつも、それに対して大胆に踏みこえなかった主体域の矛盾と錯さうした事態を何としても一歩も二歩も前進するこ

い。ある歴史的抽象度からすれば(世界史的) 共同性―共同体の歴史の変容過程として戦後過程の転換を視なければならぬし、具像域・具体的関係の側からは、人間と自然、人間と人間の関係の構造として扱わなければならない。

⑤ 戦後社会に於ける思想―主体の擁護すべき契機、対決―止揚すべき契機として取りあげられた諸問題は、戦後革命の可能性の擁護と戦後革命の不可能性のテルミドールの反動復活に対する我々の対決としてある。しかし、可能性と不可能性の両義構造とそのバランスの上で成立した戦後大衆の生活の安定と不安定・戦後知識人の安定と不安定・戦後革命M₀の高揚と低滞といった構造自体の転換と、変容構造の裡に、新たな日本社会の現実的諸運向が展開されており、むしろ従来の我々の経験的延長と、我々の情勢判断の裡でどの様な∧政治像∨も結ばないこの現実こそ踏み入らねばならないのだ。勿論、そのためにはかって尖端的(外在的) 諸契機の裡で惹起された生活的、現存的諸契機が浮遊する∧意識の帯域∨に上げ底化されることを拒絶する以外にはないし、この現実を手に入れる方法は、依然として抽象的―総体的な思想作業と、想像的―創造的な政治的諸態の裡にしかない。

⑥ 現実社会の浮き彫りにされる諸事態は、内包的には法疎外や階級疎外の現実的抑圧の構造であり、外延的には従来の支配的諸共同性―共同体の解体状況である。共同性―共同体の解体状況をもって、革命的情勢一般に解してはならない。なぜならば、従来通り生活出来ない、支配出来ない、考えられないということの本質は、共同性―共同体の従来のな枠から諸個人の現存性や生活自体がはみだ

してしまふことの現実的矛盾の結果であつて、それは国家の一般性としての発展、社会の特殊的な展開という段階—法疎外の（政治的國家と資本制社会）構造的な位相を歴史的に想定しなければ解明されないからである。

革命的情勢・政治革命の判断が客観的—歴史的なものとしてあるということ（抽象性の位相で）、主観的—現存的なものとしてあるということの両構造として位置づけられなければならない。マルクスの革命概念が客観的—歴史的なものの判断としては、尖端的な国家（政治国家）と社会（資本制社会）の位相に集中しながら、政治革命の条件として主観的—現存的な条件をヨーロッパの後進国ドイツ、ロシアに見ていたことは自明のことである。このことは次の視座の構成として判断すること。時代や情況の判断は（歴史の発展の指標といつてもよい）農村の構造（共同体の分析）と法制イデオロギーの水準と位相（地域的—自然的・個別的な水準としての現存的共同性）の裡に模写されている。マルクスは社会のかくめいの本質が先進国革命としてしか成就しえないとしながらも、ヨーロッパの革命の現実性をドイツやヨーロッパに見たということは、客観的—歴史的判断と、主観的—現存的な判断の構成として想定していたことによる。この判断は重要である。戦後日本社会の本質的矛盾が国家の一般性（自由国家）と社会の特殊な展開の水準にありつつも、主観—現存的契機が共同体—共同性の解体局面によつて生み出されているということ。しかしこの契機自体を組織—展望する政治理念—政治M。も存在しないし、存在しているとしてもそれらは個々の社会の現実局面に下りてきている共同幻想（歴史的）の遺構的構成

水準として政治M。・実践の構成や構造的に貫徹していくのか。その構造の裡で地区活動の構成—再編の方途を生み出すのか、こうした位相として扱われる必要がある。

☆具体的地区活動の現状（況）総括と、その構造についての転換指標

①地区活動は、機関、部局活動と根本的に異なっている。地区活動は、この間抽象性を介して現実を把握するという我々の実践態度に規定されて、一方は△思想のことで▽を中軸とする理念的—思想的集中性と、他方では日常集団—組織維持への経験的対処に終始してきた感がある。この矛盾は一般的に理念主義・思想主義・経験主義 etc.として指弾の対象とされているが、（別の位相からは原則主義的な政治構成の主張もあるが）それ自体としては矛盾一般では扱えない。問題は我々が現在の位相で組織的に政治的に対処する仕方と方向性の位相と水準である。

D論文に若干の総括—視座が提起されているので、この内容の検討をまずし、かりと踏えておくこと。ここではいくつかの総括的な位相と経験から抽象した諸テーゼを開示しておく必要がある。

1)地区活動は、総合的な現実社会に対するヴィジョンの下で、具体的—現実的な社会の諸課題を構造的に連環させ、そこでの知的かつ大衆的な契機を組織することであるが、このヴィジョンの形成が難問である。これは政治判断の核であるから、八七号論文 etc. の評価を軸に展開しなければならぬ。

ロ戦後的な共同性—共同体の解体を歴史的な諸過程として累積し、

に密通する以外には成立しえていない。つまり社会の現実局面に降りてきている共同幻想を社会の現実関係の裡で止揚できない戦後政治M。の水準と、社会の現実局面で活動する諸個人の存在と人間と人間の関係を抽象出来ない戦後の△知的過程▽の水準こそが問題なのである。再度この問題について触れよう。自己の生活問題や日常関係自体の扱いについて、如何なる位相や水準で問題になり得るか（政治関係に於いて）ということについても、と徹底的にその問題を見つめてほしい。現下の革命—政治—組織の構造がこれら総体に対する再構成—指定であることは、徹底的に深化されなければならない。

⑦戦後社会—政治の解体局面は、勿論、政治国家の一般性としての発展、資本制社会の特殊な進展の構造がもたらす諸個人の現実的行動と実際の生活構造が従来の日本の戦後社会の共同性—共同体の枠組みを突破する現実的根拠を有したことをその内的本質として露出させていることである。それと同時に、このことはまた新たな革命M。と政治革命の構成をまったく根底的に深化—包括的になさねばならないことと同時に、具体的—個別的な諸問題を革命M。と政治概念の裡に有機的に連環させ、構造化させなければならないのである。八七号論文の△情セ論▽は対象域の指定を日本の現実的社会に照射させながら、何を抽象し何を具体的—現実的に取りあげ、どのような位相と水準に政治M。と革命概念の構成を実践的になしているのかという意欲で展開されているが、この領域が我々の今後の政治M。の△対象場▽△実践場▽である。

⑧何が対象とされるべきなのか、何を実践するのか、どの位相と露出している現実として把握することと、それを批判する（価値構成）視座は同一ではないこと。即ち、革命—政治—組織は（価値構成）の側からのヴィジョンの形成と歴史的諸過程との現実関係の真只中で矛盾するものとして指定することである。

△この矛盾を自己思想や個体原理の側で、あるいは生産の再生産過程—総じて人間の自然存在としての価値規定の側で回収する思想の包括性と現実関係として社会の矛盾を回収していくこととの間の距離を徹底的に意志することである。蜂起は予測できないが蜂起の客観性を透視することである。

二)地区の日常は、まず思想の包括性による指ドが不可欠であるが、社会の現実関係に対する諸判断の構成と、我々の政治表現の距離を正確に測定すること、このことを実践的に指ドできなければならない。

ホ)従来の労働、学斗指導への固執は総括しなければならない。

インフレ行動委員会は従来の地区政治構造の転換に対して如何なる位置と意味を有していたのか、それは労働、学斗といった従来の階層間M。の限定を超えようとしたことである。だが、その飛躍は、どのような政治実践（それは具体的に想定される傾向があった）として結実すべきかの政治判断が欠落していた。インフレ行動委の後退は、政治的—組織的に後退である。従来の諸活動の限定を超えようとした積極の意味をも投げ捨てられてしまっている。このことが重要である。我々はまず地区政治結合の理念的—主体的—形態的△像▽をインフレ行動委の地平から生み出していかねばならぬ。

△学対、労対的位相はより包括的に扱ひ位相と、具体的、現実的

(当事者M。)に扱う位相に分裂したまま、その統合軸も、内的連環も生み出されてはいない。なぜならば組織的—政治的的判断が、そこに日常性として介在していないからである。

インフレ行動委の位相と水準を地区編成(政治的)として構成していく側に注意が集中することである。A I F Kの学生部分と労働者部分の分離と結合を如何に構成するのかは、社会の現実関係の把握に於いては現況に於いては政治的にまったく同じであり、自然過程的契機と、価値構成の過程に於いて分離される。(例えば都市—農村、女性—男性、老人—青年)諸位相からの具体的—経験的判断に基づくものとしてある。つまり当事者M。(大学斗争、争議—労働M.o.e.t.c.)の現実関係への我々の係りは即組織編成ではないのである。

ト)これらの諸契機を明確に指定し、分離し統括する力は△思想△の力であるが、日常構成の判断に於いては、経験を介在させた政治判断としてのみ扱われよう。このことに注目して、やはりB編成の骨格と、地区政治の構造を確定すること。

チ)日常過程から浮上する政治性はそれ自体として大衆の現実直結するのではなく、構造を介して、個々の大衆の社会的幻想の表出を扱うことである。そこで浮上する現実的—抽象的課題をたえずくりこみ、政治判断することである。

(O) △政治表現△の不可避性と意志性の回廊—自立の△立場△の深化

①わたしたちは、新たな哲学を必要としているにちがいない。こ

ういう時代を想像するのではなく、わたしたちは現実に生きて△革命△を夢想している。

②昨夏以降のわたしたちの△表現△(組織的・運動的)の転換過程は、新年号政治局論文をめぐる評価のズレ、あるいは4/28集会の延期をめぐる論争過程で現実的な論争の課題としてはるかに複雑に浮上してきた。理論誌十号に於ける論文展開の方法と、強調の位相は多分運動的にも組織的にもそれぞれの論議を誘発せざるをえないものである。この論議は決して一般的なものでも、部分的なものでもない。強いて述べるならば根源的なものである。現存性の広がりから見れば、六〇年以降の歴史過程を包括するものであり、現実性の広がりから見れば七〇年以降の世界性の内容を包括するものである。△革命△とは何か、如何なる△かくめい△のかを真正面から問うことになるからである。七〇年代後半の革命運動の△指標△が根柢としてこの位相の広さと深さの獲得過程であることも、現象的には戦後第三の綱領—戦略論争に転位することもわたしたちには自明のことである。と同時に△実践△概念の変容が対象世界の△変容△の引き寄せの構造に於いて複雑化、多重化するであろうことも自明のことである。なぜならば△関係の構造△の△場△自体が△自然△としても△幻想△としても多義的、多重的な展開に突入しているからである。

③全幻想構成の転換の中心環として「共同幻想を止揚する共同幻想は自己幻想(自己幻想としての自己幻想)である」という幻想表出の本質的展開の段階に歴史が突入していることは、この間の諸論議の中心テーマであった。対象世界の変容(時代の幻想の共同性、

の哲学は人間と自然の単純関係に於いても、人間と人間の複雑な関係に於いても、また人間と自身自身の根源的な関係に於いても、それぞれの関係の歴史的累層とその連環を透視する様な作業として迫られていくであろう。この問題は決して知識一般の課題でも認識論の改訂(梅本、梯、等主体性論者の転向と藤本進治の墮落ぶりを見れば良いし、革命論に於いて認識の優位性をといた植谷雄高の頓馬ぶりを見れば良い。)でもない。ロシア革命以後の革命運動の歴史的な現存性が徹底的に存在の現実関係を透視することも、関係づけることも出来ないでいるその基底を越えよということである。

かつて△自立△という思想の△こと△が六〇年安保の敗北の荒野から産み出された。たれもこの△自立△という思想の△こと△を△理解することは出来なかった。その理由ははっきりしている。

△自立△という△こと△は△自己表出力と対象指示性との交点が言語の現存性の帯域の外に存在すると同時に、その内に存在するという△二重性△を帯びていたからである。帯域の外に存在するという意味では△自立△は△像△としてのみ流通しえたし、帯域の内存在するという意味では△自立△は△概念△としてのみ流通しえたから。六〇年代というのは、この△二重性△としてのみ時代の転換の△過渡期△を意味していたといえる。現在、依然として△自立△は、その△概念△の対象としては局地的な諸運動と戦開の裡に生きづいてきたにすぎない。△自立△という言葉は圧倒的に△像△を呼び寄せる位相でのみ根柢的に生きづいていく。歴史的な現存性の構造から、現実的な存在の側に押し寄せた時に生じる△表現△の意志的な展開の裡に見い出されるか△表出△の核質に秘かに宿っている。

社会の現実の構成の、あるいは心的世界の変容)とその引き寄せの構造に於いて△革命運動△ははるかな飛躍と、現実判断の徹底性を要求されている。その突出の隘路とは何か。(中略)

(1) △政治・表現△の構造とは何か。

社会的幻想の表出△自己幻想の総和としての共同幻想の本質)と時代の幻想の共同性を架橋する構造として△政治表現△の構造を考える。

(2) △政治・表現△の概念△意味△とは何か。(中略)

この対他性は幻想対象というよりは△表現△の△対他性△なのであって△像△や△概念△対象としてのみ自立である。しかしこの△場△自体が、自己幻想の共同性として成り立つ△表現△でこのことである、具体的な身体行動や、集団問題とは無関係の関係であり、自然過程としては、吉本が鋭く指適している様に「共同疎外態としての自己幻想」の流通△場△として以下の規定として成立する。

「共同的な幻想である国家は、いうまでもなく国家内部のあらゆる成員の自己幻想の総和としての共同性として存在すべきは、自然である。しかし人間は自然との単純関係においても、社会構成の複雑な生活関係のなかでも、自己を疎外態とすることによってしか自己幻想を生み出すこともできなければ、自然を加工することもできない。それゆえ個々の成員の自己幻想の総和としての共同性(国家本質)は幻想性一般としても、社会的(経済的)諸関係の人間の総和としても共同的疎外としてしかあらわれることはできない。このゆえにこの本質に附着して階級支配と被支配が国家に於いて分化すること

が規定されるのである。」(「情況とは何か」)

これが△逆立▽論の本質であり、国家本質と、現実関係との間に介在する自己疎外の構造である。知的な政治集団の共同性は△表現▽の現存性(縦深い幻想の構造)としては不可避性であるが、△表現▽の流通性(対他性)としては意志性である。前者は対自構造の△表現▽の不可避な転化過程であり、価値は△表出▽にかかわるが、後者は対他構造の意志的な△表現▽の引き寄せの構造であり、価値は△像▽交換にかかわる。

④像・運動の転換・引き寄せの△場▽—△政治表現▽と価値構成(場)△関係の構造△はいいかえれば、社会構成の複雑な生活関係は、人間と自然の相互規定の累層と幻想性一般の歴史的な現存性の累層の介在がなければ明らかにすることも引き寄せることも出きないが、△関係の構造△の場としては、多義的であり、多重的であり累層的であり、幻想の歴史と自然関係との歴史的な連環が明らかにされなければならぬ。△心身行動に於ける△価値的行動の基底は△場▽の多義性との△行動▽の対応性—対他性の構造の裡にあることは明らかにされているのだがこのことはどういうことを示しているのか。例えば十号に於ける△行動の類型△は△場▽を排除した後の△行動▽の抽象なのであって△場▽の概念—根源的価値の△場▽が介在しているのではない。あくまでも△表現価値▽についての、いいかえれば社会的幻想の表出の対自構造(縦深い幻想の構造)についての叙述である。もっとも△価値的行動▽というのは△場▽の撰択がもっとも多義的であるということの場合を心的な幻想の表出を促す契機として認めることにある。この場合多義的というのは

質として△有意味の▽であるという外はない存在の仕方として現代はあるということである。この様な△場▽—自然△そのもの、幻想△ものに於ける窮極的な疎外の問題は、具体的ではあるが、非現実性としての行動や行為の(言語、性、労働)意味を徹底的に対象化する作業(意志的な)を不可避とする。(以下続稿)

(注)「情勢論と補足的な内容提起(レジюме)」は(A)が四月BUND大会への組織局員の同志によって提出。(B)は、五月段階での組織委員会でのレジюме。(C)は七月B大会提出予定でコピーが間にあわず口述されたもののレジюмеである。政治運動が自体として完結する一般理論や、谷川雁風の△難解△な喩や、シンコペーションのファッションにおいてではなく、圧倒的な△はなし△ことば△として日常のフランクやオルグ活動が社会の現実と激突するところで生成し、かつ消えていくという形で△ことば△を持っていくことは自明である。そして台所メモ風に書き記されたレジюмеとしてのみ残存しているものの中から時の個々の構成員が抱えていた問題意識を再構成することとは困難であるが、我々の政治経験と表現の連続性を、清算しかつ偽造しようとしている三上の言動に対しては、ささやかな反撃であることは確かである。昨秋の米審判争・フード闘争以降、我々の中心的な問題意識はインフレーションとのたたかひの頓座の歴史的、現実的根拠の解明と我々の政治実践自体の对象的扱いに集中したことは自明であり、このレジюмеもその線に沿っている。各フラクや拠点、被告団等においても、個々の構成員が抱える家族や社会関係のしがらみの中から自らの政治的帯域での実践根拠の模索を必死に強いられており、我々の生活水準が日本の大衆の生活水準(経済的—

どういうことか。例えば経済関係と経済関係の構造の△場▽を想定しよう。この場合对象的な関係の構造の△場▽は△自然▽そのものとも、△有機的自然▽そのものとも、△幻想の共同性▽そのものとも理解され得る、いいかえればこの関係の構造に於ける人間の行動は自然的(生物的機構としての)行動とも、人間の行動とも、幻想的行動とも成立しうる。なぜならば、生産関係と生産関係の構造は歴史的には幻想の現存性と、人間と自然の相互規定の歴史的累層の準位(水準と位相)によって規定されるからである。

この場合、徹底的に重要な問題は、この「関係の構造」を引き寄せる場合の人間の存在本質との対応性の問題である。いいかえれば観念としての距離の問題である。価値的行動とは、対象世界を引き寄せる場が自然ならば人間の行動も自然的であり、対象世界を引き寄せる△場▽が△幻想的自然▽であれば人間の行動も幻想的であるという引き寄せの構造についての認識であるといえる。そしてこの位相の裡に人間と自然の関係の変容、対象的自然の変容、人間と人間の観念の關係の変容、对象的な幻想の共同性(幻想的な一般性)の変容の課題が△世界性▽の、いいかえれば△場▽の問題として浮上していることへの言及である。△世界▽は幻想性としても、自然性としてもはるかにその変容を戦後史の現実としてもたらしている。疎外論の本質からみれば、人間の行動の価値性に於いては、人間の行動とは、何の現実性もたらさないという窮極性としてあり、たゞ具体的な行動のみが人間の本質の△意味▽を人間性の本質として主張するという時代への突入としてある。つまり、人間の行動は、現実関係ではどの様な△価値▽をも収奪されているが、人間性の本

社会的)からみれば貧民層のそれであったとしても、そこで問われる日常の集団関係への原則は切実に階級判断(社会のヴィジジョン)をトータルに不することを不可避としている事は自明であった。そして我々はこのような瑣末なことに対して思想的に回答するといふ共通認識を気風としており、このことが我々のほとんど唯一の感性的成熟の場であったといってもよい。だから我々は組織離脱者や獄中敗北者や、我が組織外の運動者や表現者に対して、イデオロギーや理論的異差とは別の、社会ヴィジョンと集団関係への扱い方で評価軸をたててきたし、階級判断と現存的思想の美食家の集団として自負してきた心算である。このことはしつこく追求されてもしすぎることはないのだから「集団論や日常構成論はただ形をかえた前衛論」(三上—総括と展望)ということは、自らの日常構成を特権性へ安んずかせたい願望のあまり階級判断や社会ヴィジョンを欠落させたデマゴギーにすぎないことはいまでもない。

このレジюмеが追究している問題は、我々の運動の中で激突している△社会の諸現実▽の对象的扱いについての整理を試みるということであって、我々のいう「情勢論」—「集団論」統括への一助にすぎない。

同盟内論争があたかも三上への個人攻撃や人格評価としてなされてきたと流布し、「叛旗は連合赤軍への道行き」だと偽造し吹聴している三上や、組織外の同調者に要求する。君達はどうのような日常を送り、その自己の階級的、社会的ヴィジョンを有しているのか? 「回答せよ」と。

かくめいへの越境

共産主義者同盟政治論文集 / 700円

想像力・創造力が衰退し、空想と願望に転落する時、実践と問題意識は文献引用と先験に一般的危機の強調に墮落する。冷徹なる歴史的現実を直視し、日本革命運動における負の伝統「啓蒙主義—大衆主義」の閉塞的円環と訣別し、観念—生活諸力を（かくめい）へ至らせんとする営為は、即党派—分派闘争への火蓋であった苦汁な闘争のうちに獲得した綱領的視座・階級形成論、三里塚・砂川沖縄闘争のうちに生起した（かくめい）への問題提起、党派—分派闘争の理論的諸問題

(2) 四月同盟大会 三上提案

(A) 八若干の経験的総括と内的停滞について

「叛旗」紙新年号と八五号で提出された論文（政治局論文—大道無門）において、我々は自らの内在する諸危機について一定程度開削した。そこで我々を被っている諸問題についての抽出は大きく二つの方向で出されている。その一つは七〇年前後の闘いの敗北とその諸結果としての後退期のもたらすものであり、また自然的な年令に規定された諸条件である。我々はこれらに世界的に危機

換え、労働者運動へ等々幾つかのことが想定されるかも知れない。だがこういった諸動向が、対他的な政治集団や行為の巾において現象しており我々が感性的にも、理念的にもそうしたことと吸引されるものを感じないとすれば、それらが我々の危機を突破するものとなりえないことはあきらかである。

斗争課題や斗争の組み方、又日常活動の諸形態のうちに新たな政治的像を結晶しうるということを考えない方がよい。斗争課題や斗争の組み方、又日常活動の諸形態の新たな創出の裡にこそ新たな政治的像や転換が可能であるということは、真実であるがそれらの条件は特定の集団や個を越えた歴史的な諸条件の側からやってくる。少なくともそういった契機なしには成立し得ないし、そういった諸条件のないところでは、必然的に夢想となる他ないからである。とすれば、我々が感じている危機は、諸現象や諸事象として生起する斗争課題や日常的な諸活動が持続する内在的な要因にあるだろう。それは、必然的に現在の諸実践が全く意味のない徒勞に似た事柄として現われてくることであり、それ故にそういったものに対して心的に無関心になっていくこととしてある。

②危機の他の一つの諸現象は、我々が無限に個別化し自然的な時間間の推移や経過、経緯に身をまかせるように、諸闘争や日常的な諸活動を累積させているということである。

例えば、日常的な諸活動が様々な部局や地区、又職域や階層的な領域において、アトランダムに展開されており、それらがどういふ連関と脈絡をもっているか、ほとんど想定できないし、想定不可能な様に現われてくることである。又いくつかの諸闘争がそれぞれ時

をもたらしているインフレ動向をつけ加えるべきかもしれない。もう一つのは、我々の経験の内化や構想力が情況に拮抗する政治力をどの水準まで生み出し得ているかの問題である。もとより、我々はこうした抽出を自らの闘う対象の捕捉のためにしたのであって、客観的な認識によって我々が安堵をうるためではないことはいうまでもない。この二つの抽出が我々の危機の諸因を抽出しているのであるが、まずその結果しているものを明らに出してみよう。

我々が危機と感じている諸現象や諸事象は一体何であろうか。

①疑いもなくその一つは政治的な像が結びえないということであり、それによって我々の政治的な共通の立場がたえず揺ぶりつけられていることである。七〇年以降の諸過程に限ってみても沖縄闘争や砂川闘争また三里塚闘争、そして一定の形で持続する社会的諸闘争（諸学園斗争や労働争議）はきわめて貧弱であるとしても我々に一定の政治的像（共通の立場）をもたらすものであった。そしてまた日常的な組織活動、政治的諸機関の創出と持続はまたそういった内容をもたらすものであった。たとえ我々はその現実的な水準をどのように了解しようともである。

だが今やはっきりしていることは、こうした諸斗争や日常的な諸活動を政治的な共通の立場としてそのまま主張できないところになっている。たしかに、我々は何らかの新たな闘争課題の提起や日常的な諸活動の組み換えや強化によってこのような危機を突破しうる手段を有していない。こうした構想の限界を課題によって解決せんとする方法—例えば部落問題や天皇訪米阻止斗争の提起、政治行動の転換（非合法的な軍事行動—テロリズム）や議会路線、組織の組み

間の経緯によって生起し、かつ消えていくように現象していることである。かつて三里塚闘争が軸であり、ある時には、砂川闘争がそうであり、又別のときには、反インフレ闘争がそうであるというように立ち表われながら、同時に消えていくというように現われているのである。そしてそういった時間の経緯の中で生起し解消されていくという矛盾に異和を感じることに對しては、かつてその闘いを中心的に荷った部分が一定程度執着して持続するという形態になっているにすぎないのである。これらは様々の空間的な距離、時間的な距離のもたらす条件、言い換ればそういった自然的な諸条件にあたかも水が流れるように身をまかせているということである。確かにこういった要因を根底的に生み出しているのは、人間の類的な存在の膨化が社会的な有機構成の多様化を徹底的に進め、我々もはやそういったもののアトム的な一現象でしかないという無力感を強烈に生み出していることにある。又、膨大な時間的累積がそれらにある連続性として把握することを不可能にするような圧力となっており、瞬間的な時間しか考えることができないというように人間を追い込んでいくことにある。もともと社会の有機的構成や文化や幻想の累積のアトランダムな構造について、日本の知識人も大衆も深く悩まされてきたし、そういった諸条件は、種々の、バリエーションをもつ二重構造論を生み出してきたものではあるが、かつては一定程度有効でありえた二重構造論も、もはや有効ではないということころまで事態は進んでいるのである。

③我々のこうした政治的な在り方自身の中にある危機の様式と同時、我々の運動基盤や構成員の年令的諸条件が一方で生活問題を

不可避に浮上させ、そのことが一つの困難を強いている。政治的な運動をどのように価値づけ根拠づけようと、そこで費やされる労働や時間は生活と生活の生産の為に要する時間と一定程度衝突するとは不可避であり、この矛盾がかなり強烈になってきているのである。この諸要因は、高度成長の結果が生活の生産の為に費やす時間を一定程度減少させることを可能とする諸条件の上に開花した政治的労働や時間の可能が、インフレ局面によって支配階級が社会かによって逆に回収され始めていることである。又、日本における政治運動がダンナ芸的な生活的諸条件から解放されている部分によって荷われ続けたという歴史の伝統とユガミの上に我々はあり、その矛盾がやってきているということである。又、政治的な活動を荷う部分の生活の生産の為に時間の喪失という矛盾を、学生層に依拠することによって解決してきた矛盾が、構成員の年令的条件を介して浮上しているのである。もとより、こういった諸矛盾は政治運動だけでなく(新左翼的なそればかりでなくてブルジョア政治も含めて)労働組合運動にも一定程度立ち表われつつあることだからだ。労働組合運動では、官僚的な制度(その裏側では大衆の無関心に支えられているのだが)に支えられていることに依って矛盾が一定程度いんべいされているに過ぎないのである。

以上の諸現象はもっと包括的に、かつ微細に抽出することが可能であり、そういったことをなすことは重要なのであるが、ここではそういった指摘にとどめておこう。

さて、こういった諸現象や諸事象をして、我々に増々困難ならしめているものは何か?。我々はそれを次の様に抽出することが可能

これはいつてみれば包括的な思想的統一を要求するものであるが、そういった逸脱は不可避というほかない時代に我々は生きているのである。もうひとつの問題は、特定の時代や場所として立ちあらわれる言語的な世界と、人類史が累積してきた膨大な言語的世界との関係をどう扱うかという問題である。どのような領域でも、労働過程や性過程においてもそういった諸事情はあるのだが、言語過程においてこれはどういった問題なのであろうか。ここでいう言語過程は、観念過程に対する包括的なものを指している。この言語的な世界は、構造的に言えば、自己幻想と対幻想と共同幻想の世界であり、それぞれは文学や政治やというようにある個有な帯域を構成する。その中で、我々がこれらを包括的に扱うことがある思想的立場や見解として現われるのである。そういったことをある政治的な共通の立場として要求することは、先験的な政治理念からの逸脱であるかも知れない。けれども、このような構造と構造を介して逆に政治的な位相についての了解を獲得することは、やはり不可避というほかないのである。だが、これらは、まだ一定の前提なのであって、このような了解を介しながら言語的な世界の領域における共同幻想的領域こそ我々の主要な問題である。一定の時代や場所と、人類史が累積し累積しつつある共同幻想的領域の問題なのだ。我々は、これについて次のように考えなければならぬ。

共同幻想として立ちあらわれる言語的世界は、必ず特定の時代や場所を介してあらわれるほかない。しかし他方においてそれらは、人類史が累積しかつ累積しつつあるものからの影響やそれから接続されることを免がれることができない。このような諸条件は、時間

である。(中略)

④我々は、広範な意味で、時間をそれぞれの条件において分括するほかないということと、それらを総括せねばならないという基本的な構造の中で生きねばならないのである。またそれぞれの位相において、特定の時代や場所の抽出する問題と、人類史の累積した諸過程の問題を統括を経ねばならない。我々が性過程や労働過程や言語の過程を分括し、かつ統括するという関係は、生活と政治、国家と大衆、知識人と大衆というチームでいろいろ論じられてきたことであるが、これらを総体としての価値構成とその過程的实践の関連として押えなければならぬ。人間の生産と再生産にとって、より自然で、必然なのは序列的に言えば、性的過程—労働過程—言語過程という構成を為し、それに対応した関係をとることを不可避とする。だから、言語的な過程は、労働過程や性過程に比して自然過程であるといったとしても、より意志的な介入を不可避とするほかないのである。我々が今将に要求されているのは、それぞれの過程を個別的な差は、あるとしても、生きることを強いられており、それぞれの自然過程的な求引構造とその中の言語過程の位置についてのしっかりとした了解である。言語過程に対する一定の了解なしには政治的な共通の条件は、形成されないものであるが、性的な過程や労働過程に対する了解を逆説的であれ成立させなければ、また政治的な共通性が想定されないのである。この構造と構造を介しての言語的な過程の了解について我々は、一定の立場を獲得しなければならぬのである。言語過程は、言語過程の位相として成立すればそれでよいという先験的な理念からみれば、一種の逸脱であれ、

の累積度による共同幻想の序列とそれぞれの場所の生み出す共同幻想の序列によって秩序へ(権力へ)転化しうることになっている。吉本降明が、場所性と時間性に対する指向変容概念を想定したのは特定の時間や場所を介して生みだされ、かつ、そのように現象する共同観念と、歴史的に累積され累積されつつある共同観念の相互関係を指しているのである。

我々が共同幻想における土俗と突端の構造という観念で表わしてきたのは、この構造に於てである。共同幻想の内部構造が土俗と先端の間にさまざまな段階と様式を持っており、この錯綜した構造はどこの世界に於ても存在するのであるが、日本のそれはその錯綜のすさまじさに於て、最も激しいものである。いわゆる二重構造論、東洋と西洋、近代化と反近代化、様々のチームで論じられてきた。この問題は、そういった方法では無効なほど激化している。それ故にわれわれが歴史的な対象を把える事自体を肯とする時、錯乱状況に追いつめられるのだ。この困難性の故に対象の把握に対する無力感や、不可能ではないかという、心性におそわれるのである。方法的に言えば、国家の運動の内部で、国家と矛盾するような突端的要素(枠としては、国家の中に依然としてあるのだが、ある面に於ては国家を越える要素)を引き寄せることも、又国家にほうせつされないで持続する原初の共同性を繰り込む事、こうした事情によってたえず困難に晒されているのだ。基本的な方法から言えば、共同幻想の外部にあるものと共同幻想の歴史的水準を明確にすることが問われているのだが、そういった事柄を共同幻想の内部に於て展開する事がこうしたことに錯乱させられるのだ。労働過程や性過程と言

語過程の關係の構造について、我々は次のように考えなければならぬ。すなわち、言語過程の構造は構造的にみれば、性過程や労働過程がそれ自身の内部で解決しえず共同幻想へ疎外することによって解決してきたもの（それ故に、たえず現存的に又産み出されるのであるが）と、言語過程自身が歴史的に累積されてきたものとの交点との構造として、それ故に法意識や社会意識として現われる。もちろん法意識自体が宗教的な共同の幻想と社会的な規範や幻想と、家族的な規範や幻想をはらみ、そのような構造をはらんだ歴史として現われるのであるが、思想的構成や具体的な人間の時間構成はそれ故に絶えず言語過程を相対化し、そこでの人格を抽象的人格とする。

我々はいった総体の存在が、言語過程や言語過程にまつわる抽象的人格を相対化しながら、それ自体の時間構成を為さねばならないのである。だからこういった相対化の世界に時間を集中しなければならぬことと、その総体的時間の獲得に膨大な努力をいやさざるを得ないという困難があるのだ。

⑤④で展開した事柄が了解に達する為にぼう大な困難を要することと共に、共同幻想（言語的世界）の内部的な展開やあらわれがきわめて個別的な展開を取り、そうした蓄積、言いかえれば専門的、職業的方法を不可避とすることが要されるのだ。市民社会内の職業は経済的な根拠（生活の生産）を持つがゆえに強力な持続力を持つが言語的世界は、そうした根拠を有しないが故にきわめて困難なのだ。（ここで使っている言語的世界は文学、あるいは狭義のそれではなく幻想という概念で使っている。それゆえに表現における身体的

法が無効ではないかという予感を感じざるをえない。レーニンや毛沢東の理論や体系に結晶した方法の無効性である。

民主主義的な国家理念と社会主義的なそれへ、市民的規範や価値意識を労働者のなそれへ、……こういった階級利害を既存の国家機関の暴力的打倒と執行機関の入れかえによって実現せんとするやり方である。

もう一つの条件は、70年段階の諸斗争が権力斗争として、又、権力の形成として敗北したことである。我々にとっては困難な条件はいろいろ摘出しうるが、突破の糸口が見出せぬことである。我々は、これを前提にしなければならぬ。そこで我々が今あきらかにしうるのは、ただ次の点のみだ。

天皇制と戦後憲法に象徴される政治理念と体系は、いずれにせよ、止揚され、死滅されねばならない対象であり、現在の権力斗争の対象物であるということだ。それらにとつてかわるものをあきらかにすることができないが、それらを徹底的に批判し、その有する幻想力とそれに支えられてる権力を打倒の対象とすることだけである。そして、この実践的斗争手段として、社会路線も暴力革命路線も有効ではないということである。

権力対象と権力斗争の手段について、こういった原則しかあきらかにできないとすれば、我々は、何を武器に、どのような実践的手段で闘いをくむか。武器は、二つである。天皇制と戦後憲法の双方と衝突し、かつ、それらに包摂されない生活の生産過程からふき出す階級矛盾と知的生産から流出する階級矛盾が武器の全てである。いかえれば、そういったエネルギーと運動である。権力斗争として

行為を当然にも含むものと考えている。）

(B) 我々は何と闘っているか

——いわゆる階級形成論と権力斗争——

すでにこれまでの展開であきらかなように、我々が何と闘い、何にむかっているのかという原初的な問い自体が、極めて困難な条件に彩られている。前述のことからであるが、この理由は次の点にある。

我々の闘いの対象が鮮明となる為には、どこか歴史的な条件が欠落している。これは、二重の意味に於てそうだ。資本や国家に象徴される歴史的な支配力の運動の内部から形成される矛盾が一つの体制自身と激突する水準に未だいたっていないことである。確かにこういった条件が前期的に形成されているのではあるが、もう一つの理由は、体制を止揚する大衆の闘いの表出が同じように前期的な段階にとどまっていることである。これは、自立思想と自立的斗争の水準といつてよいが、ここ数年間にわたって主張してきた我々の原則は、社会的階級の形成、又世界的階級へ、等々いくつかの言語的変遷はあったが、つきつめれば次のように要約できる。

長いバースペクティブに於ては、国家を死滅せしめるという事であり、過渡的な諸段階としては、権力斗争と権力の形成をなすという事であった。

権力斗争と権力形成という、いわばこれまで政治的な概念の収斂するものと同じであるが、この問題は次のような意味で極めて困難である。即ち、これまでの歴史的経験と蓄積の上になされてきた方

それらが現出する時、我々のとるべき手段は、言語表現と身体表現である。これを路線へ典型化することはできない。今、こういったレベルに於て最も革命的なのは、天皇制や戦後憲法という戦後の政治体系を打倒の対象にすることであり、その実践的手段については、原則だけを確認することである。日共や革共同等々とかわらなことの批判は、的はずれである。戦後憲法や天皇制という概念を我々は支配的イデオロギーとして流通しているものよりも、もっと広く拡張して想定しているからだ。例えば、毛沢東思想に象徴される左翼農本思想も、その目的形態に於ては、天皇制という概念に包摂しているからである。又、我々の表現の実践性は、次のように例えることができる。路線や理念（体系）をつくり、その下に人々を招き入れようとしたり、そうした啓蒙運動は、現在は反動的革命的であるが、歴史的に支配様式に対して批判と止揚をそれらの絶えざる否定的運動としてなすことは革命的である。こうした実践過程を通して我々が手に入れるのは、決して権力にも戦後の政治理念にも吸収されず漂う矛盾を経験的に手に入れ累積していくことである。現実の歴史過程が生み出す諸矛盾を、経験的に累積していくことが自立思想や自立的斗争であり、それらを体系的な政治権力、政治理念（現段階では主張できないだけである。繰り返すようであるが、権力斗争、権力形成が理念的体系や路線（議会路線及び革命戦争路線）として考えられぬし、かつ想定されないという政治判断が重要なのである（少くとも現下では）。

70年以降沖—三—砂という形で一定程度路線ないし戦略を立ててきた。唯、こういった場合もこれが権力斗争や権力形成に向かつて

く構想された戦略なのか、闘いの課題を向かう側から規定されるという意味での戦略か不明であった。ここでいわゆる環の理論との関連でいわゆる権力闘争や権力形成について若干触れてみよう。

周知のように環と呼ばれる特定の領域を時代の強要によってもたらされるか、主体の構想から想定されるかともあれ必至であることはよく知られている。歴史的な支配力の運動が算定の個体や集団の向こう側からやってくる以上、こういった環は歴史的条件としてあるよりほかにないものであり、主体の構想はそれに対する判断という枠を持つている。今日の段階において、この環の想定は極めてむずかしい。その理由は戦後憲法や、天皇制自体が収約力や幻想的統括力を低下させていることにある。また国家がきわめて中核的なものを握りしめながら、他方で国家的諸要素を大衆の日常過程へ下ろしていることにある。権力斗争や権力形成の環を我々が考える時、この権力の中核的なものに対応させて想定すること、日常に下っていく諸要素と対応させることとの関係がきわめてむずかしいのである。核に向かつて対応を収斂させていくとき、我々は戦後憲法の問題にせよ天皇制の問題にせよきわめて抽象的になるか、特定の問題に過剰な意味を与えてそうするかはなくなっている。かつての革命戦争派は、この環を帝国主義軍隊に求めていたり、中核派が革マル派に求めていたりすることはこういった傾向をさしている。もちろん差別問題もそうしたあらわれである。ここで我々は、次のような対応を迫られているのではないだろうか。

その一つは環という概念を、きわめて広く抽象度の高い問題として想定することである。例えば天皇制や戦後憲法の止場や死滅として天皇訪米問題とをこうした水準で対応せねばならないのだ。このような諸斗争を特定の時期や場所の生じた自然的なものとして放置し、そういった解決にゆだねるのではなくきわめて抽象的にも具体的に意志的に決着しそれを経験的累積へ転化していくことが重要である。

(C) 闘いの諸過程をめぐって

1. 政治的行為の逸脱する諸条件

政治的な行為について身体表現と言語表現という超原則を語った。つけ加えれば政治的行為は観念的行為だということである。その意味では政治的行為と文学的行為と思想的行為の境界があいまいになつていく条件をもっているのだ。

確かに政治行為と思想行為や文学行為との境界は、扱う対象の差(共同幻想と自己幻想)、行為過程に於ける集団性の介在等によって一定程度明確である。けれどもこういった境界が絶えず不鮮明になつてしまう理由は新たな政治理念の体系が形成されないという矛盾を思想的体系で補おうとする飢えに似た欲求をもたすからである。例えば人間の存在様式や価値論又、政治の占める構造や領域についての認識は政治思想と言うよりは、思想一般と呼ぶ他ない。思想は、当然にも政治思想より広くて深い。けれども我々は思想的な立場から政治的な位置や領域を考察し了解すること、こうした思想によつて政治的体系や理念を代替してしまふことをさけねばならない。政治的な体系や理念(高度に結晶したものから極めて感情的な判断まで)は政治理念や体系として定立される他はないのであつ

てそれをきわめて抽象の高いレベルで想定することである。ここではより高度な抽象力もしくは普遍力が要求され、一般的な旧来の路線という枠を越えて一定程度思想的になる逸脱も含めたものが要求されるのだ。かつて吉本隆明が今、思想潮流から政治潮流を生みだすはかないという判断を下したならこうした情況の認識があつたはずである。対象的にやってくる歴史的諸条件(例えば天皇制や戦後憲法)に対するこうした対応が要求されるのだ。もう一つの対応を迫られる問題は、権力の国家的要素を不断に、日常化し、日常過程へ下降してくる要素に対してその水準で反撃することである。例えば、戦後憲法的主要要素や天皇制的要素を日常(つまり個別的な現象を下ろしてくることをその)レベルで反撃し闘いを形成することである。例えば日共が議会とドブ板政治と呼ばれる路線をとっているのはそうした対応である。我々は、アプリアリに想定された民主主義や社会主義に啓蒙するという意味においてはは、路線とは先験的に想定されたものへの啓蒙でなく、歴史的な条件との間で形成される矛盾を対象化と時間として獲得していくことと考えなければならぬ。それから一定程度想定される環(天皇制(戦後憲法))に対する闘いをきわめて抽象的なレベルで反撃すること、他方きわめて日常的に反撃する方法をとるべきである。中期路線というものをも想定するとき、まず路線という概念を一定程度変えなければならぬのであるが普遍的な判断としての力と具体的に形成される矛盾への解決力として考えなければならぬのだ。

砂川斗争、三里塚斗争、沖繩斗争、大学斗争、労働運動、学生運動、裁判等々累積してきたものもこうした方法への展開と、部落と

て、こうしたプロセスが現段階でそういう過程にあるのかを明らかにすることが重要なのだ。政治の本質を共同幻想ととらえることは、ここでいう思想である。政治体系や理念は共同幻想の批判や止揚を具体的にさし示す判断であつてこのことはよくわきまなければならぬ。我々の欠点は政治的判断に思想で答え、思想の問題に政治的に答えるやり方だ。政治的行為が必然のように、政治とは何かという問いをはさまざるを得ないことによつて、いいかえれば政治的な世界を先見的に定立することは矛盾する問いを発することによつて思想的な欲求が強烈に出てくることは、政治的行為を逸脱させる条件として必至であるが、だからと言って思想によつて政治を代行させてはならないのだ。

2. 政治的行為の多重性と多義性

政治的行為がきわめて多重性と多義性を要求される事態は、ますます拡大していくように思われる。社会的有機構成の徹底した多様化と分化に対応した支配権力がある面において、国家を日常過程へ下ろしていくことに規定されるからである。また膨大な時間の累積がやってくる。いいかえれば、文化や技術の迫ってくる時間のスピードと多様性が拡大するからである。すでに前述した様に我々は、そりであるが故にこれらを包摂した内容が問われる。つまりトータルなヴィジョンを迫られる。こうしたヴィジョンは、きわめて抽象的になるほかないのであるが、観念的な作用や行為としてはラジカルになるほかないのだ。日本の歴史的な風土の中では、もともとこうした抽象的な作用や努力が欠落してきたが故にこうした自然史の展

開に対応するために福本イズムや日本ロマン派のような傾向が出てくることは不可避であった。そうしてこの対極にすべてを日常性に解消する立場が出てくるのも不可避であった。我々は、こういった歴史的な諸傾向を包括的に止揚する立場からより抽象的に対応することをせねばならない。かつて福本イズムが対立し立ちあられたスタイルでなく、トータルなヴィジョンをある包括的な環として抽出することをなさねばならないのだ。政治行為の多重的で多義的となつていく、つまり環なき常態になつていくことに對して具体的なものを具体的に解答する形で、対応力、表現力を獲得せねばならない。具体的、日常的な行為、また個別的な現象はきわめて部分的な空虚なものに思われがちであるがこれは決してそういったものではなく、波乱に満ちた、また豊かな世界であつてそこはある意味で世界が集中しているのだ。我々は個別的なものの独自性や自立性を考へるといふ意味で社会斗争という概念を編みだしてきたのであるが、実践というものがもつ位相は(理念的にせよ行動的にせよ)こうした個別的な意味での限定と実践性を要求される。日常的な諸活動から個々の課題や斗争をこういつた意味で了解し政治行為の多重性と多義性は、拡大することはあつても減少することはないというように了解し、こういった過程が生みだす諸経験を普遍性へ投げ返す様にトータルヴィジョンを引き寄せることを指向変容の実践としてなすことが重要である。あるトータルなヴィジョンという意味では天皇制や戦後憲法と戦後の価値といったものの対立、矛盾として押へることを普遍的な政治的立場や真理へ転化する検証過程もこめたことを展開していくことと、こういった条件を学生Mや労働者Mあ

共同幻想に基づく組織体であり、経済的な利害に基づくものと異なつてゐる。我々がこの問題について検討してきた時、いつも壁になつてきたと感じてきたのは共同幻想に基づく組織体が何故に身体行為や物的な行為とならざるをえないかということである。確かに、あらゆるものが身体を介した労働という概念と、そのあらわれである物的表現を介在させざるをえないというように解することもできた。ただ我々はもう少し別の角度で想定してみよう。

共同幻想の間に時間的累積度を介しての対立、また社会の有機的構成の多様性に対応した集団の矛盾と対立の現実の中に政治の根柢があり、これはまた、対立を介した関係なしに止揚することができない。こういった歴史的な必然性にこそ依然として政治的組織体が必要であり、不可避であるということを想定すべきであらう。これは人々が何らかの市民的存在であるかぎり、職業人であり個人と個人と格闘を不可避とするように。我々はこういった歴史的な諸条件の恐ろしさについて、より深く自覚的であるべきだ。政治的な組織体がある面において歴史的な遺制となりつつあるということと別個に、政治が依然として不可避であるという歴史的条件にあるのだ。政治は政治家がいるからあるのではない。政治を必要とする歴史的条件があるから存在するのである。確かに政治の歴史的必要性と不可避性と、我々の結晶させている政治組織体はイコールではない、むしろその限りでは主観的なものである。唯、我々が考えなければならぬのは、経済活動が歴史的な価値法則に規定され経済的な人格がそういった人格としてあらわれるように、政治活動も歴史的な必然性に規定され、その法則に規定される。政治過程で我々はまさ

るいは日常的な諸活動、インフレや部落問題等々の具体的な現象への回答としてせねばよいのである。学生M自身の到達点と今後の展望、労働Mのそれ、政治的な日常活動(地区活動から機関の諸活動)、またこれまで我々が展開してきた諸課題(砂川から三里塚から裁判問題等々)の内容がこうした大会においても展開、提出されないとすることは多重性や多義性に対する対応を失なつてゐること象徴している。労働M一つとつてみても、膨大な領域と対応をもつておりある抽象力から一刃裁断的に判断を下すことと別個に具体的に(個別理論的に、個別的な関係や闘争環)を下すことを要求されており、そういったところでの我々の力の不足や基盤の脆弱さをよく総括しなればならない。おそらくこういった事柄に我々の思考が対応しえないのは、トータルなヴィジョンを抽象力としてまず要求されるというあせりとともに、個別的なものがきわめて部分的で空虚に見えるという学生の思考に深く規定されている。

(D) 組織問題に関する幾つかの提言

1. 政治的組織体の持続と諸活動

政治的な組織体がそのまま権力機関や権力的実体へ成長するといふことを一般的に想定することはできない。我々は政治的な表現にとつてそれが不可避なものであるといふことを想定すればよい。政治的な組織体はレーニンのいえば、宣伝、煽動の媒体である。政治的組織は、組織一般と想定することはできないし、また組織と呼ばれる集団一般と同じように考えることはできない。何故なら家族や社会的な集団と異なつてゐるからである。それは一般的にいえば

に政治的人格としてあらわれるほかないし、したがつてこうした客観性に耐えなければ政治性にならないのである。経済活動を規定するのは、ある面においては生活の生産であるが、ある面においては資本の存在と価値法則である。政治活動の規定もまた、こういった事情をつまみ生活の生産と歴史的な共同幻想に規定される。資本や価値法則が経済過程を規定する力をもつのは、そういった生産様式が依然として大衆の生活の生産にとつてもつとも強力な力を持つからである。経済法則や価値法則が抑圧や階級支配を支えられているといふことをいくら啓蒙しても、それが力を持つてしまふのはそこに因つてゐる。こういったものを打倒し粉砕するのは、こういった法則が生活の生産にとつて矛盾であるといふことを具体的闘いとして為すことしか不可能である。このことはそういった認識と、具体的な経済活動として展開されるほかないのである。同じように政治活動もまたそうといわなければならない。政治過程が、生活の生産と矛盾する過程を暴き、歴史的な政治体制にとつて変る政治体制を生みだしていくほかないのだ。

政治的組織体が共同幻想としてあらわれること、それに対してどのような価値づけを与えようと免がれることはできない。政治的世界を意味と価値の問題から想定するときと別個に、あたかも文学における意味と価値を考えなければならぬ。これはまた、経済的な活動の意味と価値を考えると同じである。政治組織体は政治行為における意味に該当するのかも知れないが、我々は一度こういった歴史的條件について徹底的に考察してみる必要があるのだから。か。絶えず政治的組織体が自己完結し、小国家へ転倒していくこと

と別箇に、それ自身はそういった拘束から決して自由ではないところであり、その法則の内部では内容の問題としてつまり共同幻想のもつ、共同の利害力があり、そこが我々にとって一つの勝負であることを考えなければならぬ。

今日、組織問題に関して我々を追いつめている困難は幾つかある。その一つは政治活動と経済活動や性活動の間で価値構成をめぐってあらわれている。この問題では思想的にせよ具体的な展開のあり方にせよ、政治が相対的であるとすればそのように存在するほかない。だが、政治的人格は一つの歴史的な人格であり、そういったことと具体的な人格との間で矛盾と対立があるとすれば、それは歴史の構造のもつている条件に規定されており現段階では絶対的な矛盾というほかない。だから具体的人格において人がどのようにあるとも許される事柄、歴史的な人格としてはその内部でのみ責任が問われるという原則が立つのだ。歴史的な人格としてあるという決意とその内部を介して人間の諸矛盾を問うていくというあり方は、はつきりとした位相と立場を確定することによって解決していくべきである。例えば、人間の私的な構成に基づくあり方として了解し、信頼しえる人間関係が存在しても政治的人格としては、対立的立場に立つこともありうるだろう。我々は価値構成のあり方をめぐる相互了解と信頼と政治的人格としてのそれがある面において区別し、関連させながら扱わねばならない。政治的人格は、すべての対象を政治対象とみなしてしまふ恐ろしさをもっており、このことに自覚的にならなければ政治的な世界がまた、人格がそういつたところになつてしまふことと政治的な人格をそのレベルで負うていくことをは

ような幹部の下放と下部の登用という技術的な問題でなく、指向変容を介した相互関係が重要なのである。どこにいこうとそこで個別にかつ普遍的に闘いうるということがその前提になるが、そういった思考と絶えざる実践による屈伸力によってのみ組織の硬直化は免がれうるだろう。場所的広さ深さがこういつた構造に対応することが要請されるのだ。組織の重層性とはこういつたことによつてのみ生き生きとした存在となることができるのである。

3. 中央機関活動と全国政治新聞をはじめとする諸活動

かつて我々はいわゆる純党活動を全国政治新聞と軍事部門を軸に想定したことがある。これらも含めてここ数年の経験を対象化し任務を明瞭に位置づけなければならぬ。このことは4.5.及び(D)を含めて具体的に検討されなければならない。中央機関活動と地区政治活動、階層的諸M、軍事問題を七十年以降の諸実践と諸問題の総括を「叛旗」1号から4号前後に提起した諸体系の関連、相互の落差を介しての現水準の確定、このことよつて再び明瞭な立場を全党的に克ち取らう。これらの総括はそれ自身で膨大な内容を持っており、我々は一度そこを具体的な対象にして討議と内容展開をすべきであろう。(一)

(注)

四月B大会は三月B大会における四、二八政治集会中止決定以降、我々の現局面に対する政治判断を、情勢と組織の双方からなすことを主軸に開催された。この三上提案の時点までは、この間の我々の諸闘争の裡から情勢に回答しようとする姿勢がみられる。彼の主要なモチーフはそこになく、『口述筆記』という限定もあり十

つきりさせよう。

組織問題を追いつめているもう一つの問題は、その内部の実践的展開の困難さである。これについては政治行為の多重性や多義性との関連で前述した。言語表現から身体表現にきわめて抽象的な活動からありふれた労働行為に至るまでまた領域や課題に応じた多様性によつて内部了解がきわめて困難なのである。政治的人格の中における諸活動はこのような展開も擬制的な時間や無償的な時間のようにあらわれる。政治的前衛はイヤだイヤだという心的な世界に支えられるということである。いずれにせよこの内部の了解を獲得せねばならないのだ。

2. 政治的組織の重層構造と展開

組織体としてみる限り、組織のあり方は国家の様式や形式と対応している。マルクスがヘーゲル法批判の中で展開した構造、またヘーゲル自身が構造的に抽出した構造を持つている現在の国家の構造は、国家の中核を支配する様式と日常的な組織体を媒体に市民社会内のまた、法制のイデオロギーとしてのみ成立しているにすぎない。家族内の国家的要素と関連する構造をもっている。このレベルで我々もまた、中央機関と地区組織を部分的に有している。これらの構造が序列と系列化として、したがって秩序としてあるあらわれ方と全く別箇に考えるならば、こうした組織的な諸形式を歴史的諸条件に規定される諸形式と押え、その序列化や系列化という関係でなく、それぞれの内的な領域からの自立的展開と指向変容を介して内的関係へ不断に転化することが重要なのである。毛沢東が文革でとつた

分表現できなかった。思想の一般理論を共通の了解—認識として扱ふべき核心を展開出来なかつたので撤回する」として討議される以前に本人が撤回した物である。従つて四月B大会は「叛旗紙87号A情勢論V」と「情勢論と補足的な内容提起の(A)レジューム」が中心に検討され、A恣意的自由V△私的利害V観念が法的民主制の歴史的現存性として構成される位相と、社会構成における集团的疎外として現存的位相の無批判的に混同する扱いが批判された。また日本社会に対する構造的扱いとしてあつた「二重構造論」の根本的誤りが、認識の遠隔対象性として扱われる文化論と、文化に登上しない大衆の生活構成を根拠づける経済論との無雑作な接木にあること。幻想の内部構成において遺構的ではなく、生活圏の内部構成の水準として遺構制の根拠を有すること等が検討され、我々の社会ヴィジョンの変容が、全共斗以降の時代的変容と運動の内在性変容との分離が確認され、それ以降の実践を大いに刺激した。

他方、集団域においては、この間の日常活動で最後にあつかわれしてきた離脱者問題、財政問題、裁判問題等を相互関係の水準を鮮明にする意味で一義的に扱うことが確認され5月以降BUNDのみならずAIFまでふくめて、日常構成位相と表現位相の明瞭な分離を問うことへ突入する契機となつた。

四月B大会においては前記の通り、三上提案は何の指南力を示さなかつた。「三月以降、急速に進められた組織再編に対して私が判断を下さずに……」とは彼が大胆に「SECRET」の純化を打ちだせなかつたのでなく、彼が政治指導の内容を「理論的文章化」という事に至少化していたからであり、そうであるが故に七月B大会で

徹底した日常構成をめぐる論争が公然化せざるを得なかったのである。

二、七月大会をめぐる

(1) 七月大会への三上所見

(1) 時代や社会の危機を政治的な運動や活動の内在的な危機の問題としてはつきりと押え、血路を開く契機に転化せんとしてきた私たちの水準は、どこか今まで通りの経験ではやってゆけないという共通の感情的・感性的危機感の共通の認識にまで深められたか。これらの表現された結果は叛旗10号や叫喊また新聞等々の諸論文として立ち現われていると同時に言語化されない諸活動や諸関係として表われている。これらの過程の中でいちじるしい特徴に気が付く。その一つは政治的な実践や活動概念を範疇自体の整理と共通の了解事項の創出を為したいという立ち現われ方である。このことは人間の存在総体に対する範疇的整理と最底事項の了解から政治的な実践概念にわたるそれまでの内容を持つているが、人間の存在や政治活動に対する一般理論の創出への欲求とその現実的成果として結果している。こういった欲求の不可避性はそういった展開なしに、私たちの現実的な過程が対象化され、共通の立場とそれを介しての関係が生みだされないという危機感の反映であり、このことは長期にわたって継続的な課題になると思われる。もう一つの過程は私たちの具体的な政治実践、また構成的展開を具体的な過程として実践する中

もつていたのにそのように作用させえなかつたのは、自体として対象化していくという方法と努力が欠けていたところにあると思われる。この三つの形の現われ方を相互に連環させながら、ある面自体として検証してゆく過程が重要と思われる。叛旗10号に象徴される範疇的な一般理論的な諸問題を深化しそこで論争と発展を組織してゆくことが、問われているだろう。私自身の正直な感想を言えば長年の叛旗の蓄積過程と水準によってある程度共通の前提として処理してきたことが、对象的に扱われざるをえなくなつたということに、ある種の驚きと危機感を喚び起させるがそれは私たちの負うている現実的条件として考えてよいのではないかと思つている。絶えざる検証と検討なしに共通の媒体は創出されていかないのであるから、こういった事柄に対し徹底的につきつめてゆくということとは重要であり私たちの今までの諸累積も含めてそのような展開を要請されているのである。もちろん具体的な表現(幻想的媒体の創出)や諸関係の編成と展開についても同様のことが言えるのであつて、こういった諸問題の具体的な検討はレーニン流に言えば「欠陥の認識」となるであろう。

(2) 理論誌10号をめぐるいくつかの諸問題とその検討についてはここでは省き、討論の中で展開したい。主に私たちの政治的な実践としての政治的な諸課題の抽出と、その展望を述べてみよう。

時代の水準からも、個の内部に受感される契機からも政治的な実践が具体的過程として大きな変容を迫られているということは主題喪失という概念でしばしば表現してきたのであるが、こういった背

でどのように血路が開かれるかという立ち現われ方である。この場合、二つの軸が存在している。組織の日常的な過程や具体的諸関係自体が旧来の経験的過程を突破しているかということの中に血路を定めていくということ、他方で課題や政治的な幻想構成の中に変容と血路が現われるかという問題である。私自身の自戒を含めてこの間の過程はこれらの三つの要素がからみあつて構造的に独自の位相で検討され解決されていくという道筋があまりうまくなかつたということを感じている。範疇も含めた一般理論の問題はそれ自体が具体的な過程に作用していること(経験的な過程の不断の抽象に裏打ちされている)によつて自体として扱かうことは困難である。逆に具体的な政治表現の構成過程をめぐる諸問題は幻想的媒体の創出にせよ、幻想的媒体が不断に喚起される日常的な諸関係にせよ具体的に検討され解決されていくという過程が要求されており、そこで展開が編集局と書記局に象徴されるような自然発生的分業体制の固定化によつて具体的な過程が自体として扱かれる過程をしゃ断させてきたことの中に否定面が現われてきている。例えば、書記局の編集局への日常活動をめぐる諸批判は編集局自体の内部でも矛盾として受感されていた事柄であり自体として解決を迫られていたことは確かである。これに対して編集局からの書記局に対する批判として政治的な課題として提出された事柄や言語表現へ転化することによつて明確となる内容について検討されていらないのではないかと、いうそれは書記局の内部でも一定程度気付いていたはずである。それ故にそこでの相互的な批判や諸関係は相互の鏡となるべき条件を

後には現在の政治的な表現や表出が内ゲバ・爆弾・部落等々の非行や倒錯として存在していることと無縁ではない。戦後ナショナリズムの上底化や主題喪失という意味で表現してきたし、政治的な表出と表現の極限的な分裂という風にも言い表わしてきた。我々はこのことを次のような形で対象化できるであろう。幻想性としての共通の感性的・概念的な媒体が自然意識の水準を解体させられ、このことによつて一つの内容の構成転換が迫られているということである。当然にもここでは心的媒体を引き寄せたい。その創出に向う内在的な過程に強力な意志の参与が迫られているということである。実際ここでは立ち現われ方は矛盾である。何故なら自然過程としてみる限りある幻想的媒体の累積過程は徹底した膨張の過程であり幻想が幻想を関係づけてゆく過程は拡大している。共同幻想が自己幻想や対幻想と、また社会的な幻想表出と他の共同幻想(時代的地域的)と関係づける契機は拡大している。だが他方で自然過程的な意識の内部で自然的な意識が解体してゆくということは逆にその引き寄せや創出を意志的に為さねばならぬ契機が拡大する。他の一つは共同の幻想が上昇と下降の両面にわたつて自己を拡大し、この過程が共同幻想の内容である幻想的媒体と関係的な編成が徹底的に多重化し、多様化してゆくという立ち現われ方を為しているということである。それ故にこういった事態に対応する過程自体がきわめて困難であるということと幻想上の革命を担う幻想的な表出や表現の連続史がきわめて負的にか現われてこなかつたという両面から、これらを倍化させている。私たちが、政治的な課題や幻想的な媒体の創出を為し展開する原則的な方法は、社会的な幻想表出や個体の幻

想的な表出を繰り込んでくる下降過程と他方で共同幻想と共同幻想の諸関係を(歴史的・地域的)包括的に止揚してゆく過程であるが私たちの歴史的な諸条件の中では極めて困難な諸条件が存在する。

共同幻想がその繰り込む対象としての社会的な幻想表出や個体の自己表出が自立的に取り出されるという意味では、それは極めて孤立しており、他方で共同幻想と共同幻想の関係を突端的に止揚してゆく水準を自体として持てないが故に、どこかでそれを写す鏡を想定せねばならないということである。そして、それ故に、こういった課題は思想の課題としてやってくるのが先験的にまで真理であるという条件をもたらす。(未完)

(2) 政治組織判断と展望獲得へ向けて

— 七月大会への神津提案 —

① 現況を直視すること

(1) 昨夏、昨冬、今春と政治—組織判断をめぐる検討は深化されているが、その基本方向は7/1、7/5 B政治集会を経た現在、今だ明瞭に立てられているとは言い難い。この間に、昨春よりの反インフレ斗争再開、米審斗争、フォード斗争を経て、その以降は我々はいわゆる街頭政治斗争を組んではない。また、B級領域の構想内容を新聞紙面の論文、主張、難産の理論誌9・10号で為し、他方で呐喊の半定期化、膨大な量と拠点の諸パンフは、意図的にたてねば遂一目を通すのが困難な位に発行され、更に企画されている。他方

域に限定し、弛緩させていることである。また、各成員にとっては(全叛系についても言えるが)、情況的に「政治」が大衆的関心の域外へ追いやられ、身体表現が官憲の網の目的支配に圧殺を予定されておき、思想本質からは、先行する諸理論の後追いと、何よりも、それが組織編成自体と矛盾するというジレンマが、政治表現のリアリティ、全体像の獲得を困難にさせているし、また年代的にも時代的にも個や対の観念や日常統括と「政治」連関をキツイ問いとして強いていると思える。

(二) 検討すべき第一義は、政治—組織展望の前の、政治—組織連関をこの間の総括問題を軸に鮮明にさせることである。情勢の側からも、本質把握の側からも、我々の「政治」が可視域で像を結びえぬ現在、当然にも組織にとっては日常活動、構成が最大課題として浮上してくる。この二重性をどう突破するかは視座、点検は重要である。

② 政治判断の規準について

(1) 政治判断において、この間共同幻想としての本質把握、政治実践の幻想的行為把握、構想力水準獲得、表現力を軸とする「政治」評価が、ジグザグながら為されてきた。政治本質把握と組織根拠の背離(共同幻想を止揚する、共同幻想を軸とする組織)は③で触れる。ここでは、我々の現状と政治判断上での検討事項にしばらく触れる。ここは、我々の現状と政治判断上での検討事項にしばらく触れる。(ロ)はつきりしておかねばならぬことのひとつは、意志的政治表現と革命の断絶(不可避的条件が一義、大衆的課題、共同性—共同体拡散状況等)である。このことは、まず政治実践の局所性、密室性

で、構想への集中と伴に、我々の当面の政治実践の指標と、また労働域を含む拠点での斗いも、3/8労働集会、自治体、教組、争議団、また早大、立大、SK、MGと困難ではあれ持続している。

(ロ)さて、それでは現下の難所は本当はどこにあるか。私には、政治判断—組織判断をトータルに打ち出す視座、評価規準、相互関係、日常活動の帯域こそ問題だと思える。政治—組織判断を不可分なものとして、現状把握と展望を引き寄せることが急務であり、この所の我が組織にとっての基本骨格をめぐる見解については、各員の積極的表現は意志的ではなく、強いられたい発語としても提示されねばならぬ。まったく当り前のことであるが、政治表現—組織活動はトータルにかつ細心さを持つて、同盟各員が引き寄せねばならぬ。現況における政治、組織判断をめぐる見解が、情勢評価において、日常活動の相互性において、政治運動への基本姿勢や価値基準の評価をめぐって、言え、発語され、論争されつつあることは、全くブラスの兆候として受けとめ、納得の行くところまで、文書、日常活動を介して押し進め、立体的な政治—組織判断へ構成せねばならぬ。

(イ) 現況における我が政治・組織の特徴は、先に挙げた街頭政治斗争の意志的撰択(現在の所では、フォード斗争以降やらないという撰択)と、他方での構想力、経験力蓄積パターンの他に、実務的、日常的領域の一年前とは比較にならない位の拡大(諸発行物、事務所維持、カンパ、オルグ域等)がある。また、他方で11/19沖縄裁判判決↓控訴、6/14早大裁判判決が、長期における9/16三里塚裁判は別として、69/71年以降持続してきた権力との緊張関係を特定

として状況判断されてきた。しかし、政治実践が、何をどのように為そうが大衆基層に届かず、空転するかに見えるという状況は構想力で突破できる問題ではない。共同幻想の構成が高次化し、同時に社会へ下降し、法的民主制の貫徹が共同性—共同体拡散を引き寄せるという自由国家の水準は、それを突破する構想力のキーワードを「共同幻想」の内部で示しはしない。ここにおける本質域での試行は、孤立した個体の首為を水準的に大衆性、流通性を有せぬ、後世の評価に待つ形でしか輪郭を表わすことではない。学問的にも、高低をもった、マルクスが大英図書館に通い十年の沈黙を耐え、レーニンがヘーゲル研究や、帝国主義論ノートを生前公開しなかつた形での精進が必要であり、我々の現下の組織状況も、系統的理論蓄積もそのような凝縮した表現への膨大な準備を突破しえていない。我々の構想展開は、省みれば了然のように、時代条件に、我々の撰択する対象域に、何よりも少数の書き手の経験や傾向性に左右されており、学問的に客観水準をもつ裏付けや、系統性をもっていない。私には、このことを決してマイナスと捉えない。政治思想も、政治実践と共に、時代条件に規定されており、歴史的幻想累積の引き寄せは、学問的踏襲やその水準内部での批判と異なり、我々自らの稚い斗争経験と日常構成からの大衆原像の繰り込みを介して、有意味性をもつのである。言いかえれば、我々が言うかくめいへの構想は、共同幻想内部の構成転換(宗教↓法↓国家への、個と対と共同性分離・編成)でなくて、全幻想域の構成転換(生活圏を場とした、個・対・共同性のあり様)として為されること、更に価値基底を明瞭にする(自己史と生活圏からの逸脱としての政治域)ことで始まる。

③ 当面の政治組織判断への序

(イ)組織領域の課題については、私はくどい位に内通やAIF通信等で述べてきた。ここにおけるモチーフは、日常関係や生活域や原則的、農本的共同活動の強調ととられるのは心外であり、むしろ「叛旗10号」等の展開は7・8・9号とセットで、現下の「政治」突破の方向、全幻想構成転換の視座、価値基底と表現を自立へ向かわしめる血路と考えている。

(ロ)政治実践が、身体行動としても、共同幻想構成としても孤絶せざるを得ぬが故に、全く機能的な事務、日常活動が浮上しており、ともすれば制度的組織の維持拡大への傾斜を危惧せしめる。しかし、ここでの問題は逆に単純に、いわゆる政治集団を組んでいる限り、金を集め、事務連絡をし、ムスケルをやり、オルグをし、文書を書き、アジをやりという不可避にみえる課題を誰が、どのように引き受けるかの相互了解である。このことは、政治本質が共同幻想にあるにも拘らず、政治組織の日常が個や対やの幻想や、生活的圧力や、自己総括の持続や、いびつな相互関係やの諸繁事に忙殺されざるを得ないということへの冷徹な把握と、同じ位の比重で日々組織として直面している課題である。全組織で、金を集め、オルグをやり、ムスケルを分担するという相互了解を意志一致しながらも、やる者しかやらないという白け方は、一方で倫理的断罪を生み、一方で幻想本質論を対置せしめる。だが、政治表現の突出が、歴史的幻想累積と現状との接点での幻想統括、構想化としても、行為の共同性が引き寄せる大衆の立法的契機としても標形化して表われているとき、個体表現と共同幻想の異和、民衆共同性水準と関係の拡散は、

された運動領域も、各々を個別に正当化、結合させて行けば、現象的に当事者間の勝敗や、使用者の首のステル交換がなされても、当然ながら脱イデオロギー化の尖端で、公害、エネルギー、技術、都市問題へ相互交流、交易をなしている資本制社会の枠組はゆるぐことなく、大衆、自己延命の方向を反逆から学び包摂し、啓示する側へ転移する(不可避性の問題として)のではないかとこの難所である。(ロ)現在、一切の政治運動が事実性として国家の壁の前で立往生し、当事者運動が共同関係の拡散と引き換えにしか果実を得られぬという醒めた状況判断は、依然として、それらの諸運動の形成契機は激成され、かつ敵さんは自由国家、資本制社会止揚の糸口を見出し得ていないのだから、何も身体行動や、街頭斗争をやらず、敵の混迷を眼をこらしてながめ、我々は幻想域の嘗為に集中し、敵の錯誤を組み込むという、主客転倒への誘惑を無為への吸引をもたらし。

(ハ)もちろん、上述における無為は、政治表現からいえば無為ではなく、ひとつの価値的行動撰択である。革命イメージは、国家水準の突破なくして構成され得ず、政治実践の对象的結果ではなく、身体表現を支える幻想性水準に規定づけられるし、政治集団も生活利害や、日常関係の円滑化を目的としている訳でないことは自明である。政治域は、その概念、実践、集団の全域において幻想性を本質とするということは、共同幻想、権力、行政組織を共同幻想、権力斗争、組織・階級形成で越えんとする限度で当然のことである。だが、このいわば国家というリヴァリアンを、のみにも等しい集団や、貧しい知力の傾注や、政策対置で越えんとする。矛盾は、本当の所はその矛盾の領域自体が時代錯誤である所にあるのだ。

政治組織を自由国家の最上位に押し上げている。自立を前提し、強制なき意志的集団内で、最も恣意が流通する。だが、この恣意は、他方で個と対家族と集団やの間で、遺構的自然との妥協の上で自己観念のきつさと、関係のきつさを取りちがえていくように見える。自由国家やインフレを問うとき、我々の構想と日常構成に注目し、天皇制や部落や共同性への個・対の収奪をいうとき、当事者の家族編成や日常関係意識水準に回収路を打つ立て方が必要なのではないか。日常構成の等価負担の前提の上に、書くという表現の部分化が可能である。

④ 当面の政治判断への補足検討事項

(イ)現下の政治状況は、昨秋以降の我々のためらいと内省に示されたように、革命はそのイメージ、概念そのものから転回されなければ、政治運動と革命との断層以上に、己の内部でも、共同的表現としても引き寄せ不能であるという難所を浮上させつつある。本質的にいえば、69年秋期決戦、連赤、沖繩斗争、狼等の対権力斗争が、その土壌を拡大させながらも、それらが百、千連続しようとして、現象的に当内閣の危機を導びくとも、決して、累積された共同幻想の頂点にたつ自由国家を突破しえず、遂にはベトナム(ソ連傾斜)、北鮮(対米親外交)、キューバ(OAS解禁、南米ヘゲ獲得)、パレスチナ(PLO-PPFLP分裂、国家形成運動)等のミニ版を、自演することを最上位とするにすぎぬのではないかとこのことである。他方で、政治運動で上述のようであると同時に、全共闘運動、砂川、三里塚、争議団、リグ等の社会的視座の側から不可避に形成

つまり、我々は、自由国家や資本制社会の転倒、圧政、階級矛盾を指摘しているが、それらは我々が各々の不可避な課題として直面するという回路を抜いては、ブルジョアイデオロギーの側の方が百倍も関心を有しているのだ。また、自由国家や資本制社会を越えるかくめいは、既存の全ゆる革命と、イメージも態様も、全く異なるだろうという予測を持ちながら、自己に尺度や規準を持たなければ、空想か、先行者の理論補充に止まる他ない悲喜劇は山積してきているのだ。更に、かかる政治本質(始源の本質と、対象の本質水準)は、遺構的宗教化や、利害組織化を除いて、集団編成とその持続を、概念、実践のいずれからも不可避とはしていないのである。

(ニ)さて、政治、実践、組織における上述の对象的壁は、その内部での諸操作では突破しえない。つまり、身体表現の突出、組織拡大強化から為しえぬと同様に、いわゆる政治運動における無為を構想水準の呈示で突破することは矛盾である。現況をよく踏まえた上で、イメージそのものが変わることへ総力を注ぎ、それはただちに実践、組織転換に連らなるとの自戒の下に、検討の視野は更に広く及ばねばならない。このことへの各自の注目と、表現、心的葛藤は、具体的解決の前に、現在最も秀れてかくめいの問題の中心点である。

⑤ 過程的、日常的、身体的行動について

(イ)以上の検討は△国家▽が高次化し、社会末端に下降しているにもかかわらず、旧来の枠組の延長では、何もやらず、考えたり、組織を持続させたりする不可避性を解体させられている△政治▽の位相を示している。このことは、△知▽や△理念▽を介した、知識層

の自ら自給合の準備が開始している証左である。その表徴は大学に
みてとれるし、自立的文章表現者の結合の困難は、映画、演劇、ジ
ャーナリズム全域を含め、機能的共同性と、知の切り売りが支配し、
内面の文学が花盛りである。この局面で幻想的に持久せんとすれば、
集団的に官頭型の内部意識と対応性を欠き、日常検証不能な古典
的転向へ至る。個体にとっては自己表現が（知の凝縮としての執筆）
共同表現を代位するという牧歌が醒めるまでの相互許容が対象とし
ても、投入時間が押し上げる水準としても自己表現の足を引き、大
義名分の付与に甘じることになる。ここにおけるアポリスは、本質
的に正しいとする構想域への傾斜が、自足的に共同幻想内部の思い
入れの水準獲得へ転位し、そのことへ自覚的に対応する活路は入政
治V内部になく、全幻想域に、また各人の現存域に存するのである。

(四)共同幻想を止揚する構想力は、三上氏がいわれるように「共同
幻想」の構成転換としてあるのではない。そうではなくて、自己に
還元される水準で自己幻想に包括される共同幻想、との意味での自
己幻想に關つていのである。イメージから革命が変わるといふ時
より徹底して自己基底から問われるべきである。

(ハ)政治本質における、概念、実践、組織における幻想的把握は、
だが、過程的、日常的、対権力的行動を包摂することはできない。
政治集団における日常的諸問題は、幻想域にも、生活域にも還元で
きぬ意志的活動の所在である。我々は、政治概念、実践、組織にお
いて為していることと、幻想的に考えていることの差は歴然として
いる。

(ニ)身体行動は、その内で含む幻想域の度合に拘らず個人に還元さ
れる日常を不可避に二重的に背負わねばならぬことの了解とは別
である。政治的組織における究極的課題は、結局は個々人に還元さ
れる日常的処理と、他方で水準的営為への努力へ關わつてい

天皇訪米が政治本質としては阻止斗争に値しないということ、

性を示すことは別である。

個々の身体表現を包摂し、許容することなく、政治の内部転回
はない。

実践的組織根拠は意志性の他ないのである。(了)

大衆的日常を不可避に二重的に背負わねばならぬことの了解とは別
である。政治的組織における究極的課題は、結局は個々人に還元さ
れる日常的処理と、他方で水準的営為への努力へ關わつてい

天皇訪米が政治本質としては阻止斗争に値しないということ、

性を示すことは別である。
個々の身体表現を包摂し、許容することなく、政治の内部転回
はない。

れる側面をもつ。先に述べた、政治、実践、組織概念の穴能化に留
まらず、不可避的表現は常に生起されるし、またいつも幻想的収約
を拒否してある。総括的に明らかかなように、政治集会と街頭斗争へ
の結集が、結集する個々人のみならず、オルグする側のメンバーの
執着構造においても差は明瞭である。

⑥ 価値基底と政治判断

(イ)入政治V運動帯域自体の拡散は、頭初述べてきたように、集団
的表現に激突するものであった。この局面は、まず革命のイメージ
から、変われという点からも、集団実践を点検せよという点からも、
個々人の哲学に還帰するのである。政治が、その概念のみならず、
実践問題として無為に浮遊するとき、知識層の課題として、そうで
あるということ、大衆的不可避性の問題を混同してはならない。
革命の原イメージは、修飾を除いて考えれば、共同的課題を疎外
態とし、個々における幻想性如何に拘らず、自前の課題に見解を述
べ、ただ一人の大衆にも意見を言い、自らの行動に張尻を合わせる
形で収約された。この幻想本質に還元される要素と、日常活動の不
可避性とは異質なものである。

(ロ)個々人に返していえば、個々人が固執する課題が、表現域=政
治域なのか、価値域なのかは個々に検討されるべきである。自立的
関係といつても、言語表現位相と、生活的沈黙相互とは比重が異な
る。政治関係が表現を前提にすること、価値的には了解の
他不能な沈黙の引き寄せの領域との差ははつきりさせておくべきで
ある。知識層が引き受ける課題が個々人に回収される他ないことと、

部へ還帰してこないという本質を有しているからである。そして、
その境界領域には、決して個人の思想や倫理に帰せられない、歴史
的現存性として階級疎外のシェルターが蔽として存在している。こ
のことは日常構成内部における個体の心的—身体的矛盾は、不可避
に社会的幻想の表出としてシェルターの外へ投げだされるが、表現
の内部によつては解放されることなく、日常構成内部での帳尻合わ
せとして解消される以外ないことを示している。七月BUND大会
には店頭になかったが八月初旬発売された文芸九月号における吉本
—壇谷対談における吉本発言は、上記のことを24時間—25時間問題
として明瞭に示唆していると我々は受けとめた。右対談は七月大会
における論争以降の展開に多大な影響を及ぼした。

我々の政治運動が諸個人の生活利害からでも、入表現Vの尖端的
水準的評価の側からでもなく、相互討論、集団行動、党派闘争の社
会的現実上の意志的激突にエネルギーを注ぎ、そこに終始する帯域
にあることが入その内部関係の24時間目であり、そのことに对象的
になるとき25時間目であるというV日常構成がさかさまにあらわれ
ている政治的生命や政治的死の領域の背後に、単なる一大衆として
ありたいにもかかわらず、そうすることを許されずに關係的な生存
や關係的死を浮上させていること。つまり内ゲバや爆弾に象徴さ
れる觀念の距離と關係の距離を錯乱させる時代状況の中で我々の
最低の鞍部は、日常構成の入場Vに政治表現のデッチ上げ方を明瞭
にしておくこと等が、七月大会以降全面論争の中で問われて来た
といえよう。

三、八月期の論争

(1) 同盟への三上意見書

(1) 同盟大会での論争は私自身にとつてだけではなく、全同盟的又いくつかの課題をつきつけた。この背後には我々が70年以降とつてきた政治活動自体が転質をせまられながら、その突破口を確定しえないことがあるが、そこでの理論的、実践的ふみこみをせまられていくことを意味する。その場合、主要な問題は、こちらの(主体)の展望である。旧来、我々をささえてきたのは大きくいつて△過渡期Vという概念のところに収斂する情勢論というか、情勢論があり、他方で革命運動自身の△革命Vをはらむ△かくめいVという主体論であった。この双方とも、60年以降の経験と、70年(79年)の経験的総括が中心というか、結節環になつていくことはいうまでもない。情勢論や情勢論については認識するチームの問題にいろいろあつたとしても、それほどのちがいがあるとおもわれない。その確認を前提的にいえば次のようになる。

(1) 現在(現段階)で国家や政治構成、又経済社会構成が法的民主制・高度工業制や農本制を超えるイメージが理念的にも実践的にもつかみえる段階であること。しかしこういつた体制や政治、経済社会構成に対する疎外感や矛盾はそれらに対する無関心や沈黙又急進的叛逆のかたちをとつて広範に存在する。それに我々が注目する理由もはつきりしている。それは国家や社会の外に疎外されている大

衆の、知識人の存在の仕方と、像的にも関係的にも社会的孤立を強いられているその契機に、革命的契機をみるからだ。

(ロ) 国家や社会の構成的像とダイレクトにむすびつかないとしても、ここでいう矛盾が、情勢的にきわめて本質的問題を提出していることとは明らかであり、それは人間と自然の歴史の変容ということになる。マルクス流に人間と自然の交流過程に、つまり人間の非有機的身体の拡大が、経済社会構成、又それを土台とする共同幻想、いかえれば共同性としてあらわれる人間と人間の関係の場合や、外的対象としての自然との関係の場合に、新たな歴史的段階というものがある。もちろん、性的関係としての人間と人間の間の場合も、個体の自己関係としてもそうである。人間と自然との相互规定的関係が、人間と人間の間としてあらわれるとすれば、それは共同関係や対関係や個体的関係としてあらわれるが、その空間的構造には全人類史の時間が累積しており、それ故に、時間—空間の意識や構造としてあらわれているといつてよい。

(ハ) これらが尖端的にはインフレ矛盾や中ソ対立としてあらわれており、日本では象徴的にいろいろの現象があらわれている。

(2) 情勢論自体についてもいろいろ深めなければならぬとしても、我々の主体論こそ重要なところであるが、そこでのポイントは2つある。69—70年の段階から、最近の一連の斗争(砂川、三里塚、沖繩斗争)の意味と契機を総括し、はつきりさせること。他の一つは我々の想起してきた、基礎イメージの再検討であり、これら二つの検討を根底に、最近の諸経験を媒介に具体的方向を提起すること

である。

政治を本質的に規定するのは幻想性(媒介的な心的媒体)であるが、ここには二重の意味がある。その一つは個性や対幻想性と逆立するということ。他の一つは表現と表出とが逆立することである。△共同幻想Vを死滅させるものが、自己幻想や対幻想、又日常生活過程のなかにかかないことは自明である。何故なら、それが自己幻想の共同性として疎外されるか、対幻想を軸としての社会的幻想表出をかすめとつていくことをたえず基盤とするほかないからである。だから△共同幻想性Vを本質とする政治自体の転換の契機が関係や共同性の基盤でありながらそれらから疎外されている大衆的立法契機の存在の仕方にあることは明らかである。

ここで肝要なのはこういつた契機が政治的表現と表出の逆立によつて逆立してあらわれてくるということである。政治的表出は、国家や共同体からその幻想性から解放されていく過程として規定され、それ故に、それらの外にある大衆的契機や、国家や共同体と逆立していく自己幻想の対象化による自体としての解放過程として想定される。だからそれは△人間の価値過程Vと関わり、沈黙の言語的意味としてあらわれるし一般的には共同的規範や概念のこちら側にむかうものである。(正確には法と対峙する市民社会の沈黙の共同性と家や個体のそれは構造的にはつきりさせなければいけないのであるが、ひつくるめて日常生活過程といつてよい。)この表出は感情作用から、発語、心像又身体像から心的共同性への複雑な構造とその提起する諸関係つまり空間作用と時間作用をもつていく。国家や共同性から解放されていく政治的表出が、政治的表出としてあら

われる理由は国家や共同性が歴史的現存性として自己存在そのものだからだ。

政治的表現がこういつた政治的表出と逆立するのは政治的表出が政治自体の場になげだされるとき政治表現の歴史的な連続性つまり歴史的現存性に規定され、その固有の帯域としてあらわれるからである。政治的表現が幻想性にもとつき、そのプログラムによる戦略—戦術、組織行動としてあらわれるとき、その大衆像や自己幻想の像(自己幻想とは表現の内部でも逆立している)をくりこむ志向性が、想定されたとしても、それ自体は(下降と呼ばれるとしても)政治的表出と逆立している。谷川雁が六二、三年ごろせみの全身運動に形容しながら行動自体に意味をあたえようとしたのは政治的表出としての意味をあたえたかつたのだと思う。けれど政治的行動は客観的には政治的表現とみられるほかなく、その現実性への押しもどしというところが評価の軸となつてしまふ。

この政治的表現と政治的表出は全社会的のみならず、個別的な集団や共同性の内部でも、個人の内部でもあると考えている。七月同盟大会での論争は、政治的集団の規定や関係をどちらに力点をおいてみるかということであつたらうが僕が政治的表現にアクセントをおいてきた理由はそれなりにある。というのは、政治的な表出は△政治的Vにみる場合、△共同的な倫理や規範Vというより共同性を構成する個々の関係としてあらわれか、非常に個別的(心的共同性)にあらわれると考えてきた。もちろんこの関係は、政治的表現よりはるかに重しい、重要であることは論をまたない。この関係のくみかたが男・女の関係概念を借りてきてつかつていくこともたし

かである。ここで僕らは感情作用から心像まで使つてやっているのである。そこでは人間は他者を自分として感じる事が出来るのかという問いが、愛憎劇とそのうち消して訪れる場であり、僕がそこでもいつも終始するのは距離の問題である。というのは関係矛盾や対立は時間・空間の場所に（人間の存在自体の）発し、そこを止揚するのは距離の問題を内省過程として課すほかないからである。

（理想的関係、関係の処理のしかたについて卒直なところを聞きたい）とすると政治的關係があらわれる場合、政治表現の關係として書くということのもたらす表現（その場合でも、書く内の過程から何かへの作成や配布まで含む）身体行為、沈黙表現までイメージされる。そこで例えば、組織表現の場合どう考えても倫理や規範としてあらわれ組織でもっともゆるやかなときも、それに對する明瞭な態度の欠落が僕の欠点で、そこはなんらかの形ではつきりしたほうがよいと考えている。

僕がこれに明瞭な態度をとれなかつたのは、政治的表現と政治的表出の逆立ということをはつきりつかめなかつたことであると思つている。組織問題での僕への批判をそのように受け止めている。

共同幻想性と集団編成の問題は、僕の考え方のなかでは、政治表現と政治表出の逆立性であり、政治集団が客観性へなげかければ幻想的媒体と幻想的媒体の関連であり、そこでは政治表現の連続性としてあらわれ、言語表現、身体表現、組織表現いづれにせよ、断えず、表現を介しての關係としてあらわれ、△宗教から法・国家▽としてたちあらわれる法的言語との対峙としてあらわれ、こういった歴史的現存性の止揚の度合としてあらわれるほかないと考える。そ

のつながりを不明にしようからである。共同幻想が本質であることは、どちらからみようと（裏から表からも）共同幻想性であり、政治集団が、共同幻想を媒体にしたそれであることは、はつきりしている。ここで、にもかかわらず共同幻想性と集団編成が二分法的にでてくる理由は、それなりにあるが、重要なのは次の点である。

(3) 共同幻想的媒体、それにもとづく政治的集団が（市民社会の集団も又ある面ですうである。労働過程の二重性）その構造において表現と表出が逆立しており、この二重性を自体として対象化しなければ、集団やそこでの關係を構造的に成立させないからである。表現されなければ、政治集団も政治自体も成立させることがないという面は、言語・行為・組織、どのようによればよようと、表現を介してしか成立しないところをもつており、表現したものの結果と表現主体（個人としても組織としても）の關係、表現行為過程の内部關係、表現されたものと、表現されたものの關係として、集団と集団の諸關係は成立している面をもつており、そこでの人間と人間の關係は、そのように成立するほかない面をもつていゝ。いわゆる言語行為も労働行為も同様の面をもつていゝ。これが關係の一面である。これに對して、表出は表現の母体でありながら、それと逆立しており、それは表現のこちら側にむかう過程であり、その共同性は心的共同性や沈黙の共同性と呼ばれるものであり、感情作用から、発語・夢・心像という過程、つまり表出像をもつており、そこでの關係づけや了解をおこなっている。これが關係の一面である。

ひとつの政治集団が危機としてあらわれる根拠は、ここでいう表

こでも、歴史的現存性へ自己同致していく、自然発生的過程から意志的に、自己幻想や生活過程のくりこみとしてあらわれなければ成立しなくなっている。

旧来の意味での政治表現の構造が、言語表現、身体表現、組織表現、いずれの場合も成立しなくなっており、その転質は、思想的には幻想の自然過程自体を対象化する方法と対象への視座の転換が重要となる。ここで思想的契機が大きな意味をもち、表現自体の下降が要されており、究極的には△共同性▽が自己幻想の共同性へ、生活過程自体の疎外する幻想へ下降させていくことが問われるとしても、現段階では、自己幻想や生活過程自体のとりだす経験的思想には落差があり、そのことは、当然にも表現の過程の中の課題と自己課題が、自己区分され、相互連環が考えられ志向されることは当然である。

集団編成は政治集団も社会的有機構成の一つとして考えられるようにみえる面をもつていゝ。その意味でそれは、日常的な生活過程と近似的な面をもつており、それら市民社会の社会的共同性（これは又一定の抽象をほどこした概念である）と近似的な面をもつていゝ。

この間七月大会での共同幻想と集団編成や所属があたかも、本質と現実關係のように二分されるかのようにうけとれるような発言に對し危惧したのは、こういった二分法が必然的に矛盾を生みだすからである。というのは、こういった区分は集団性自体がどこに根拠をおくのか明瞭とせず、現実の集団編成が、言語・行為・組織・表現を介して（規範や倫理から方針まで、判断も又そうである）面と

出や表現の両層での危機であり、その転位や転換の不可避性が受感されながら、そのことが不可能な意識、つまり表出像や表現像が對他↓対自性を尖つていくことで疎外感や孤立感がふくらむことである。政治的集団内での人間と人間の關係的他者としてあらわれる過程は、表現を通した關係も、表出を関した關係の危機である。

(4) 我々は、表現過程と表出過程の双方での危機は幻想と現実の双方における人間の存在のしかたの根拠をもち、構造的にみれば共同幻想自体の歴史的危機にみえた。この自体プラスへ転化するという判断を有してきたが、とするとここでの突破の途は次のように想定されなければならない。組織運動、つまり共同幻想（共同性自体）の、表現像と表出像の転換を思想的にと現実的に課することであり、これらを全社会的にみれば、膨大に拡大する幻想と現実における沈黙や孤立の拡大を発語せしめることであり、発現させることであり、そのことをくりこむことで、表現像や表出像を転換させることであり、それは構成の転換や場の転換として現象することはいふまでもない。

ここではまず二つの問題がある。その一つは究極のところでは共同幻想の死滅が権力を大衆自体に帰すること、自己幻想の共同性までひびいていくことであり、それは今日の段階では志向性や思想的立場としてあらわれるほかないとはつきりさせておくべきことである。他の一つは、幻想と現実の双方における沈黙せる大衆（知的を含めて）の発語や発現はレーニンやマルクスの自然史的、客観的制約をもつており（吉本は現実という言葉を用いている）そ

の意味で過渡性にあり、それと拮抗する思想的契機の重要さがあるということである。

これを前提にしてなお重要な点が次の二点である。それは共同幻想（共同性）自体の表出像と表現像の転位や転換をどこに定めるかであり、（過程的に）それは大衆的契機への下降と、自己的契機への下降と自体の集团的諸関係における沈黙的契機の歴史性と現存性の対象化である。ここで起こるべき誤解をさけておこう。それは表現像や表出像（正確にはそのくりこみ）と転質をここでいう下降と対象化ではたすという事は、政治的表現像や表出像の転換としてなしていくことは、それを社会過程の中に、自己幻想の中に解消することではないということである。市民、プロレタリアート、大衆原像さまざまな形で抽出されるものは我々の幻想力、幻想過程でのそれであり、これらが現実にあるときはことなっているからである。例えば、プロレタリアート、大衆関係像は、幻想過程でみられる限り、法言語と対峙する法言語のひとつであり、現実過程で人はプロレタリアートであると同時にブルジョアであり、それらは個別的に存在している。だから我々にとつて（幻想過程に拠をおく政治的運動）社会的契機をくりこみ、下降していくというのは幻想内容の問題としてあるのである。人間が現実的であり方の中で疎外され、孤立しているということは、幻想過程に於てもそうであり、その本源及現実的存在の仕方の中に基礎があることそのとり出し方がちがうのである。

吉本が24時間目といった風のはここでいう現実的存在のしかたのことであり、25時間目というのは幻想過程のことである。ここで吉本は吉本が日常の中に非日常をみるといったようにそうなのである。非日常は自体としてみれば日常の一つなのである。だから、非日常を自体として、日常と対立するものとして想定すれば、それはまた必然のように空想にいたる。非日常は日常が疎外する必然また不可避な存在様式としてみればよいのである。だから、それは日常過程をそのなかに繰り込むという課題がある。

僕が政治集団自体が、非日常、つまり25時間目としてとらえてきたのは、△もう一つの日常△という面をとらえてきたのは、広範な意味でそれが日常の一つとしてとらえられ、△日常△的課題、又△日常性△自体としてくり込んでいくことと狭義の日常というもの（家や労働過程）自体へ解消されることとはつきり区分させておきたかたということである。その背後には60年代後半の大衆運動論や歴史的現存性を存在（内在的）としてとらえ切れなかつたという経験がある。

さてもう一つの問題は人間の全社会的存在の仕方における二重性、つまり24時間的存在とその内部における△24時間△と△25時間△の問題は、△価値と意味△の問題等いろいろ語られてきたことであるだろうが、政治運動を展開する個々のメンバーにとつても、こういう二重性はあり、その問題である。私はこの問題を次のように考えてきた。△価値△の問題が、個の問題や家の問題であり、そこでの共同性の問題であるが、それらは個別的にあり、そこでの矛盾はそれ自体としてとかれていくほかになく、△共同性△はそこでの個は又別の存在であるというものであつた。

私たちは狭義の24時間と25時間を自体として、つまり個体にお

本のいつている25時間目というのは含みのあることばであり、次のような意味をもっていると思われる。その一つはそれが24時間目の世界と拮抗するものであるという意味であり、他のひとつは、25時間目というのが24時間目のつぎの時間というたとえではなくそれは24時間と重なりあつた包摂しているという意味である。吉本が大衆文学論や諸々の大衆主義を批判し、ある面で植谷氏を評価しているのは25時間目をつくれなくなっているが故に24時間目へ肉体的に下ってくるものへの批判である。25時間目は独立した時間であるが、24時間も含めた世界が25時間にあるのであり、そこでの孤立感や沈黙の拡大にたえられず、その結果が24時間世界へ風俗的に同致するか、混同していくことへの批判である。25時間的世界は25時間界の中にもうひとつの日常といふべき非日常の世界でもあるのだ。（僕は獄中をもう一つの日常となすけたはずである）

吉本が植谷へ向けた批判は、彼の25時間のとらえ方に向けられていたと思われる。

植谷の25時間目は24時間目と幻想と現実の異質さという意味で区分されているが、同時にまた、それが24時間と別のかくぜつされた世界としてとらえられていることつまり「もう一つ」という面はあつても、日常という面がないということであり、当然にもそれがあつても、日常ではないかという批判である。

植谷の25時間が何故、意志や「死」の間へ収斂するのかという心理とは別に、そういうだし方の空想性であり、それ故に疎外された歴史的現存性に根拠づけたのである。

この世には25時目はなく、それは24時間の一つにすぎないという価値と意味的価値の問題としてとらえてきたのである。とすればその連関はどうなるのか。この区分が、思想的に想定され、現実的に一定のかたちであるとしても、すぐに連関させられることは確かである。例えば、労働することを人間の全社会的存在の仕方として規定されているとき、そこでは労働主体とその表現とに分裂する。労働表出がなければ労働過程がないことはたしかであり、人間が労働過程として、自己自体と他者を関係づける場合、必然的に表出としては自体の内在性へ向かう過程としてあり、そういった関係はせいぜい職場での関係としてありきわめて個別としてたちあられ、それは社会的局所としてよばれるものであるが、そこが個別的事であることによつて、普遍的であることはマルクスの指摘をまっまでもなくたしかである。だがそれが△労働表出△は表現なしに外化されないことはたしかであり、そこで人と人との関係は労働主体と労働生産物の、労働生産物と労働生産物の、労働過程自体を介した関係としてあらわれ、そこでの構成を含めた関係があらわれ、当然価値の問題は二義の問題としてあらわれ、それは二重の連関としてある。この問題は政治過程にもあり、又性的過程にもある。

とすると共同性の内部でそれがあつたということでもあるが、自己存在の内部でそれがあり、表現としての過程でのそれが、労働過程と政治過程、文学過程で構成されるそれがある。25時間目ということ全般を全幻想の過程といえ、そこでの時間空間の編成と連環、24時間目との連環があらわれる。24時間しかこの世にないとなれば△その内部での24時間△そこでの個別の沈黙から沈黙へきえていく過程、共同性としておし出せば、表出像を軸とする職

場の個別的な関係に関する関係、政治にも、又つまり不可視の関係としてあること、その価値構成と、表現を介した関係と構成を自己としてあらわれるものとの関係である。

私が社会運動の自立性や、生活に対して政治が権力であるといってきたのは、すべての価値の源泉でありながら、個や家族や社会の局所の過程の中で、個の生涯の営為として消えていく歩みは、表現過程や幻想過程がくりこまざるを得ない対象でありながら共同性（表現過程を含めて）安易に介入してはならないのであり組織として介入してしまふことの怖しさへの自戒であった。

表現されたものの過程、関係性、連環として、幻想の共同性と他の幻想、労働表現の「場合」も含めた構造、（それは人間と人間の間では、非有機的の身体、もしくは抽象的人間の関係として具体化される関係）と、表出過程（もしくは表現のこちら側にあるもの）の連環、この構造・連環について明らかにしたいと（いずれ）考えている。共同性自相互体のそれと、個のそれを。

(5) 革命について、私がこれまで想定してきたのは二つであった。その一つは幻想的にも、現実的にも人間の社会的な孤立や沈黙をいられるあり方にその基盤を確定するということであった。この孤立や沈黙は無関心や空虚さでなく、人間の全歴史が生み出してきた時間性と空間性が入っており、その過程が、人間の生み出してきた言語・労働・性の対象的成果を疎外態としてあらわす、歴史的現存性と時代的そのの奪還を無言のうちに告知していると考えてきたからである。もう一つはこの過程は「革命」のかくめいとしてはたさ

が、「幻想上」の革命を不可避とするという理由は幻想的、現実的に存在することをしられる人間の社会的存在の仕方であり、だからその志向性は大衆的契機へ下降し、自体は迂回路としてせつていされてきたと思う。肝要なのは、ここでいう迂回路の内容である。吉本が情況の問題として「政治革命」ということを決して語らず、また「政治と革命は関係ない」といったことの内容の理解である。迂回したどりつく（志向する）ところが「価値」としての大衆的現存性であり、迂回路の自存的内容が思想であり、反政治的、非政治的契機であることは確かである。そのたまたかの対象が「共同性」や「共同幻想」としての国家であることもたしかである。ここで私連をなやましてつづけてきたのは私達の「共同性」や「共同幻想」、又「集団性」の位置と内容である。私達の「共同性」や「共同性」が、この世に「反体制的共同性」がないように、国家に打ちかつことがないことは自明である。何故なら、共同性や共同体のもつ普遍性が、その対他性をきめるとするなら、我々の表現する共同性が国家に収斂する歴史的な現存性としての種々の共同性や現存の社会的共同性の種々の段階の一つ以上をでないことは少なくなくも、現段階では自明だからだ。党派の論理をこえる「集団」や「共同性」がないことは現段階では明らかである。この「共同性」や「集団性」を反政治的、非政治的課題のくりこみではたそうとすれば、それは必然のように、お前の敵はお前だというように自己破壊的にならざるをえない。この矛盾は、一般的に、表現を介しての「共同性」や「共同性」の諸関係とそこらに沈黙的、価値的契機（思想的）と矛盾、対立しているのだといつてよい。もちろんここでいう表現は

れなければならぬということであり、それは当面思想的課題として、幻想上の革命としてやってくるほかないということであった。この認識はここでいう人間の社会的な孤立や沈黙をしいられる仕方の自体的発語や発現が、偏在的、局所的にしかあらわれないということと、人間の普遍的あらわれは一面では幻想を介してあらわれるほかないところがあるからである。

さてこういつたなかで私が一貫して矛盾を感じてきたのは、「組織」や「共同性」や「共同幻想」、また政治的運動と「革命」の連環と構造である。一般的には政治革命の部分性、と「先験性」というようにしてばくぜんと語られてきた。私は「大道無門」の中で、この概念について感じてきた疑義についてふれたことがあるが、マルクスが「ヘーゲル国法論批判」を中途半端なところで終らせざるを得なかつた理由もここにあつたと考えている。それ以降のレーニンや毛沢東がこの問題にどう対処したかについて多くを語る必要はなからう。革命という概念が、価値過程としての生活過程に於ける自己対象化による法的、階級的疎外からの解放、共同幻想から逆立する自己幻想のそれにもとめるとき、それは国家をもつとも上位とする共同性や「共同幻想」対立・矛盾することは明らかである。つまりこれまでの歴史的現存性の全段階の収斂としての国家、法に体现される「共同性」や「共同幻想」と価値や革命は矛盾するのである。反体制的共同性はないし、「家」や「せいせい」の職場を往復する大衆の過程のなかに「価値」や「革命」の源泉が想定されるという吉本の立論ははつきりしている。だから大衆の、その沈黙の過程が発語、発言し権力が帰するところにあることはたしかである。だ

書くこと、話すこと、行動（身体）すること、組織上の種々の行為をふくめてそうである。たしかに、私たちは表現のこちらにある契機、又思想的契機によつて、そちらを重むるということによつて、この矛盾をとこうとした。それがここでいう矛盾や対立そのものをとかないことはたしかである。何故なら、これらが立場をあらわしたとしても（それがどれほど重要でも）、また沈黙の共同性こそ環だといつても、それらが表現自体の喚起する矛盾、表現を介した関係のあたえる（つまり共同性のもたらす矛盾）はとかないからである。表現を介した矛盾は表現自体のなかで解消されなければならない面があることは確かだからだ。

例えば人は思想のために、共同性のために獄中に入ったり、入ることを強いることは人間の行為としてできないからである。本質的立場からいえば、「政治をするな」というのが最高の政治だ」思想的契機や立場としては共同性などかよるな、「誰れもたよらず一人でやれ」というのは疑問の余地なく正しいし、大衆になるのがいいのですよというのは当然である。共同性や共同体に生の意味づけをあたえやしないことは、当然なのである。

この矛盾が結局ぼくらの抱えている組織問題の「共同性・共同的諸関係」の最大の難所であり、そのやってくる根拠もはつきりしているように思う。その第一は本質的に、まさに本質的に、共同性自体が人間の価値や、かくめいと逆立するからである。価値としての共同性を想定すれば対幻想ぐらいなのであり、拡大しても職場のそれぐらいなのだ。それ以外価値を想定すれば表現価値という概念を導入せねばならず、心的沈黙の共同性というのは個別的にあるしか

ないのだ。

その第二は現段階の共同性が価値過程Vをくり込みえていない
そういう現実である。

私はまず第一に、この矛盾を矛盾としてはつきりうち出すべきだと考える。この現実認識があまり、現実を現実として認識することからしかことはじまらないからである。矛盾とは何か？価値Vや革命Vと私たちの共同性V、集団性Vが迂回路の内部で矛盾していることこの二つである。こういえば君は何故集団をくみ、共同性Vをつくっているのだという問いがあるだろう。人間的な存在として選択Vしているからであることはたしかであるが（人間の存在はある面ではことごとく意志の結果である）、これも含めて、私はまず不可避性とこたえる。この不可避性というものは人間の存在観として、非常に重いのだと考えている。人間が何故存在してしまつたのかという問いは、「何のために生きるのか」という問いや、「何のために人間は死ぬのか」という問いを拒否することが生きるということの現実性であるように「何のために共同性」や「集団性を組んでいるのか」という問いを拒否することが、その現実性（つまり自分にとって共同性や集団を組んでいる現実性）ということである。たしかに、このことはいろいろ語れるが、吉本が文学作品についていつていることと同様であるといつてよい。「なぜ文学作品が書かれるか」という問に対する唯一の本質的な答えは、気がついたらすでに言語の表現が目のまに歴史的に累積されて存在していたからである。なぜあるものは文学作品を書き、あるものは、それを生涯書

対的な進歩性であるが、矛盾的存在自体を解かないことはあまりにも自明である。依然たる国家や共同幻想の存在自体がそれを証明している。例えば、政治的集団Vをはなれば、共同幻想から解放されたのか。そんなことは共同幻想が幻想性であるから視えないように錯誤されているだけである。彼れが政治的、共同的表现に関係づけられていることは、我々が労働表現たる商品に関係づけられてくか現実的存在として許されていないように。

僕が△選択又、意志としての政治Vということにある種の留保をつけてきたとすればその理由は二つある。その一つは意志性を価値としてみること、又思想でもよいが、それは△政治Vや△共同性Vと逆立し、たえず矛盾するから自然発生性に対する目的意識性でもよいが、そこに定めるとき、僕のいう意志性と△政治Vが対立概念だからである。その二つ目は△意志Vということが主観であり、私たちの現実的在り方自体がかわるといことが真の実践性であるとするれば、それは表現を介したる在り方自体が（関係でもよい）かわらねばならず、この在り方がかわるという意味は、僕らの概念でいえば、表現の転位であり（組織・言語・路線—いわゆる政治方針であり）このことは誰れにとつてもそうであるような客観性でなければならぬ（そうでないとすればその過程がはつきりされていなければならない）ならない。何故なら労働表現とそれを介して関係づけられるあり方が（経済社会構成）世界的にしかそうならないことが自明のように、政治表現もまたそうであり、そこでの在り方自体もまたそうである。

我々は政治表現とそれを介して存在の仕方（関係づけられ方）を現実の仕方として解体されながら、それに拮抗するあり方を見い出

かないか、という問いにたいする唯一の本質的な答えは、言語への自己表出の欲求が、指示表出への欲求と交わる契機を創出する理由である。……」（言語にとつて美とは何かⅡ内容と形式）。

つまりこと集団を組んだり、共同性するという政治行為は、おしつづめれば人間の社会的存在の現存性そのものにあり、僕がそこにつれ出されているとすれば、偶然と必然のあざなわされた現実上の存在のしかたそのものなのだ。

僕にとつての△真の意志性Vはこういった現実の存在のしかた、歴史的現存性のこういったあり方と闘うことであり、そのとき僕にとつて重要な歴史的現存性としての秩序である僕自身つまり、政治的な存在自体と闘うことなのである。それは私自身の関係としての共同存在との闘いなのである。例えば天皇制でもよい、又赤軍派でもよい、それと私がたたかうとすれば、それは外在的な他者でなく、歴史的現存性として、共同存在であることをしいられている自己自体であるからである。

僕らが、矛盾自体をしいられた現実存在であり、それが現実的な僕自身の存在のしかたであり、この矛盾が、なんらかの選択のしかたで解決つかぬからたたかうのであり、この現実的存在のしかたと拮抗して、連赤や解同を解けるのである。僕が意志や選択という概念を慎重につかうのは、あたかも選択や意志がすべての現実的矛盾を解決するという自由国家の共同幻想そのものの傾向—自然発生性の過程である面をもっているからである。恣意的自由や私利私害の優先ということが、ブルジョワ社会の生みだした成果であり、相

せていないことはいうまでもない。この現実的な存在のさせられ方は、政治表現自体が徒労感を、又喪失感や沈黙を拡大させるものとしてあることを意味する。以上二つの点は△思想Vとしての意志性は政治や共同性自体と矛盾すること、そしてこの矛盾が△政治—共同性V自体の存在とそれによる関係づけられるされ方であれば、その表現（言語・組織・運動）の転位・質によつて、あり方が変えられるほかない実践性は、主観としての意志より、そこでは表現の水

準、水準だけが実践性なのである。
（確かにこの間言われてきた意志としての政治という言葉が、政治自体を否定するそれと衝突する生活価値や、思想をくりこまなければならぬという意味で使われていたという意味でそうだと思う。その場合思想は思想であり、生活価値は生活価値であり、△共同性—政治Vがそれである点をはつきりしていることも確かなら、後者のなかでそれは表現の転位としてあらわれるほかないということである。）

(4) 危機の突破へのいくつかの略

(1) 生活価値と政治—共同性の迂回路というものの内部での思想と政治の矛盾について（幻想上の革命と政治革命）についてその現実として認識することからはじめよう。このことはこれまで、立場論と現実的な政治実践の矛盾・政治と革命の断層というように語ってきた。

（未完）

△本稿は8月25日段階で、ここまで書かれて中断された。後注を参照されたい。V

(注) 同盟への八月三上意見書について

8月15日付叛旗に掲載予定の「対談形式」の口述筆記の文章は、「現下の問題に回答しえず、私的回顧談に終っているのではないか」との批判や、「表現内部での文体としては日常構成そのものをずん胴で扱っているのではないか」という批判に対し、三上も自信を喪い撤回し、公表されずに本人が所有したままである。それにかわるものとして8/15/8/25に断続的に提出されたのがこの三上文書である。論争の進展に対応して提出されたものだが、問われている現下の日常構成と集団矛盾への回答とは別次元での「概念整理」として、領域は多岐に錯そうしているだけで、判断に向う形で提出されていらない事が確認された(8/17、8/21中央委)。その場で現下の累積課題について総括文書と判断を提出することを三上は約した。が、それは9/24大会まで果されず、「総括と展望」という形での結論となつたのである。三上治は、I章の一「総括と展望」一文書で、事態を違えた言い方をしている。心的過程として歩みよりの努力、一緒にやれないのではないかとこの孤立感が大部を占めていたとしても、経緯としては対談形式文書は自己撤回し、本人が自信をもって組織に提起すると語った右意見書は、中央委員会における徹底した討論の上で中断されたのである。三上の見解は8月末から一ヶ月遂に深化も、文章化もされなかった。だが、8月23・24反帝戦

個々としての政治組織Mのイメージ、実践的関与の判断)に集中して、近年にない大会活発な論戦が展開されたといえよう。この大会は、秋期以降我々が何を為すかの政治判断を、9/29政治集会の興味、9/30天皇訪米への阻止斗争取り組みの是非、何よりも10月以降の政治、組織、行動イメージについて(中央委員会に判断留保する形で)集中した討議と決断を下せなかった。この矛盾は、合宿以降の政治的諸表現、組織活動上の、どの場面をとつても、何かやはり政治判断の停止に引掛かり、考えや、行動や、組織機能がすぐんでしまうという風にいびつな発現を呈していることは否めない。

② だが、私がまず結論を下さねばならぬと考えるのは、その前提領域についてであり、合宿で確認されたと思われる問題が依然として放置され、上述の次に決定すべき領域と混同して立ち表われている事柄である。7月B大会で、昨秋以降の集団問題が、個々の価値構成をめぐる所へまで下降して問われる。つまり世代的、自然年令的、政治経験的、場所的差というより思想態度の差という所での分岐の浮上を了承しつつ、ともかく組織活動への意志的関与と、日常任務、関係のキツイ条件をクールに引き受け合うことを前提として、秋の政治判断、構層官為への集中を、二重に為して行くという確認が全員でなされた(積極的異論が出ず、全員一致という沈黙を含めての意志表示であるが)。しかし、それ以降の組織活動の状況は、バカンスや、帰省や、お盆休みという政治外要素を除いて考えてみても、10号、B政治集会やとりわけ7月27B大会における各員の心的流動(これも確かだと思われる)に拘らず、依然として

線大会における清算的、クーデターの発言と、同時期入稿されたと思われる『伝統と現代』36号の(天皇制の共同幻想的根拠)原稿を省みると、既に8月下旬に三上治は『総括と展望』的結論を自ら下していたと推測される。組織内で回答すべき課題に沈黙をもって対し、ジャーナリズムに先取りに結論を述べるとは、生活の資のため

の売文の必要性を考慮に入れても本末転倒ではないか? この「同盟への提案」や「伝統と現代36号原稿」や「総括と展望」のどれをとつても、自らが自己史と生活圏Vの内部から政治運動の帯域での経験を透視する中でのことばVの表現ではなく、つまり自分のことばからではなく、出自不明なことばの羅列として人像を喚起する条件を欠いている。奇妙にも、文章構成としては規範だけは整っているという事は、我々が思想的展開力を衰退させても、人構造Vだけは連続するという力をもっているという恐ろしさ

(2) 75秋に際してのいくつかの提言

神 津 陽

① 諸矛盾の累積の中で、4/28BUND政治集会延期、7/1、東京7/5大阪政治集会強行、7/27B大会の結論持越しに至った。7/27B大会段階では、昨年来の、政治概念、実践判断上の諸見解の微妙な分岐が、主として組織問題(組織としての諸問題の以前に、

旧態の諸矛盾を解けぬままに打ち過ぎ、逆に心的流動が個々の判断のズレとして相互に足を引き合う局面も産まれている。

③ この局面は、秋期展望や政治判断の欠如が、つまり政治集団としての最大課題への結論、方針づけの不足が、組織活動を力に入らないものにさせていると一見思える。だが、私の考えは、その判断を成り立たせる心底において、ここで前提課題といっているものは、組織を意志的に組む際にそうなのであつて、個々人にとつてみれば持続的、現況判断にからみついており、思想的にみれば、かくめいの最終課題(空想ではなく、自己史の射程において、いかなる場を選択し、どのような出処進退の規準を定めるかの)に引つかかっていると思われる。戦線も関係域も拡大しながら、組織内部で青息吐息であるという現状は、やはり膨大なムスケルや組織化の心労や身体疲労を、クールに組織の共同負担として仕事を奪い合うという前提的想定としては回復不能であると思える。この最も単純な事柄は、わかつたこと、当り前のことと扱われながら、その内部には計り知れない落差があるのである。この落差は、実は各人の関心差や容量やつまる所は価値構成へのアタックの角度に規定づけられているのであつて、我が組織の諸矛盾は世界大の知識層、大衆課題に拡大しようという自負をもって、大胆に突き出す必要がある。その上で、共通項の想定、集団編成や、協力関係や、前出の前提事項が現実の課題足り得るのではないか。

④ 8/23、24A大会を目前にして「吶喊」、新聞、全国内通

他の遅れが目立ち、尚かつ各地区、フラクによる実践判断やオル
が力強く前面に出てこないという局面では、組織的にはシャニムニ
徹底して日常活動への没入と相互関係をキックたてるべきである

(1日來の諸経験的にも、そうせざるを得ぬのだが)。

だが、しかし、政治的なもの一切が思想、組織、日常が何か外
在的なものと立ち表われるという傾向、政治的なものの以前に心情
的結合が問われるという状況(もつとも、9/16、10/19、W大裁
判等では、ずーと前から浮上しているが)、自己思想表現の血路や、
日々の家族や職場での葛藤に較べれば組織、政治は二義的であると
いう傾斜へは、上述の前提的組織活動の強調や、相互激動などは無
意味である。組織はもちろん組織員で成り立っている訳だから、
何よりもその成員各員と、成員としての自らの課題に、常に還る他
はない。大会段階で提出された各員の、基本方向、関心差は、組織
展開と抵触している限り徹底して押し出されるべきであり、私はそ
のように為したいと考える。

組織問題は、その上での意志的再結集の途で浮上するのであり、
そこを外して旧來的延長で、知識が知識で立つ、領域を外へ向かつ
て、政治的に表現し続けることは何ら各員の心的葛藤や関係矛盾に
自発的発現契機を与えるものでないことは自明であると思われるか
らである。

⑤ 我々は、この間「叛旗」誌発行以降といつても、70年分派以
降といつてもよいが、多くの離脱者、生活転向等を営みながら、そ
の思想的立脚点や表現内容における分裂を為さず、他の諸派に較べ

ポスト通信の小山俊一氏に典型を見出しうる。子を産まない、必要
外の金を持たない、生活を徹底して簡素に強いる、限定された自己
の表現が通じうるとの信頼をもてる少数者に「通信」を送ることで
自らの思想管為を持続させる意志的発条とするという風にある。

また、大衆への下降を徹底して場の同在性に追いつめると、対極に
Set 6以降大正斗争に関わり北九州に住みついた河野靖好氏へ
典型を見出し得ると思う。退同の旧同志と労働、生活において等価
に実践する。居住地に規定されている部落運動や、対行政斗争や、
北九州段階での活動家の交流やでは、諸文書も方針も出すが、自分
がやることしか言わない。公的なジャーナリズム等へは登場せず、
自分に必要な範囲で諸資料を読むが、自分の持続力からかくめいの
問題を扱えるかと判断しているという風にある。

⑦ 小山氏も、河野氏も安保ブンドを経ての帰結であるが、小山
氏は知的関心と幻想性への執着から、わずらわしい生活、関係域を
そぎ落し、河野氏は場の選択と、そこで生起する課題から目をそら
さず執着し、知識を知識として扱う領域を排除する。もちろん、こ
のどちらも政治組織の問題(旧來的な意味では)ではない。だが、
現在の政治組織が、国家との衝突を集団力として対峙する途は、ど
のような革命の過程を検討してみても、旧來的パターンのいずれ
も想定しえず、可能条件も、ただ歴史条件の側からの介在を含めて
もまずこの所ではない。他方で、幻想性の水準で国家幻想を止揚す
ることは、不可避な革命の条件であるが、今の所自己幻想内部の構
想から為される他なく、現存的検証や射程をとった革命の媒介足り

れば驚異的な組織持続を為してきた。だが、よく考えればわかるよ
うに、69年秋期決裁、分派斗争時、沖—三—砂過程、インフレ—W
大斗争等の運動の突出や、判断の要請される時点で、沈黙下の意志
対立やメンバー交替が為されてきたのである。現在、生起している
思想問題は、9/16—11/19後浮上し、反インフレ斗争頓座W大斗
争—WAC図書館突入時で全面化した持続である。現下の問題はそ
れ故、自立思想や行動の問題としてある巾での転機であり、組織の
問題の以前に、思想根柢の問題であり、ここをつきつめ、經由する
ことなくして意志的な政治集団の持続の根柢はないと考える。

「叛旗」10号に至る(7号以降の)表現の基底を為してきたアポ
リアは、「共同幻想」を止揚する共同幻想というのは矛盾であり、
本当は自己幻想の内部構成の転位の中に核があり、自己幻想の共同
性としてしか政治的集団の構成は不可能なのではないかという事
である。他方では、政治実践が空転し、政治組織が常に内部葛藤や反
目を不可避とする発現は、そこをすりぬけたり、固定した政治悪と
把える他の、相対化回路を集団性に着目し(そこから生活圏、生活
思想を透視することによって)明らかに出来るかという事である。
その双方は、政治が、個人の文章表現と、他方で機能的ムスケルと
してしか立ち表われず、組織活動に力が入らないという状況で、政
治・組織への関与の各人の射程として浮上していると思われる。つ
まり、本質的にも、状況の圧力としてもA政治・組織Vがその場所
を追われているのである。

⑥ 現在、知的関心に殉ずるといふ姿勢を追いつめると、エクス
得ない。その意味では、A政治Vが、共同幻想を止揚する共同幻想
という矛盾域にも、実利的集団と異なる反権力集団としても、つまり
幻想的にも、現存場としても位置を占め得ぬ事態が現出しているの
である。このA政治Vの宙すり状態に対して、徹底的に自覚的に対
象化することは、即ち、我々の組織現況と、その基底を透視するこ
とに他ならない。A政治Vを死滅させる我々の政治的血路は如何?

⑧ 各員の現在の関心や射程を扱う時、本当は自己史の諸経験と
して幻想累積や、関係判断や、現存の家族、職場、集団位置が押し
上げているに過ぎない。

だが、ここではそれらを捨象して思想態度の問題として扱ってゆ
きたい。

イ 自己幻想が引き寄せる他ない共同幻想の水準、対象的世界の理
論的把握は、歴史的幻想累積に着目すればするほど、基礎的な蓄積
や検証的作業を含めて、膨大な個人のエネルギーこそが支えである。
ここでは、個人でやろうが、グループを組もうが本質的には関係な
く、日常や生活の構成も思想的クッションを経てしか問題とならず、
書かれたもののみが評価の規準であり、日常接触は相互介入しない
限度に留めた方がむしろ好い。金銭的収入の資とすることは別とし
て、時間や制約に規定されることなく思想の成熟を待ち、相互激励
のバネとしてグループ関係は「試行」や「あんかるわ」を想
定しても、「遠方から」を比較してもよいが、その水準や行末も私
には明らかであると思う。

イ 自己が選択している場で生起する全課題に応えつつ、自己思想を練る側への下降は、直接職場や大衆運動へ結びつかないし、言語（書きことば）表現へも結びつかない。ただ河野氏や、自治体、教組への意志的参加者のように、運動をやる為に職場へ入る場合は別である。必要なことは必要な限りでやるという所へ抑制的に吸収することが規準である。

ロ さて、現在の中途半端な人政治V位相は、何かしら知識人や、意志的大衆への下向への誘惑を常に換起するように見える。現状の中途半端性に自覚的である部分ほど、集団日常に着目している部分ほどそうであるといつてよい。たしかに、自己思想への執着は、組織展開が規制や限定条件になるといふ表われを持ち、組織の側からは結果としての表現の利用の他には、意味がないという所を持ち、むしろここでは表現への限定は、(イ)のように突破した方がよい側面はある。また、大衆的日常への執着は、何かしら政治からのきよりを置くという以前に、思想的に政治域へ固執せねば普遍的課題から外れるのではないかという危惧が足を引く張る。そうであれば、ここでも組織的限定を突破して(ロ)の道へ突き放した方がよい側面を持つ。

⑨ 本場に重要なのは、私は「10号」の次、自立と価値構成の次に表現と場の選択と射程をトータルに扱う思想態度である。大会の最後に出されたa集団や、家族や、日常がどうなるかと、実践課題が喪失しようとするという政治表現へ固執するという意見b生活的条件が自然年令の上昇でますますきつくなる以上、組織的政治へ固

やの引用や類推や概念整理やでは遺物の批判しか為し得ず、手つかずのまま構想が超立すべき野は拡がっている。

また、他方で時代状況下の思想表現は、共同性——共同体拡散下の知の自足性解体と、価値基底所在の明確化を誰に対しても迫っていると考える。

文芸九月号における吉本隆明（と植谷雄高）の五〇ページにおよぶ発言は、將に後者の問題として政治や思想を引き寄せてきた私（達）には、極めて衝撃的問題をはらんでいた。

⑩ 牧歌的政治が、物理力としても、共同幻想を止揚する共同幻想のマヤカンとしても、あるものとしての集団前提化としても、崩壊しているという判断以降、私の主要な関心は自己史と生活圏の時空で何を為しうるか、それが引き寄せる政治・組織・理論ではどうかという序列を持っている（逆ではない）。その視点からは、全状況と拮抗する思想として政治も文学も読み直され、自らの判断とどこが同一でどこが異なるかという読み方は重要であり、そのような内的葛藤の手ごたえのない文章は、どのような領域を対象にしているかと、知的関心に従った恣意的読み方の対象となった。

組織の内部で、あるいは対外的にも我々は、討論や表現連続性に規定されつつも、ある概念や視角からの世界、運動、組織把握、秩序を何度も為してきた。各々の時点での諸断定は、その時点で考え到った最上の判断の連続であるが、その視角や概念の分岐は、微妙な言い回しを含めて断絶があり、一八〇度異なる結論を導いたりもしてきたのである（三里塚、砂川、インフレ、W大、R大とりわけ組

執するには専従問題等と考えないとやれないといふ。政治は全思想における場の選択であり、その冷厳な判断の上でやれる所までやり、家族の病氣や自己の身体的条件の解体の場合は書きことばで表現するかしないかは別として、思想的持続は可能だし、価値的態度から言えばそちらを選択するという意見の分立領域への判断である。私はこのことにつき全面展開しようと考え、その判断差で組織編成、B拡充、地方問題等を扱うべきだと思ふ。ここでは、私は「文芸9月号」での24時間と25時間目をめぐる吉本氏の発言を、鏡として参考にし、討論に付すべきであると考え。

⑩ この間の諸議論の過程で私が考えてきたことは、同一の用語や概念を使いながら込められている内容の落差であり、百万言を費そうと概念や、ハンチュウ整理の測からはこの現下の組織内交通の危機は突破しえないだろうという実感であった。人は自ら為しうることしか考察（空想ではない）しえないということも、自らに都合よく、自らも他者も、表現結果も、表出回路をも解釈することができ、誰もがそう為してきているという事は全ゆる問題検討の前提である。理論水準を後追いするという学問的対峙は、その本質内部でしか現実との接点を持ち得ぬという断念の上に、知が知として立つ領域にある。他方で、時代や社会下の葛藤として浮上してくる思想は、その執跡と、自己証明を、読み手の側の再体験として可能ならしめる水準が評価軸である。我々は前者の領域で、あたかも社会主義リアリズム批判の对象的無効性の判断の下に言語表現論を構想した吉本氏と、政治域で同一地平に立っている。つまり誰や彼

織問題、労斗の扱いetc。对象的課題を納得のいく形でわかりたいという精神衛生上の欲求は、何故か一視角からのトータルな分析を自己納得しがちであり、「で、どうなのだ」という時点で分解に到る。世の中は、本質的にマルクス等が科学的に解明した法則的問題の他は、対象的世界としては、引き寄せの論理や尺度に依じて幾通りかの解釈は可能なのである。

自己における对象的課題を自ら選定し、判断し、実践することが各員の必須の問題であり、そこからの不可避性としてのみ共同的課題、対象はある。この間の諸議論で欠落していることは、かかる問題への各々の内容を含めた検討である。現状をどう解釈するかは、組織の連続の問題であるが、私はどう変革するか、誰が、何を共同的に為すのかを問答したいのである。

⑫ 文芸九月号における吉本の発言も各々に都合よく解釈される側面を持つが、私は諸解釈の成り立つ前提域、思想態度をこそ問題としたい。

⑬ 「一日が二四時間としまして、全部やってみると、一日二四時間全部それにとられてしまいかもしれない。そうしましたら、二五時間目をつくれなければ、革命なんていうのはやるな、というふうになるわけです。つまり、革命というものはあるとすれば、それは（大多数の）人がやることは全部やって、二四時間全部使われちゃったのならもうそれで仕方がない。そう

なっちゃえということですよ。」P・二四四

⑭ 「もし革命の部屋でも、文学の部屋でもよろしいんですけど、

そういうもの、あるいは想像力の部屋でもよろしいんですけども、そういうものが必要だったら、二五時間目をどこかでデッチあげるよりほかない。デッチあげてそこでやられるより仕方がない」P・二四四

◎ 「政治とか、革命とかいうものは、二五時間目の箱だから、二四時間の中に接收しなくてもいいわけだし、そこに拠点がなくてもいい……」P・二七八

⑩ 「だからおそろく、ある志向性といましようか、その方向性というものを絶えず示し続けられるということ、二五時間を作ってその箱の中にいるという自覚というか、あきらめというか知りませんが、そういうものを起動力として、二四時間の中に存在する世界というのを、絶えず観念でつかまえていければよいのであって現実的な接点みたいなのは要らないんじゃないか……」P・二七九

⑪ 「かろうじて、何か二五時間目の暗箱が残ってて、そこですらいろいろ突張っているところがあるんだけど、消滅する方向はどういうふうに消滅するかといったら、やっぱり、二四時間の範囲内に退却するというが、もっともインチキに消滅するほうの考え方を扱いたい。」P・二八四

以上が、断片的に触れられている二四時間の問題のほぼ全ての引用である。最初から現在までの作品を、たどって読みうる全存する唯一の先達とも言つてよい、吉本氏の発言として、ここで述べていることは、この目づまりな状況下での彼自身の思想態度である。つまり、理論域での心身相関や、日常と非日常や、知識人と大衆やの

自にかくめいへの直面を迫ってきたといつてよいと思う。

だが、そこでも勿論、幻想課題と集団問題は二元化されるものではなく、不可分な政治・組織連関をなすと自覚しつつも、現存的リアリティを獲得する理論創成の方途を探しあぐねっていたのである。革命が、現下の政治理念、組織、実践のプログラムが引き寄せ得るものではなく、政治外的契機へのコメントとしてしか成り立たぬこと。我々の世代的射程として、政治革命への時代の側からの契機を、この日本において（もちろん世界革命以外ないという意味を含めて）透視しうる段階にないこと。我が政治・組織の宙づり状況は、徹底して時代的政治状況の自然過程の反映であること。牧歌的政治のかかる終焉は、幻想表現の個別化、持続自体を目的とした集団編成の矛盾として、共同性——共同体として不可避的表現、受容の解體であり、意志的構成こそが問われねばならぬこと。等が、検討、確認されてきた。

さて、以上の政治・組織状況の下で、その意志的構成の中味に私は照準をほつてきた心算であるが、共時的状況下での、何に同意し、どこに差異があるかという現存思想への評価の際にひっかかっていたのは、意志的構成の消滅へのイメージであった。

言うまでもなく、不可避的政治は、その有効性において構改Mであり、その本質を示すものとして内ゲバ、爆弾が尖端的約発現であり、両者を拒絶する政治は非政治的、反政治的媒介をくぐる他ないという判断は重要である。しかし、非政治的、反政治的媒介を引き寄せるA政治Vは、いわゆる上述の政治・組織としての不可避性の域にはなく、成員の意志によってのみ構成される。この時、その故

構造把握の延長上の問題ではなく、それらの理論作業も含めて、自己と存在の革命への態度を示しているといつてよい。

AとBは吉本氏にとっての切実な現在的問題であらうし、Bは幻想の、O・Dは政治と革命の間、射程への一知識人としての傾聴すべき見解である。

⑬ 我々が何をどのように為してきたのかとは別に現況を考えること、A政治Vという対象的共同性と、組織という日常編成を拒む不可避性は、時代状況の側から解体されつつある。もちろん、どの場で何を考え、為そうが、自由国家——資本制社会はつきまとうし、権力による戒厳状態が新左翼を封じ込めているという判断は正しい。だが、戦後社会の恣意的行動と私的自らの甘受を良き徴と認め、更に全共斗以降の共同性——共同体からの意志的離脱を評価するならば、当然A政治V域の場の喪失をも評価せねばならない。この現況に應えることは、基本的政治選択の内容、方向、関係がこそ問われているのだ。

私は、言語美や、心的現象論や、共同幻想論を著わした吉本氏の理論持続に脱帽するが、それ以上にここ七年ほど、共時的状況下の彼の思想的進出退、感性的対処に着目してきた。我々が政治M、組織に関わりながら、為してきた判断と照し合わせて、年の加え方の我々とは別の形の鏡として注目してきたといつてよい。

我々の旧来的政治理念、組織、行動のリアリティの欠落感、革命の構想水準の検討においてよりも、その場の持続、集団問題への執着の中で（被告や、離脱者や、労働関与や、日常構成やetc）独

⑭ ⑯で引用した吉本氏の発言は、かかる時代状況下の、牧歌的政治解体後の、政治——文学域を含めた思想態度、価値的行動としての意志方向を、彼の見解として述べたものと取れる。

二四時間問題は、その意味で、表現論や、表現内部での批判規準よりも、もちろん政治理念、組織、日常域よりも、中広く、根深い提起である。ここで発言されているのは、単純化すれば、彼の生活、思想態度と、表現の死滅の方途であるが、構造や分析の問題ではなく、日々の実践の問題であることにこそ私は着目する。

私は、意志的構成は、ここで扱われている領域を、革命・組織の本質に関わる実践規準、評価基底として繰り返す他はないのではないかと、我々も共時的にこの壁に衝突しているのではないかと考えており、討論を要請する。

ここで、言われているのは個人の思想態度の問題であり、組織的規準足り得ぬのではないかという疑問へは、表現をめぐめる角度、集団異和、関係矛盾、任務分担、沈黙の共同性etcのいずれもが、自己証明不能なイメージ交換や、概念整理やの空転の背後で、組織的にも（上底、転位して）この壁にぶつかっている点を直視せよとすべき。

単純な、わかり切ったように思える判断こそが、実践的に困難である。政治組織は出身階層、階級の如何を問わぬというレイニンの規定は、他面で規範の強制と、生活不介入という対極を産む。我々の共同的に為してきた矛盾実践、理論基礎、組織出入過程を、我々

の問題として厳密に総括せねばならぬこと、私が言う意志的再構成は短絡しない。我々にとっての革命、政治、組織の本質問題（もちろん状況の本質であり、構造解釈本質ではない）を問い直すことは、結果的同一性の悲観の上には必要ないのである。

⑩ 我々における意志的構成の領域、嘗為、消滅の規準を⑨の検討から為すとして、ではかかる自らの政治組織についていかばかりも卑下もせず、各員の場の選択と消滅の規準をも相互に了解した集団は何を為すのか。

この所では、⑩域が徹底的に各員でつきつめられていけば、抑制的、原則的政治活動は可。対象は二五時間内部でリアリティの根源へ突き進み、自己史と生活圏射程と感応可だと言っておきたい。

註「秋に際してのいくつかの提言」と題する神津文書は、この間の△表現▽を軸に六〇年以降BUND系とその周辺で思想力をもって来た諸家の経験と我々の選択の現時点での対比の中から現下の論争の世代的・個性的な現水準を客観的に遡及せんとするものである。

この文書が直接には三上の「表現者を軸にするやかな連合」として政治運動の帯域以外から政治問題を扱おうとする傾向への批判として八月中旬に提出されたが、△表現▽の内部本質への踏み込みへ至る一歩手前で俊巡する我々の時代判断への試みである。一人勝手に「表現者として自立する」と意志した三上の拠って立っている位置そのものにスポットをあてて、^{8/17}/_{8/21}の中央委員会で検討され△二四時—二五時▽問題への対象的扱いの論争への過渡を示すものである。三上治の意見書内の言及と参照されたい。本論争の継

△編集後記▽

全国の同志・友人諸君へ『叛旗・特別号』をお届けする。本年初頭以来の党内論争は、ひとつの帰結と多くの課題を残したといつてよい。今夏に凝縮した論争は、諸党派の「倫理的威容」による形式論争や、愛憎の劇にも似た日常域での瑣末な契機に革命論の意味付けをやる手前味噌風なあり様でもなく、透れて情況の本質に抵触する政治・組織判断をめぐるのであった。我々は、昨年六・一八共產同政治集会以降の米審粉砕—フォード来日阻止斗争を頂点とし、旧来の我々の実践自体が時代の壁に直面し、我々自身の経験尺度も構想力による突破もまったく空転せざるをえない状況に追いやられた。しかも、日々押し寄せる生活圏での時間意識や関係意識の多重化は、政治実践を把える基盤自体をも再検討することを強いられ、従来の感性や心情の共通項はまったく解体しているのではという直観とあいかさなり、事態は加速度的に進行していった。本年初頭の△戦後価値▽をめぐる評価と基準の論争は、政治組織自体の水準と位相、△かくめい▽の根拠そのものを鋭く問うが故のひとつの小括であり、施回軸でもあった。だが、問題の集中環はその先にあったといつてよい。四・二八政治集会の中止決定と延期への過程、七・一〇五政治集会の強行の底に流れていたのは、今日までの我が叛旗派の共同営為にたいする判断軸・評価・方向視座が欠落した延長線上では、まったく事態の矛盾の上げ底化が、上乘せ以外は何も局面打開へと導くことがないのではという、退歩がきかぬ危機感であった。無数の離脱・自死・発狂・獄中者が思想と関係のなかで狭撃を

続は、Iの各文書として言及された。△二四時—二五時▽問題を、我々は政治帯域内部での政治死滅への回路、個体にとっての思想の連続性と場としての政治組織連関として置換せんとした。三上治は、全くこの問いに無頓着であり、敗北や徹収を予測だにしない、常に個人として勝利し続ける政治思想なるものを対置した。幻想的にも、日常的にも切実な状況を三上治が手離した時、状況も三上治を突き離れたプロセスは、哀しいまでに鮮明であろう。

受け、△共同性▽自体のなかで何処にも回収されず浮遊している事態に眼を瞑ることなく、死滅と回収の営為をなすことが思想と関係への態度ではないか。ここにこそ時代と情況の壁が横たえているのではないか、という洞察である。ここでの三上治の組織領域のひとつの結果は、根底的な政治思想と関係における徹底した討論、心身伴に疲れてもなお、一条の光明を探し出さんと努力を重ねた結論であった。ここに凝縮した論争は、拡散する自由国家と資本制社会の下で△共同性▽自体の水準と位相を対象化し、避けることなく死滅の論理を実践思想としてなさんとするか、否かであつた。一八〇度異なる結論を導くことを教えた。

本号は以上の経緯をもとに、従来の『理論誌』の構成とも異って、事態の緊急性と対権力・のぞき趣味の輩への考慮を入れつつ、公開性の原則をもって今春以来の組織内文書、同盟大会への提案・意見書・見解表明を軸に構成した。時系列から言えば、流れは後半から前半へと推移しているが、論点の浮彫りと鮮明化、評価軸と判断構成の展開から言えば本号の構成が最良であると判断した。章は、9・24同盟大会への提案と意見と諸見解である。三上治の「総括と展望」以外は、大会文書として、各機関の個々の文責で提起された。決定事項は△序▽を参照の事。章は、7・23—24全国A大会を前後して、組織日常活動に抵触する範囲と当面の方向づけを基軸にしながら、提出された、『中央委通達』、『全国AIF通信』のなかから選定した。章は、本年初頭以来の実践的諸問題への回答、組織活動上の判断素材、『叛旗紙』論文のレジュメ等のなかから、9・24同盟大会に至るまでの文書を扱った。これですべて、事態の

本質や背後に累々と横たえている心的過程が読み取れるかは心もとないが、これ以上は読者諸兄弟の持続的な関りのなから判断を委ねる以外にないとおもわれる。

我々は、今夏以降、急激化した党内論争の帰結にたいして、深い悲しみとへかくめいへの正念場であると想い、その多くはへ話したことはVの領域で解決の途を考えてきた。叛旗結成以降、我々の念頭にあったものは、年輪を加える度に決して楽にはならず、ますますキツクなる日常場と政治運動帯域において、絶えず、関係への心的葛藤とへ共同性V自体の対象化への試行錯誤の連続であるといつてよい。この領域を放棄した如何なる政治理念・組織・実践も、思想そのものも実際、情況の浮遊する現象へと同致すると考える。我々は、この教訓を対象化し更なる歩みを進めたいとおもう。

全ゆる側面からの本紙への読後感、質問、意見等を歓迎する。誠意あるものである限り、責任をもって返信する所存である。

(補) 我々は、三上逃亡問題の事実関係での応酬からは何も生み出すことはないと思慮している。我々は、政治指導や組織活動上のあれこれの事実を根拠に三上個人への批判軸をたてておらず、本号で示す如く思想問題の領域に集中して為してきた。事実の応酬を超えて、かつ現在時点における全党派に抵触する根本的な思想問題としてこの間の論争の公開を為すことは、全ての「叛旗」読者、関係者への我々の義務であると考え、本号に到った次第である。

政治組織においては、対外的に「理論誌」や「新聞」で公表する表現に、数倍する内部文書群が存する。本号では、それらの内から、

今回の三上問題に抵触する範囲で、代表的文書をピックアップした。相互人格批判等に関する部分は省いてあるが、三上自身の希望があればいつでも公開する用意はあることを付言しておく。

一九七五年十月

共産主義者同盟

『叛旗』編集委員会

叛旗

共産主義者同盟

共産主義者同盟政治機関紙 「叛旗」の定期購読を!!

毎月1日・15日発行
定価 一部二頁五〇円

定期購読の申込みは、開封、密封の区別を指定し、料金を添えて、現金書留か郵便振替で。

一、定期購読料金（郵送料共）

開封 半年（12回）八〇〇円 / 24回 一五〇〇円
密封 半年（12回）九〇〇円 / 24回 一八〇〇円

二、送り先
新宿区百人町一の一の一の三一 斎藤ビル 蒼氓社

三、郵便振替
番号 / 東京一六二八五六
宛先 / 共産同「叛旗」編集委員会

切り取り線

機関紙「叛旗」の定期購読を

（開封・密封）で（半年・一年）申し込みます。

（該当するものに〇印を）

住所（〒）

氏名

TEL(自宅)

(勤務先)

『叛 旗』

特別号 頒価700円
(〒1部115円, 10部以上無料)

発行日 1975年10月30日 700円

編集者 共産主義者同盟「叛旗」編集委員会

発行者 共産主義者同盟 03(362)0149

連絡先 東京都新宿区百人町1-11-31
斎藤ビル5F 蒼々社気付

郵便振替 東京 162856
(宛先：共産同「叛旗」編集委員会)

第 七 〇 〇 五 號

2011年 11月 10日 星期一 第 30期